

西報

¥1500

風俗奇譚

目で見る変態風俗絵巻

責められる女体緊縛写真新作集
アフターマール秘面の珠玉誌上展



2

昭和三十五年七月十五日発行

画報風俗奇譚

2

目で見る変態風俗絵巻

報風俗奇譚 昭和三十五年七月 五日印刷
昭和三十五年七月十五日発行



定価 180円



芳年筆の「志度の
浦の玉取り海女」

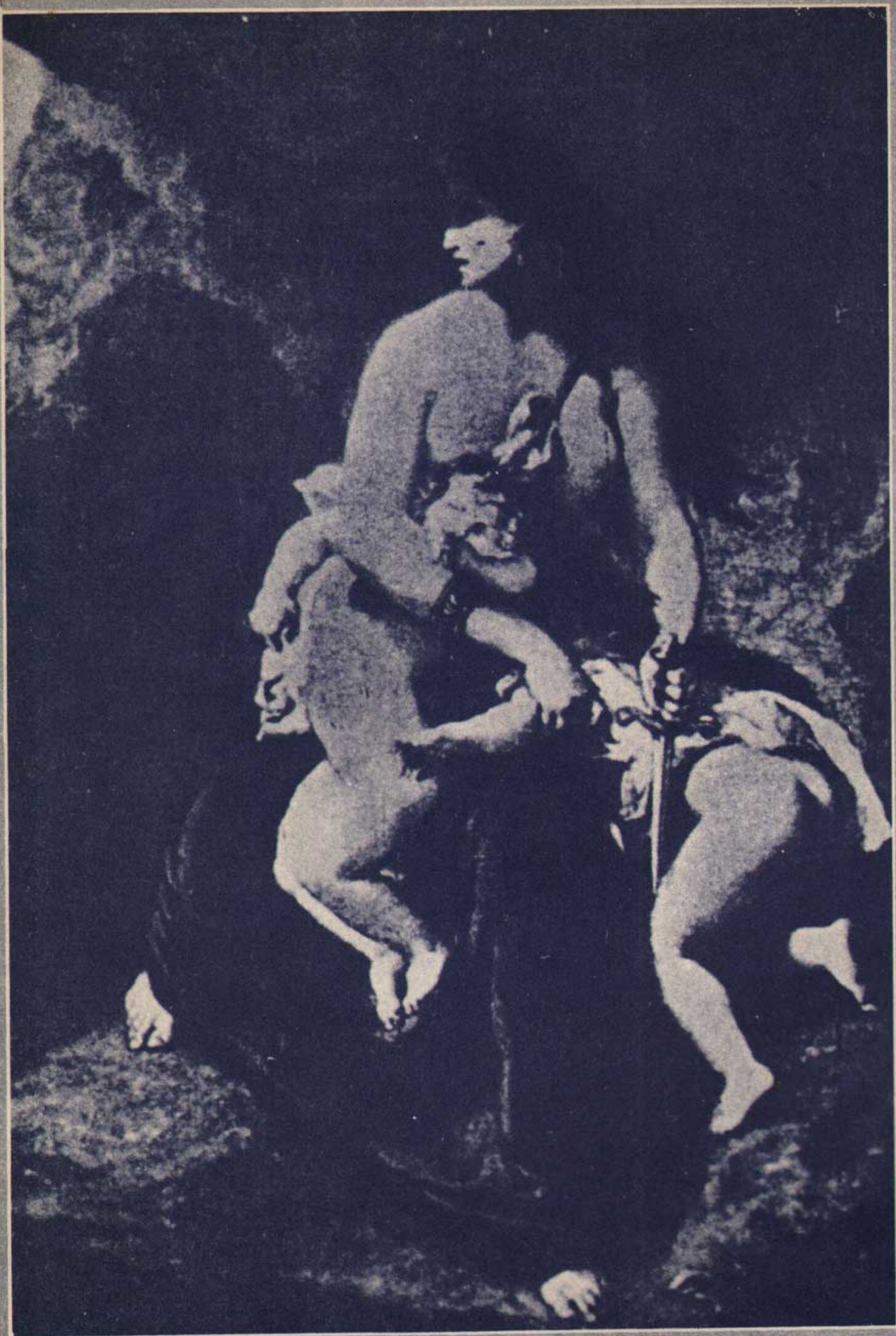
天武天皇の七年、藤原不比等は亡父鎌足の追善供養のため奈良の興福寺に釈迦堂を造営した。それを聞いた唐の高宗は三個の宝玉をおくったが、その船は、本土の志度の浦、房崎の沖にかかったとき暴風雨にあつて、その玉の一つを失った。24センチの玉中に釈迦三尊の立像を刻んだ見事な玉。不比等はそれを残念に思つてはるばる都からさがしに来たが、一面の海原に途方に暮れた。そして三年たち、そのあいだに不比等は海女のおとめと結ばれて男児をもうけた。

おとめは、夫のため、子供のため、海にくぐつて大ダコと戦い、玉を奪いかえすが、自分もまた息をひきとってしまった——と、今も残る純愛の伝説を主題にした。



とをけさぬあまのちまひ代りとする
盛をその様い感して
弘み發心して
文覚上人と名づる

国芳筆の“遠藤武者盛遠” 平治のころ、北面の武士に遠藤盛遠という十七歳の若者がいた。渡辺直の妻・袈裟御前に懸想し、その夫・直を殺して袈裟を手に入れようとしたが、袈裟がその身がわりになったので、一念発起して出家し、文覚上人となる。



子供に剣を擬すメドーサ

第1グラビア

鴨居づり	……(一一)
女の置き物	……(一四)
人間の荷物	……(一六)
海老責め	……(一八)
水にひたされて	……(二〇)
緊縛艶姿	……(二二)
脚立責め	……(二四)
静かなる悦慮	……(二六)

(多色口絵) 池畔の愉悦……………(折込み)
(写真口絵) 陶醉する女体八景……………(四三)

第2グラビア

椅子しぼり	……(二七)
美囚六態	……(二八)
白い人魚のもだえ	……(三〇)
美しき人柱	……(三二)
ベッドの残虐	……(三四)
亀の子しぼり	……(三六)
四つの妖花	……(三八)
愉樂の責め道具	……(四〇)
水辺無残	……(四二)

第3グラビア

暗闇のよろこび	……(五一)
犬になれ	……(五二)
木に縛られて	……(五四)
座布団も責め道具	……(五六)
さかさ海老づり	……(五八)
嗜虐を待つポーズ	……(六〇)
女体の微妙なナゾ	……(六二)
なまめかしき余情	……(六四)
冷たいタイル	……(六六)

海外残虐譚

人間ステーク	……池内真一(二〇八)
死の砂漠行	……北原雄三(二一〇)
愛欲に狂う氷原	……国枝護(二二二)

マゾヒス
チツク

乗馬服の女たち	……(八三)
マゾヒストの描いた女	……(八六)
同性嗜虐	……(八八)
自虐画	……(八九)
ズボンをはいた女たち	……(九〇)

絵画館

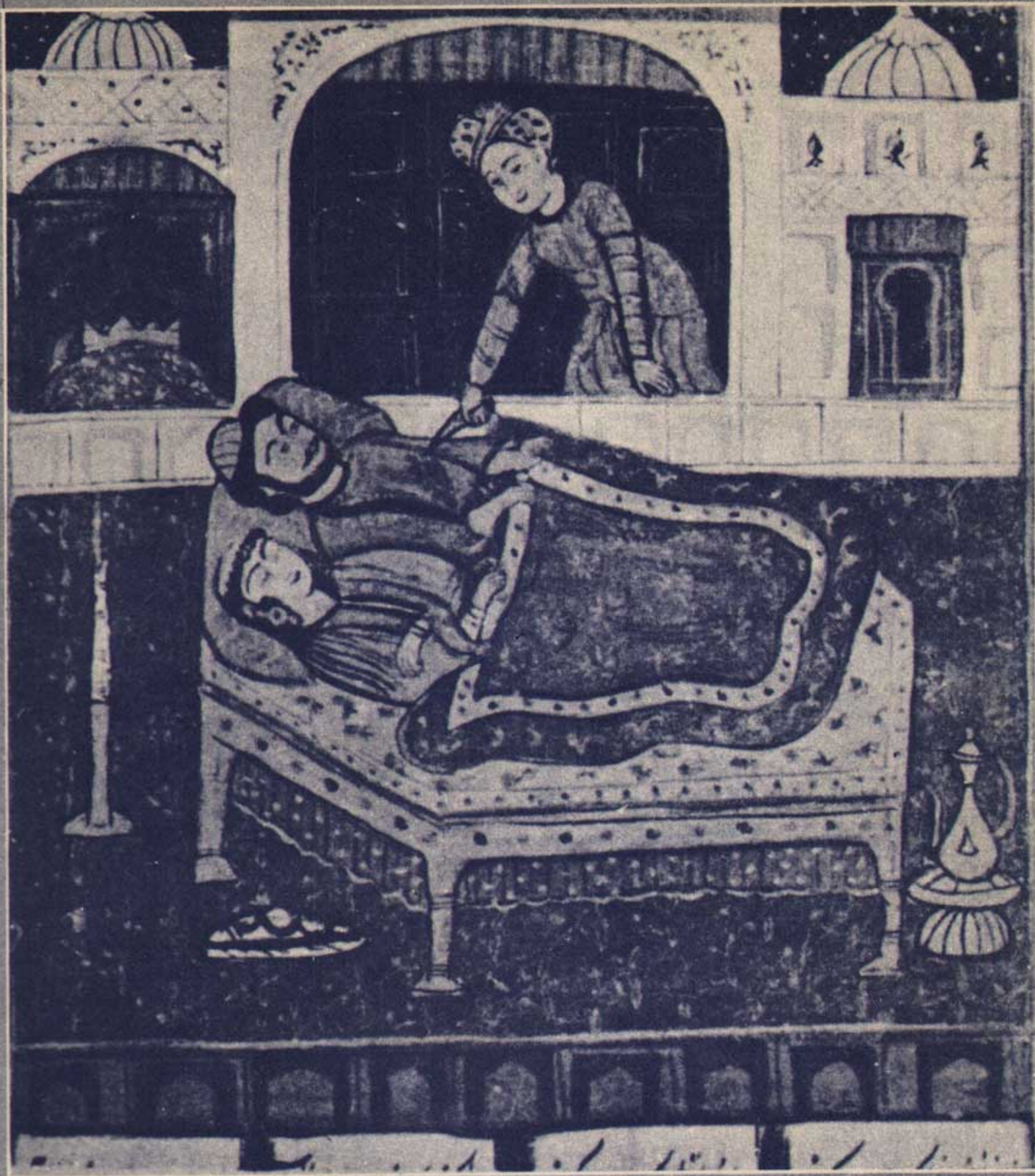
フオリス偏奇莊奇譚	……殿村七郎(九九)
絵物語恋の一念、蛇となる	……小田利美(一〇四)
悽慘、目を覆う殺人現場	……(一一〇)

絵物語狂恋吉弥責め	……団令太郎(一二四)
絵物語ギロチン台の美女	……重山規夫(一二四)

アブノーマル
秘画展

鞭打する人々	……(六七)
残酷なる刑罰	……(七六)
奇妙な連中	……(八〇)



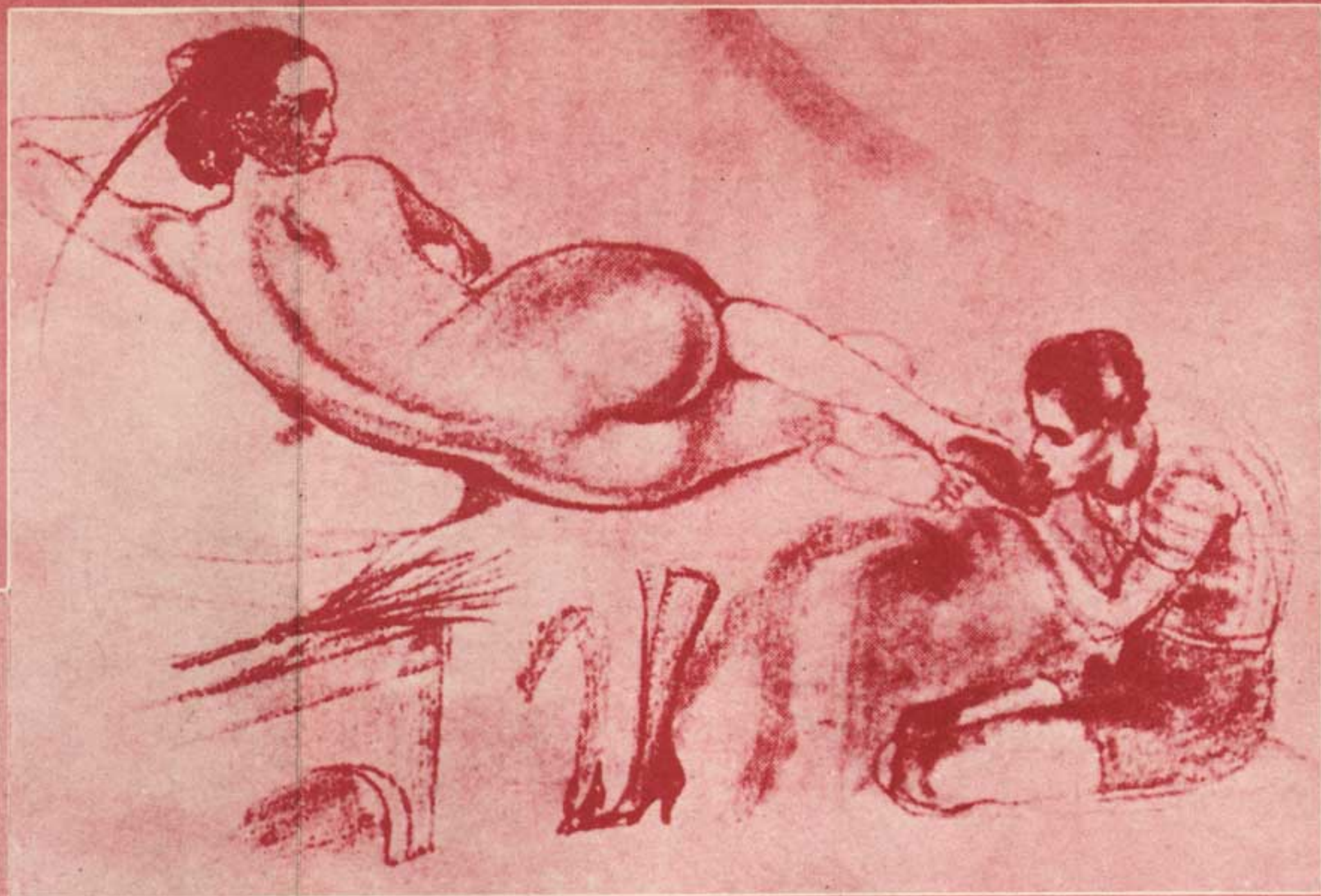


嫉妬のねた刃



池畔の愉悅

右はヘーゲマン筆
「女天下」のなか
の足なめ、下はイ
ギリス版の小説の
さしえの足なめ。

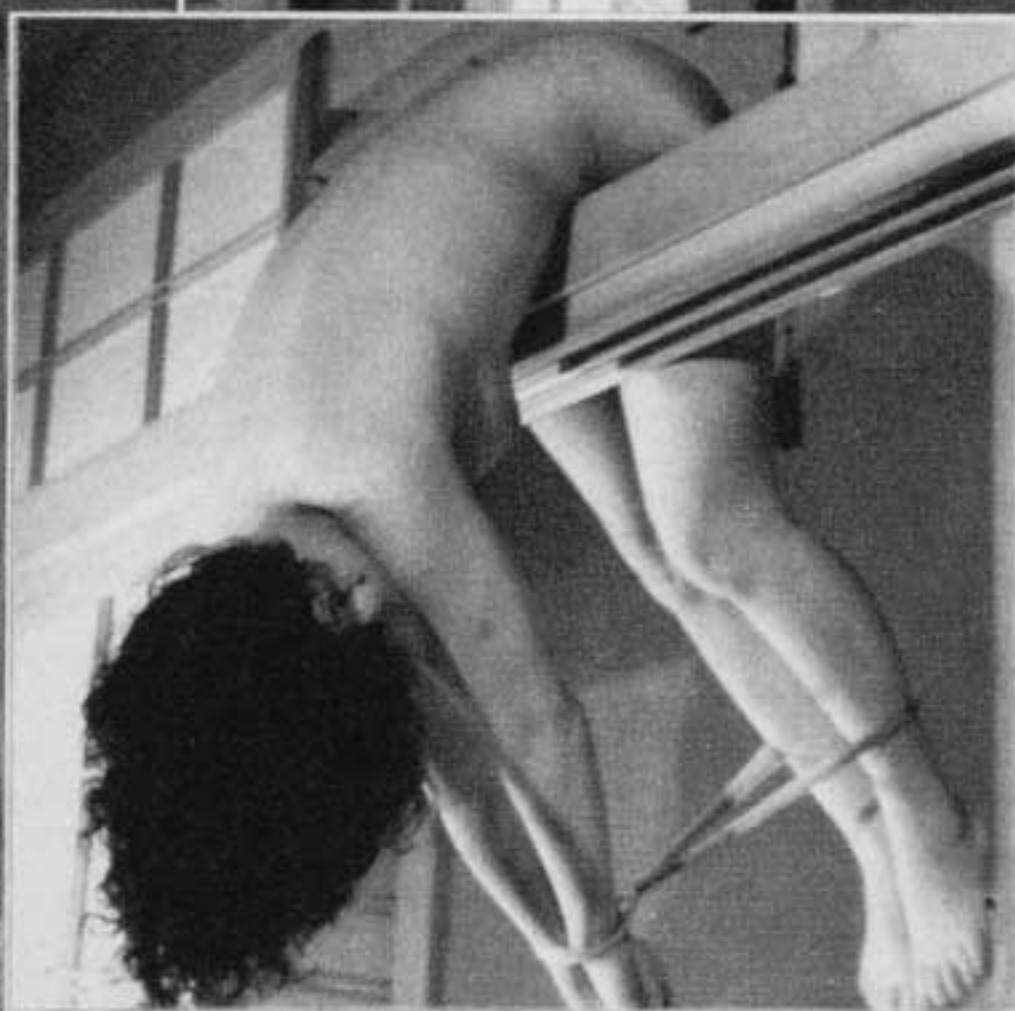


足フェチシズム

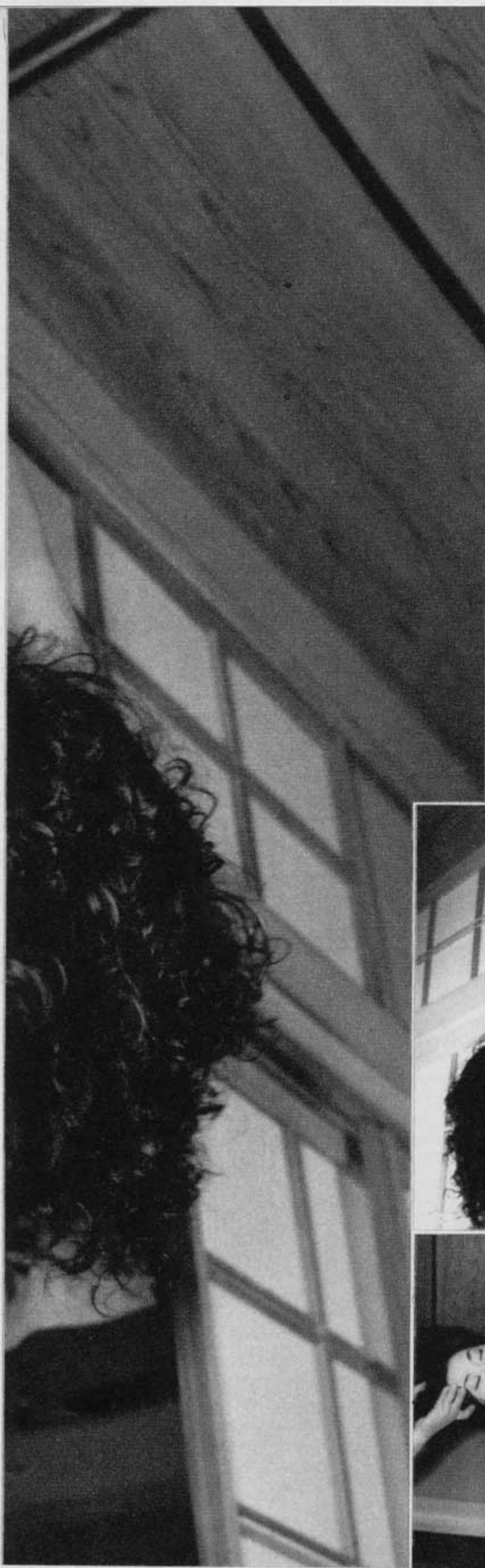
鴨居づり



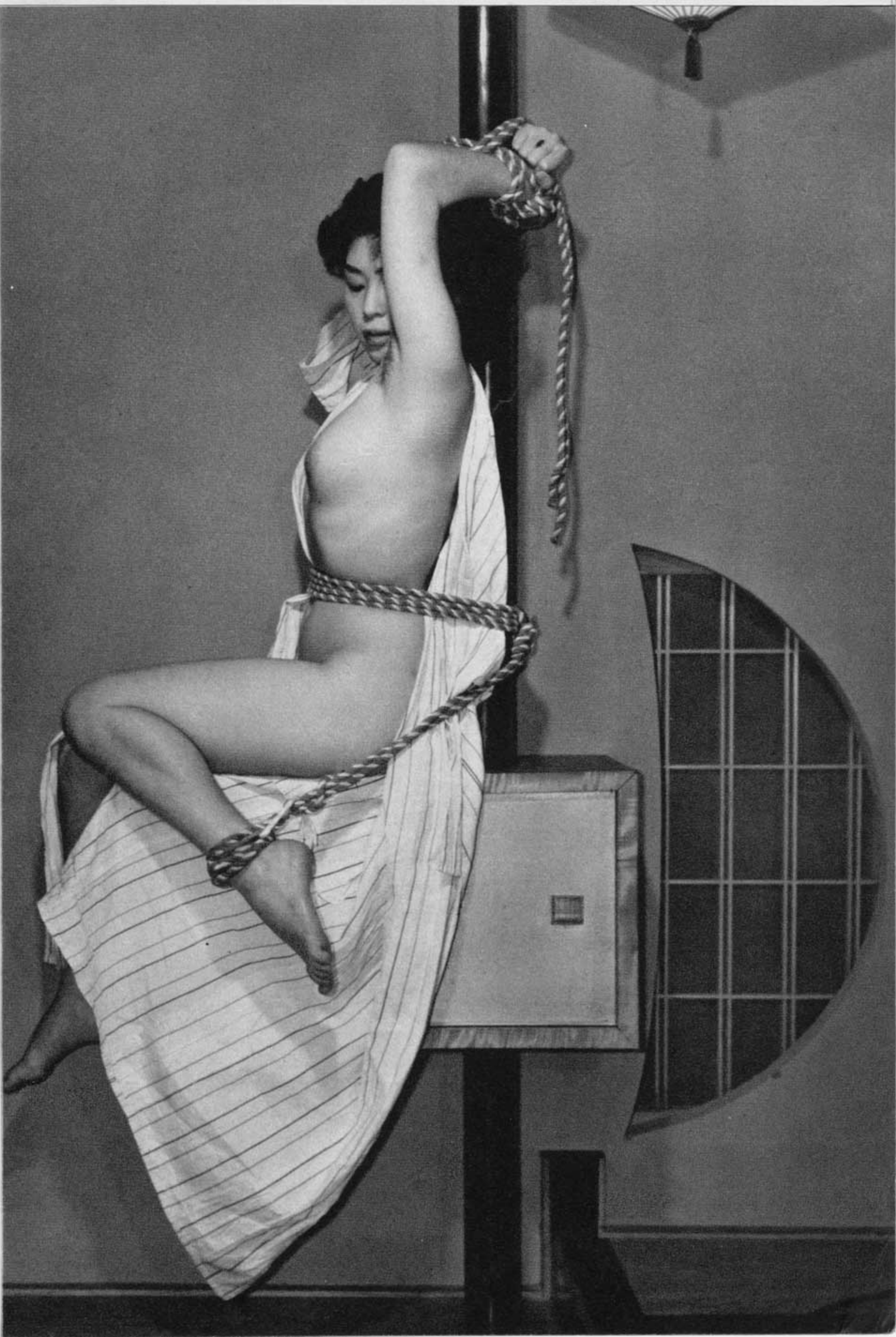
情婦マノン足をもつて釣るさげ
られたがこれは二つ折りにして
鴨居にかけられたいわば人間干
し物しかも手と足をしばられて
いるからまごまごすると干物に
なってしまう無残の極致だろう

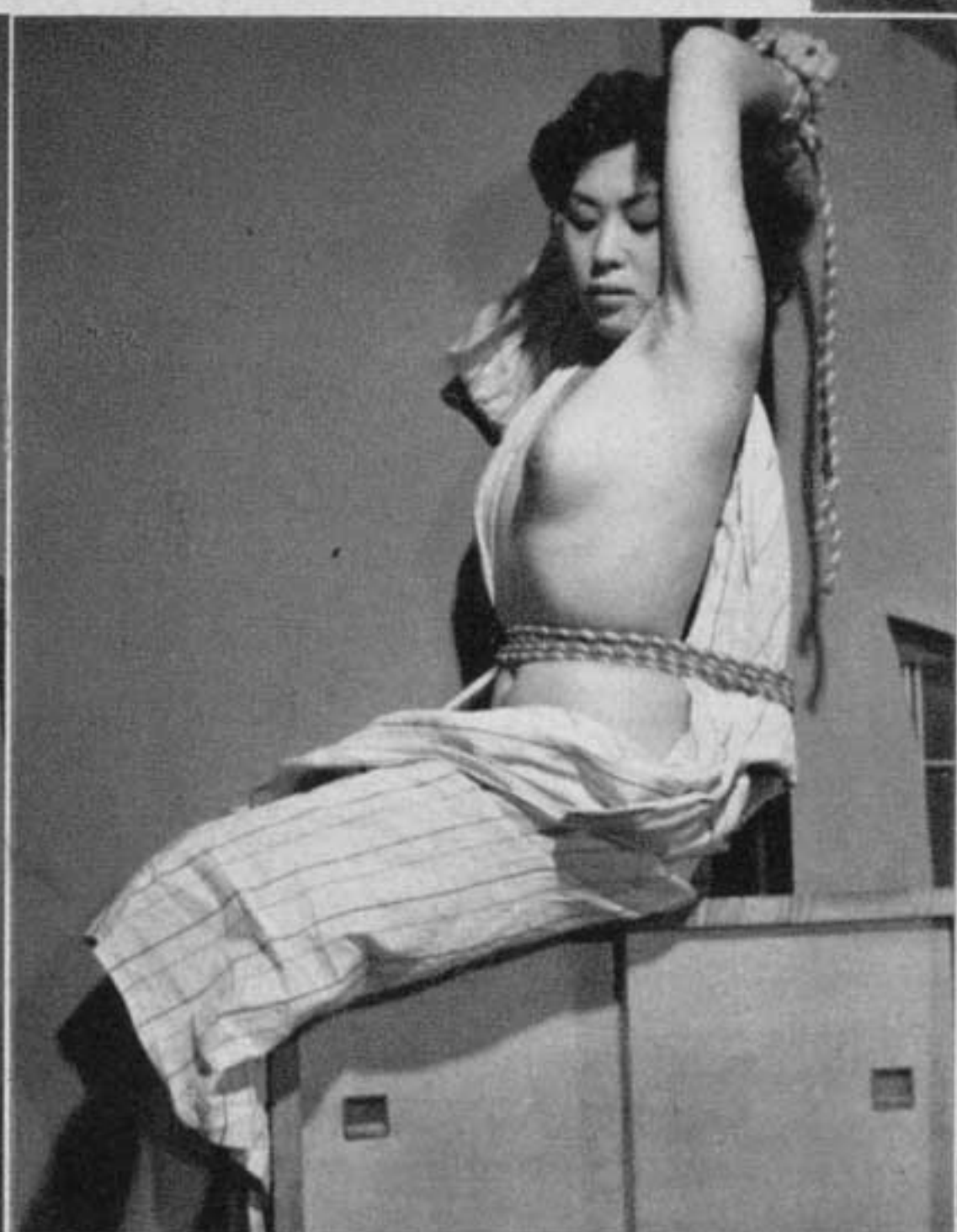
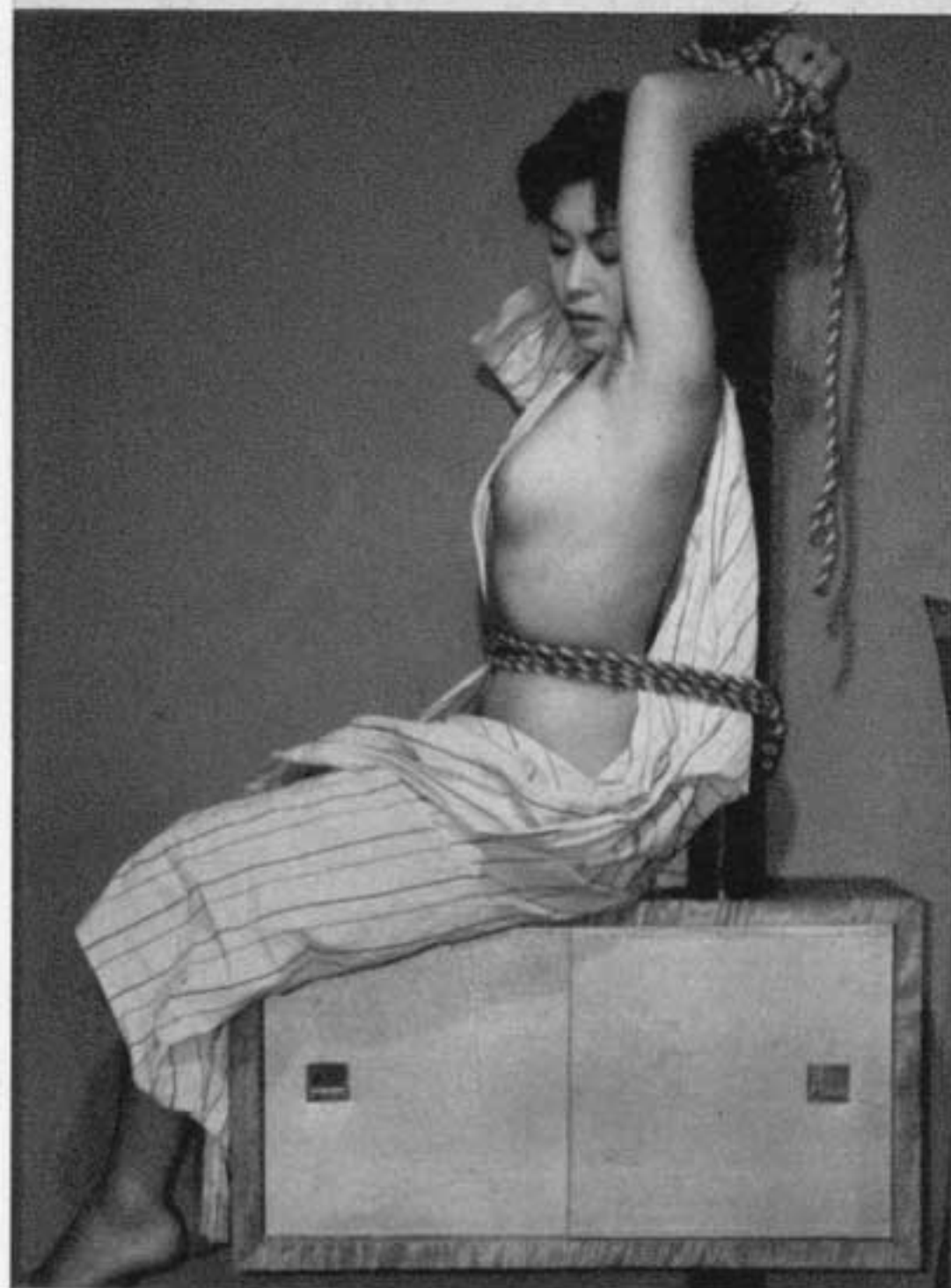


鴨居の角が 肌を噛み 全身を支えている下
腹が ギシギシと音をたてる 痛みは徐々に
しびれに変わり しびれの底から 女の妖し
いよろこびが にじみでる 苦のなかの楽よ









女の置き物

床わきの飾り棚にしばられた女は
そのまま なまめかしい置き物だ
男の鑑賞にさらされる白い白い肌





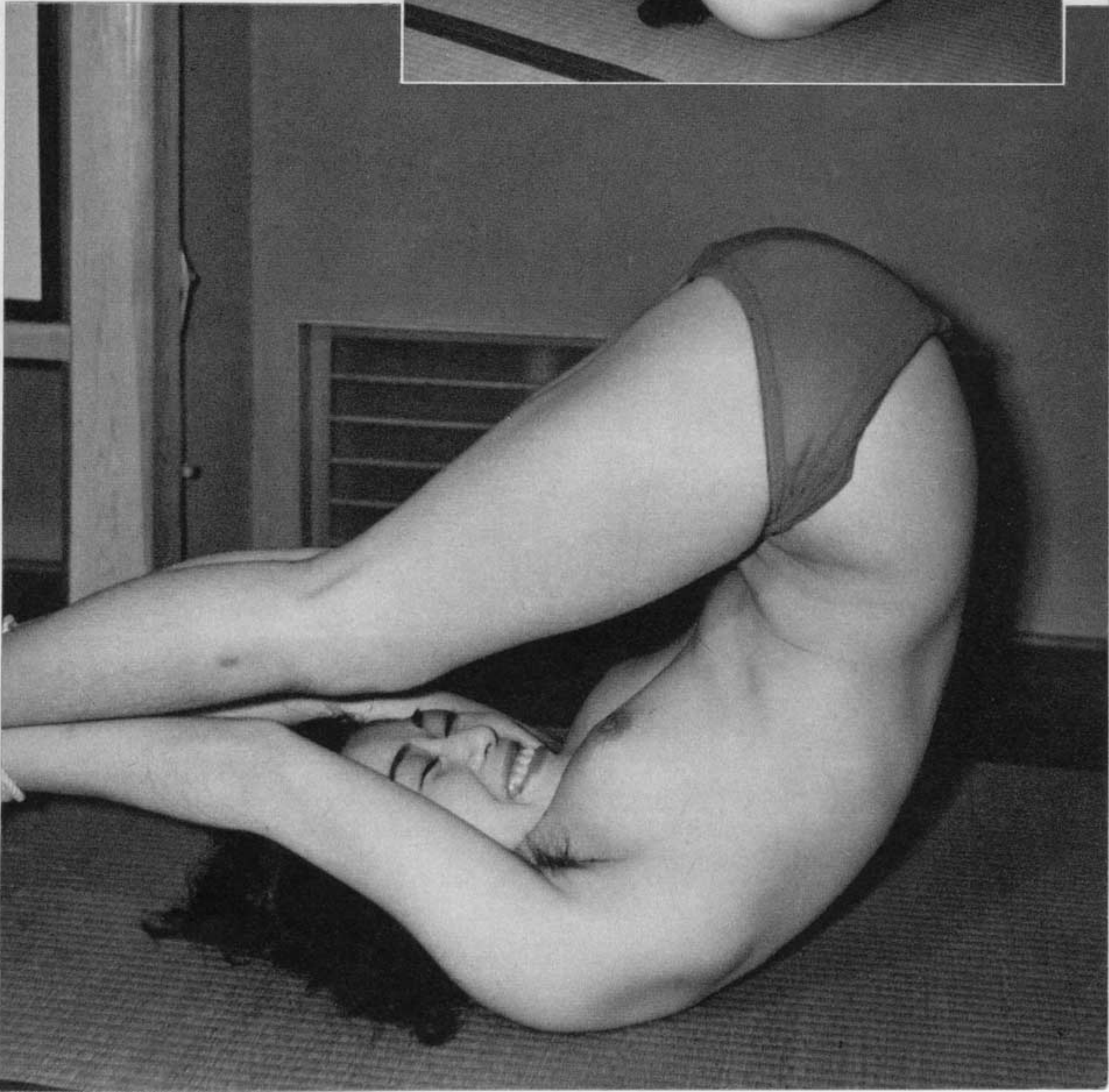
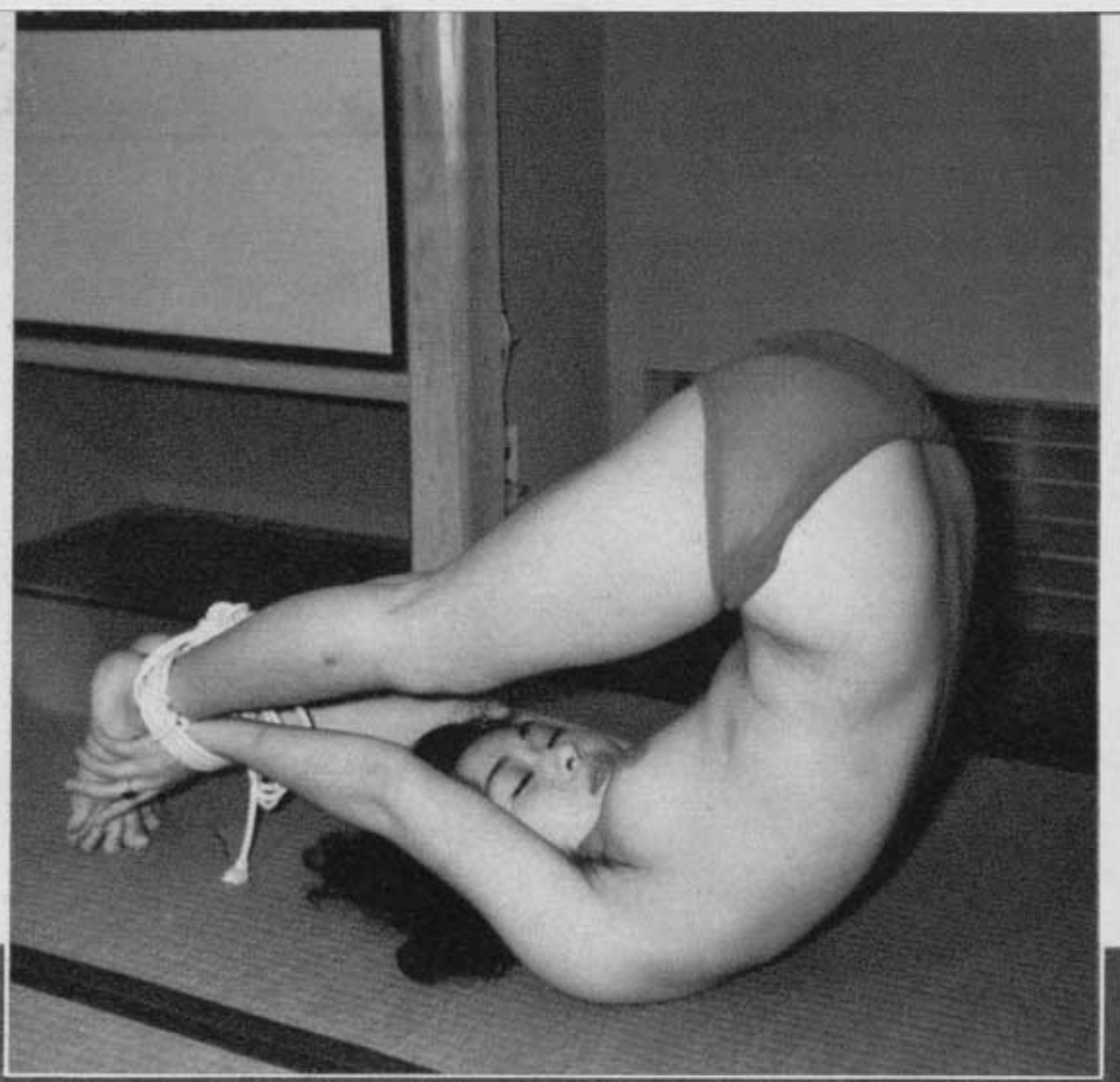
人間荷物

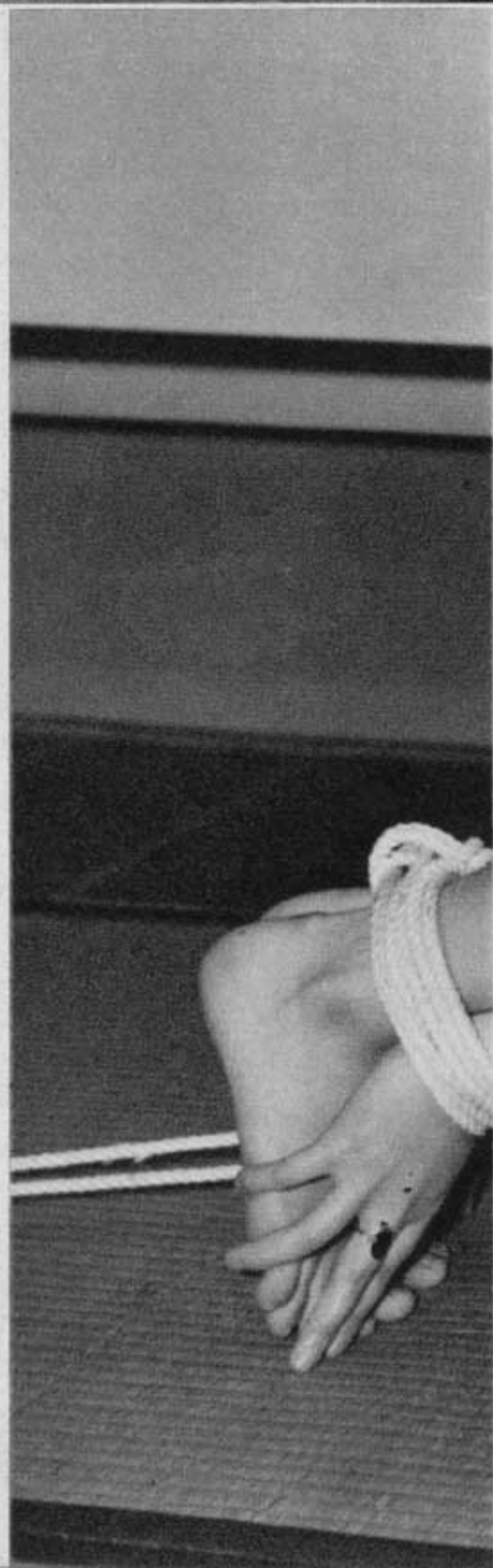
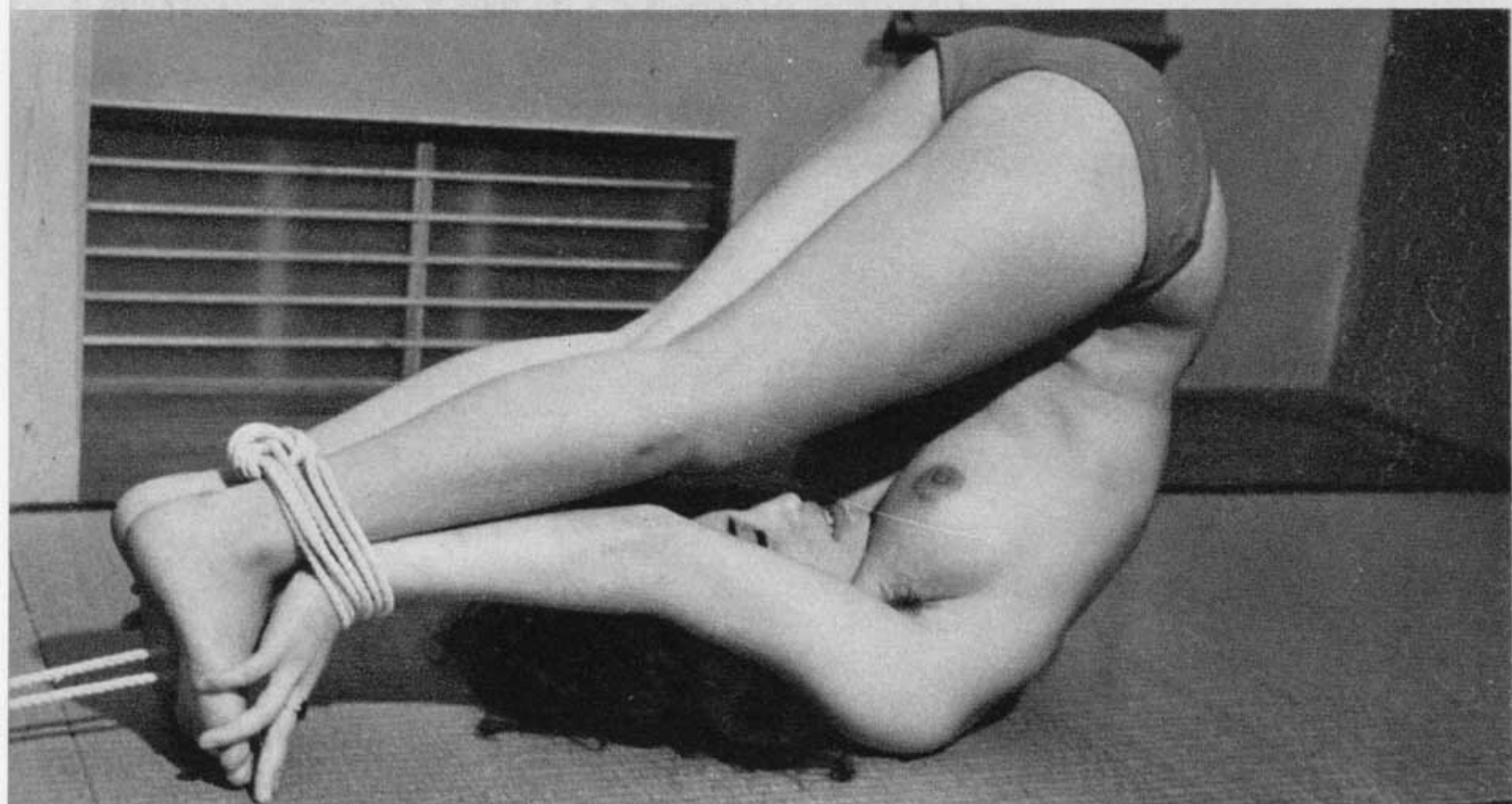
あたしはいわば荷物です タテヨコ十文字に荷づくりされ さて
いったいどこへ運ばれるのだろうか 悦虐の駅か 官能の倉庫か



海老責め

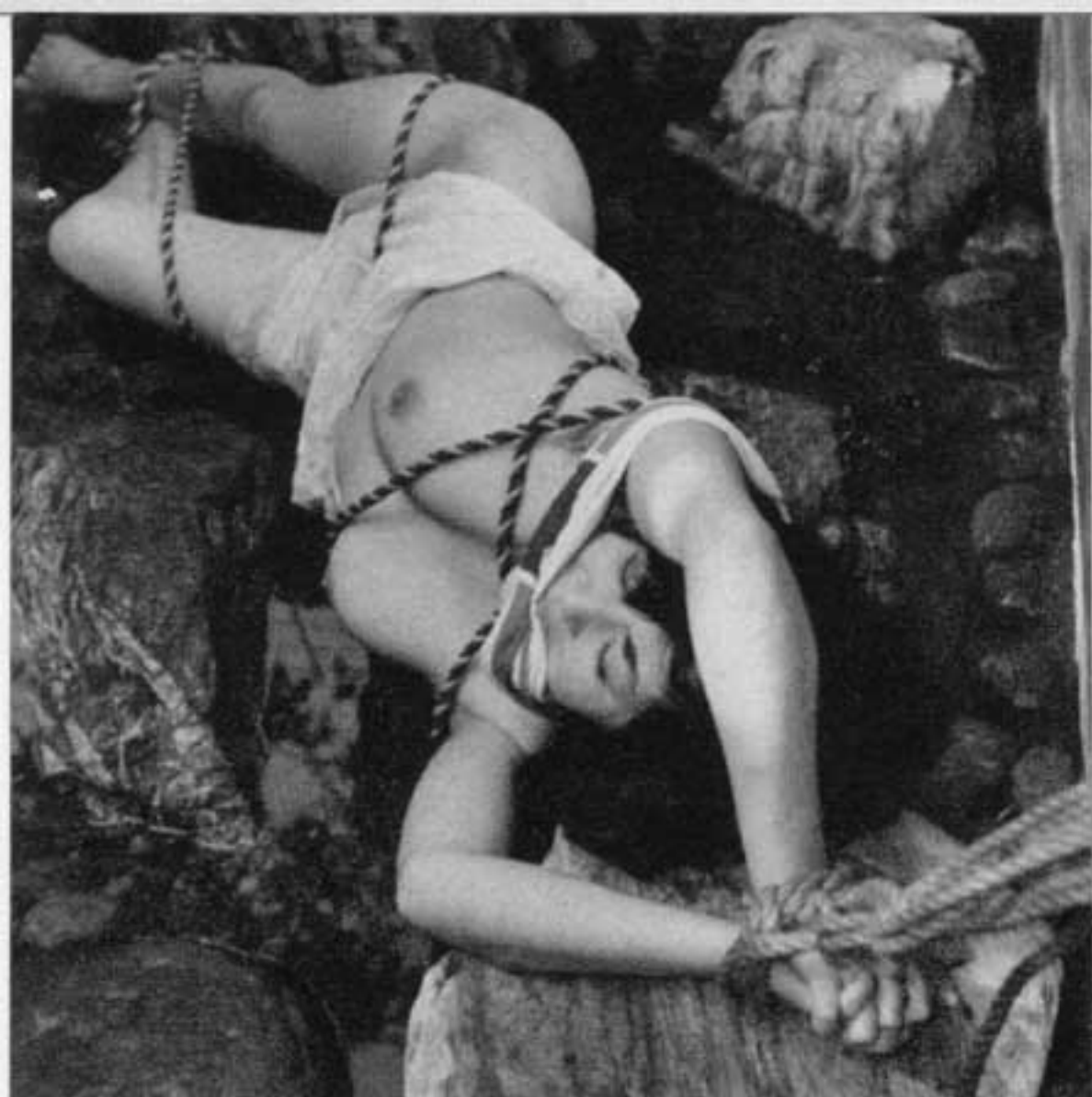
手首と足首とをしばられて逆さに転がされると どうしてもエビのようにならない 苦痛の最高だというが 苦しければ苦しいなりに 喜びもふかい







水に
ひたされて



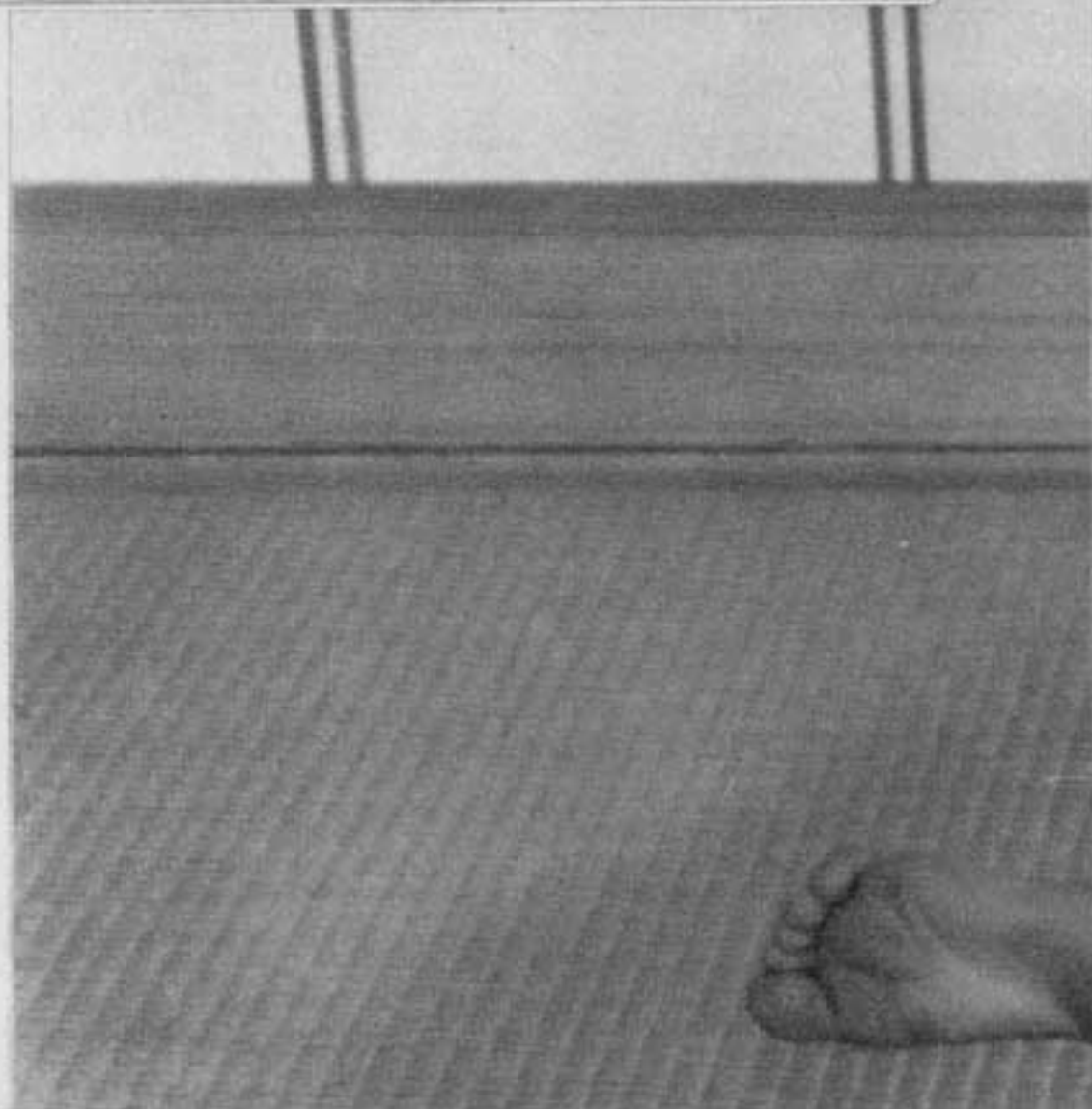
が
ん
じ
が
ら
め
に
さ
れ
て
水
の
ひ
た
ひ
た
と
流
れ
る
石
の
上
に
投
げ
だ
さ
れ
た
女
体
は
繩
と
水
に
責
め
ら
れ
て
し
ん
し
ん
と
冷
え
て
い
く
女
の
肌
の
濡
れ
た
の
は
な
ま
め
か
し
い
と
い
う
が
い
た
め
つ
け
ら
れ
る
と
き
の
女
の
肢
体
も
え
も
い
わ
れ
ぬ
色
香
を
に
お
わ
せ
る
美
し
く
色
揚
げ
さ
れ
る



緊縛艷姿

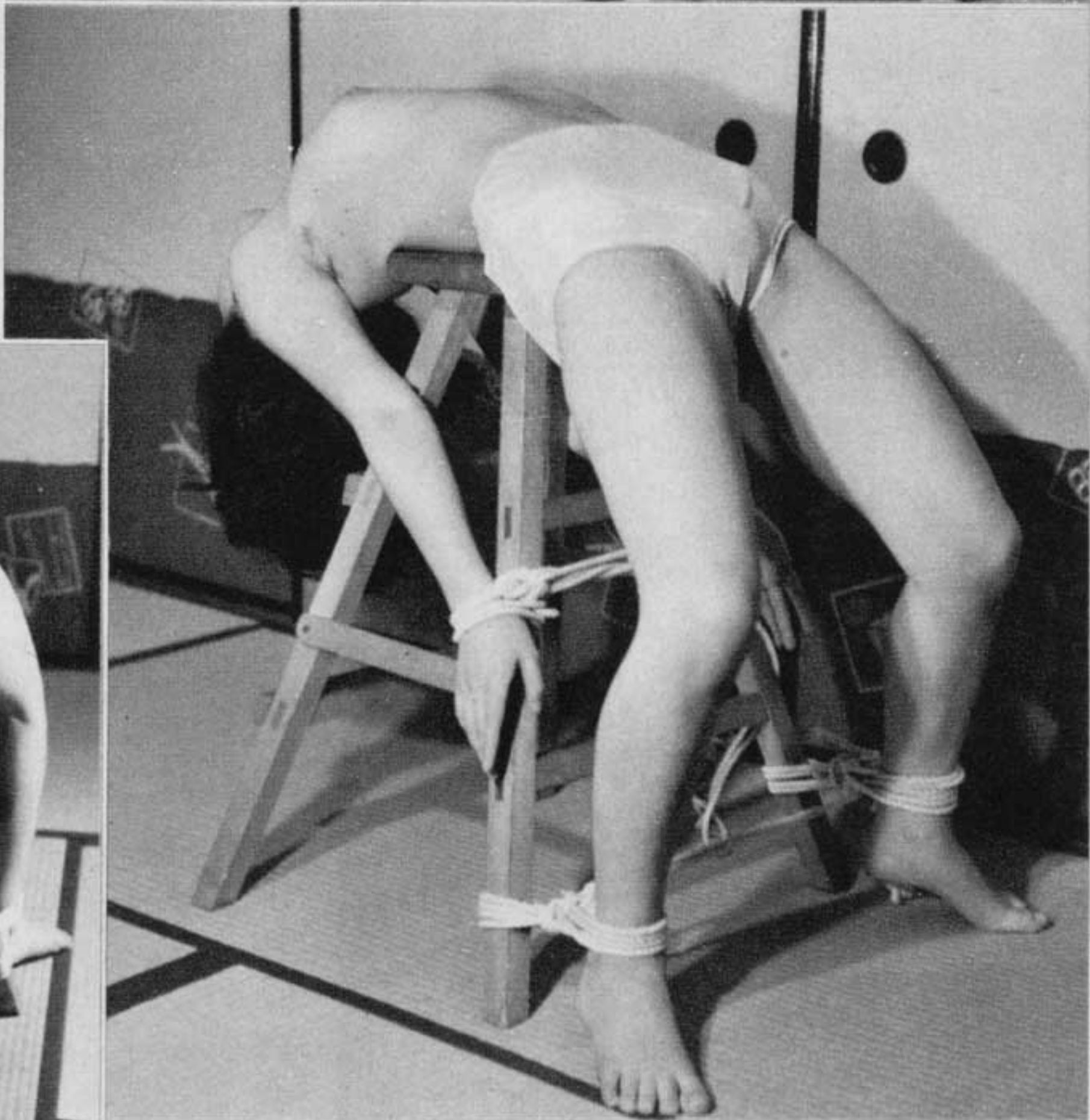
しばられた女体が 明るい障子の前で
まぶしげに息づいている 縄の
あいだから 乳房がこぼれて 女の
いのちを歌いあげている まひるの
ひとときの しずかなる悦虐の姿よ

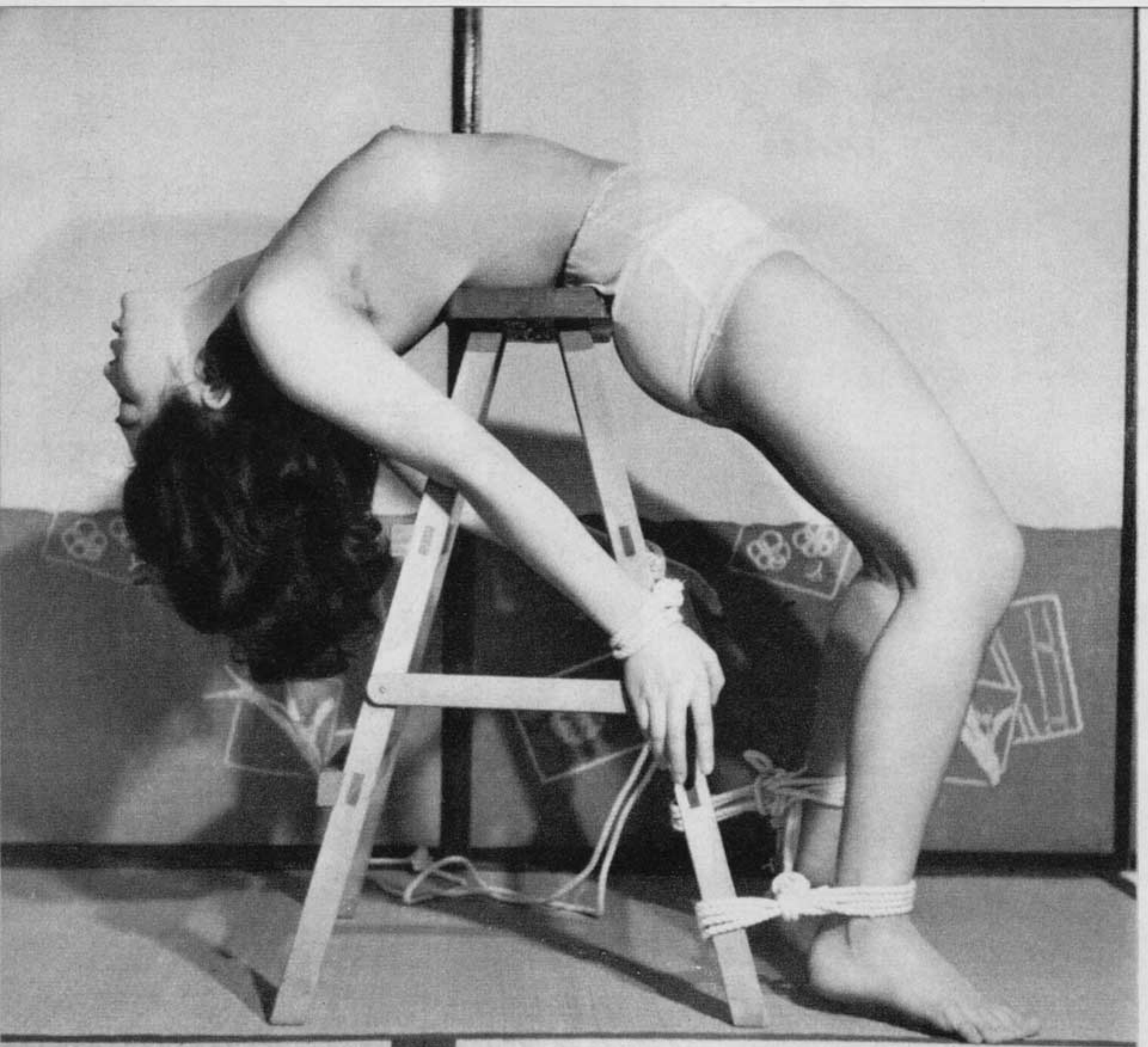




脚立責め

脚立のあしに手足をしばられ そり返らされると 頭に血がのぼる
その血が脈をうって ドキンドキンと 目や鼻から溢れ出るようだ
血がふき出しても そこに生き甲斐を見つけ出せれば 女は幸福だ





静かなる
悦虐





椅子しばり

籐イスにしばりつけられて この狭くる
しい世間だけに息づいている 女の哀れ



美囚六態

うつ向いたり あお向いたり あるいは
また いろいろに身をくねらせたり 限
られたスペースで もだえる女体の 悲
しくも美しい肌に 青葉が 照りはえる





も だ え



高手小手にしばられ
 たまま投げ出された
 裸体は 月の海辺に
 打ち上げられた人魚
 にも似て 妖しくも
 艶な曲線を描き出す





白い人魚の



美しき人柱

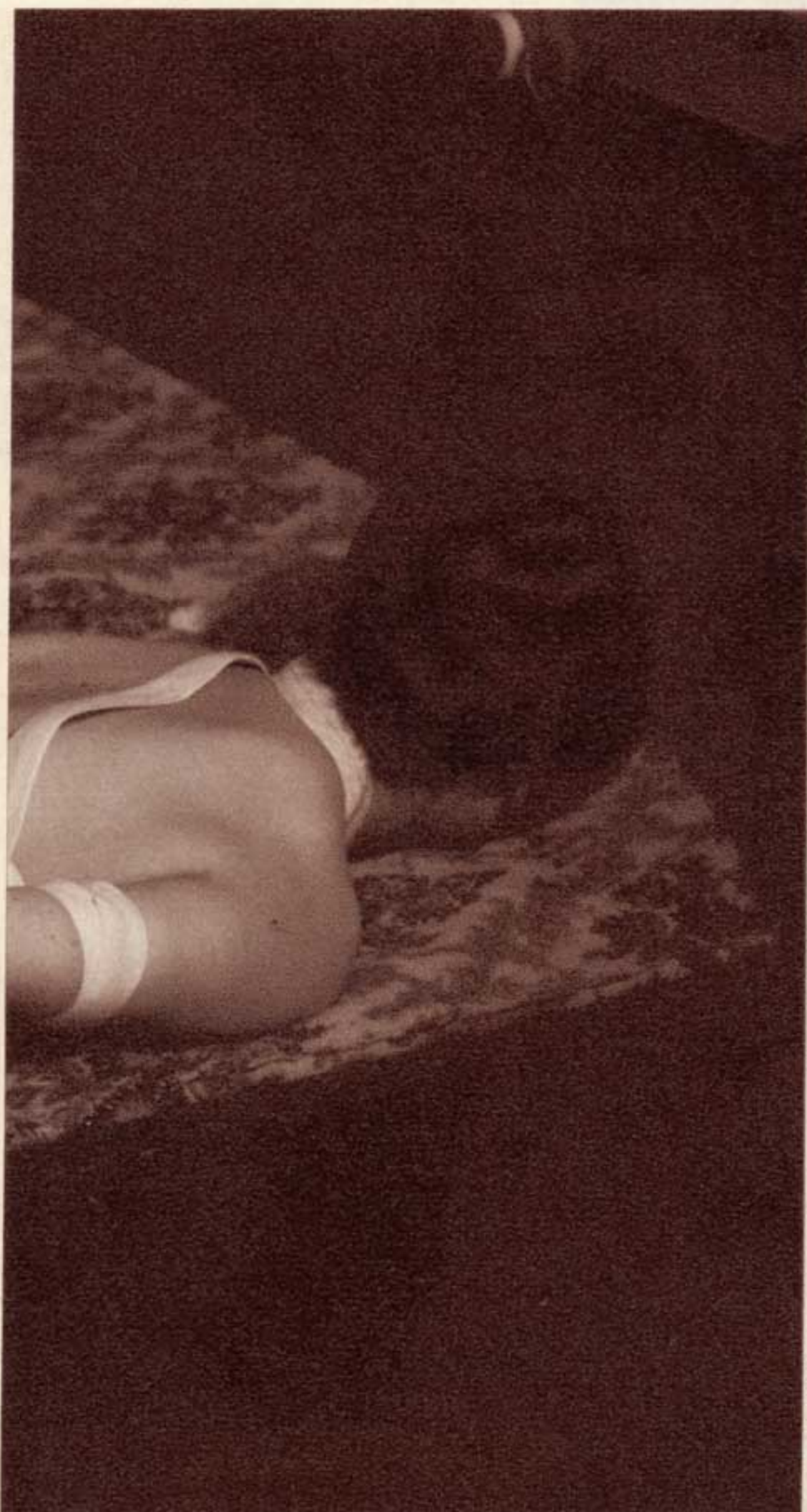
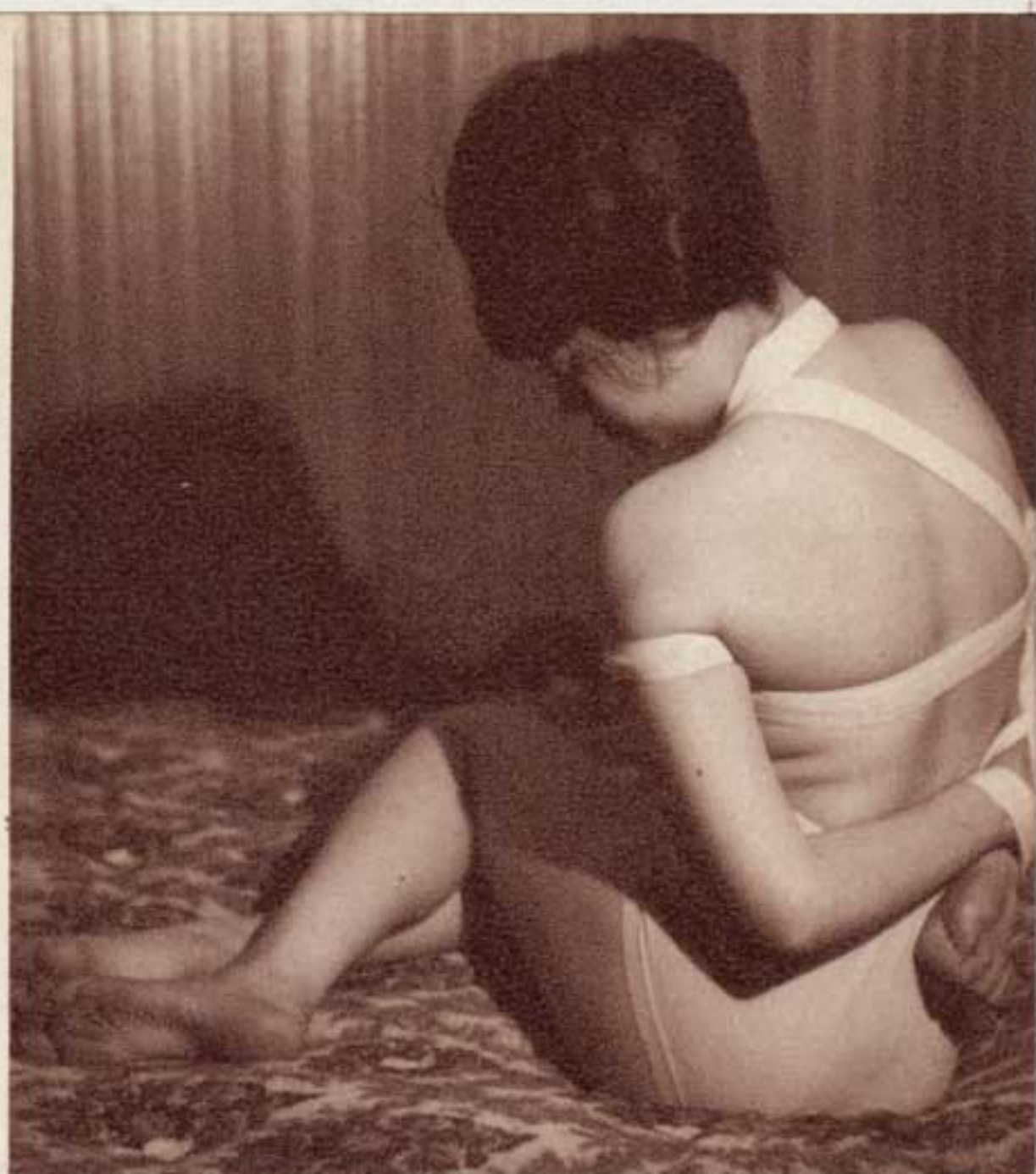


胸もとはひきはだかれて ふくよかな二つの乳房はむき出され 裾は乱れて 太ももあらわ 柱にゆわえつけられた女はこの恥ずかしい姿態で 何時間お仕置きを受けねばならないのか 縄は 容赦なく 乳房にくい込み 首をしめつける 落花寸前の 痛ましくも 豊満な 白いポリユーム



ベッドの残虐

情事のオードブルは ベッドの上
の残虐プレーだ アペリチフを一
ぱいひっかけた女の肌は さくら
色にほんのり燃え 縄をかけられ
た裸体が 次にくる快美の感覚を
期待して 興奮にふるえる 女は
単刀直入よりも こうした事前の
遊戯がたのしいのだ それにして
も これはまた残虐なたわむれだ







亀の子しばり

食卓を背負わされて 四つの脚に それぞれ
両手両足をくくりつけられた姿勢は 亀の子
に似て バタつくことさえ 許されはしない





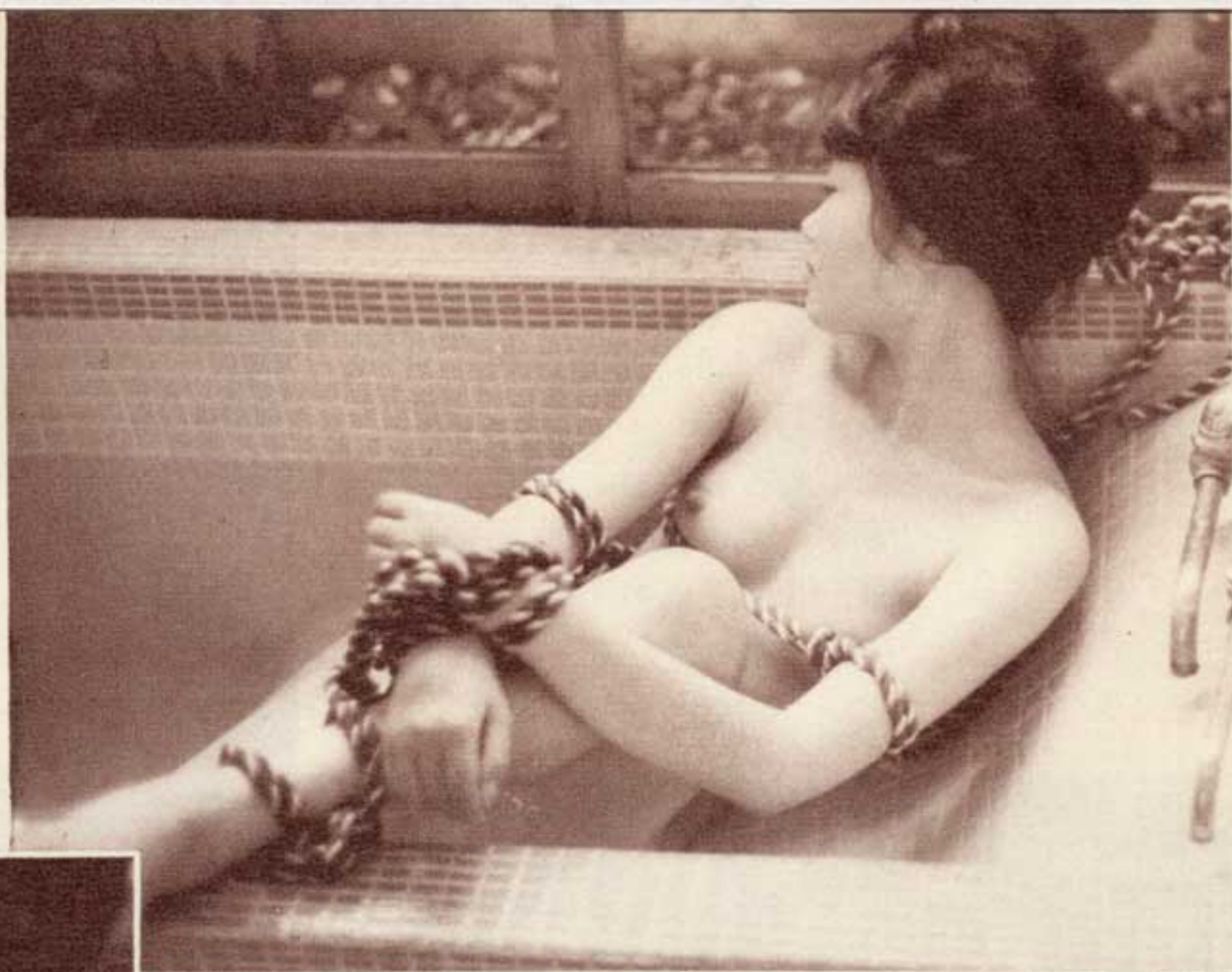
四つの妖花

花はいろいろに咲くが 女もまたい
くつかの妖しいポーズをもっている





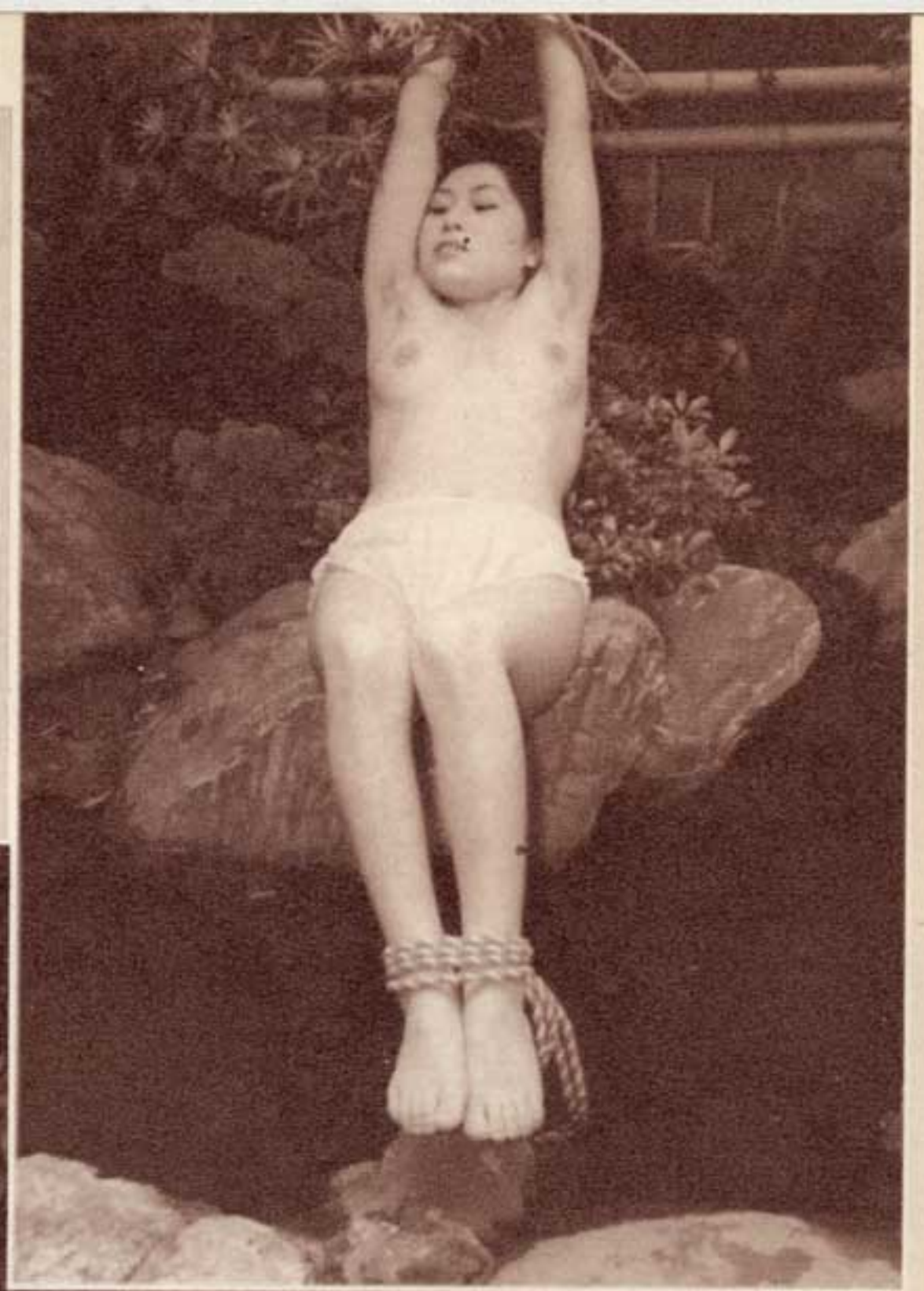
愉楽の湯浴び



湯に濡れて 裸身にからみつく繩は キ
リキリと 肌をしめあげる その緊縛感
と ほのほのとした暖たかさが 女の心
の底をゆさぶり 女の肉体の奥をふるわ
せる のどかな昼の日ざしがさしこむ浴
槽で あやしく高まる愉楽の時が 静か
に ひっそりと 音もなく流れていく

水 辺 無 残

池にさしだした木の枝に手
をくぐられ 足も縛られた
まま 水を越した石の上に
置かれた この不安定な姿
態の 思いがけない美しさ



陶醉する女体

シャンペン

さわやかな泡たちは 初夏の空を思わせ
て すっきりと胸にしみとおる そんな
小気味よさが 全身ににじみ出ている女





アブサン

口にふくむと 強烈な香りが 舌をやく そんな強さが 乳房をしめあげ たとえ悶絶しても 悔いない女



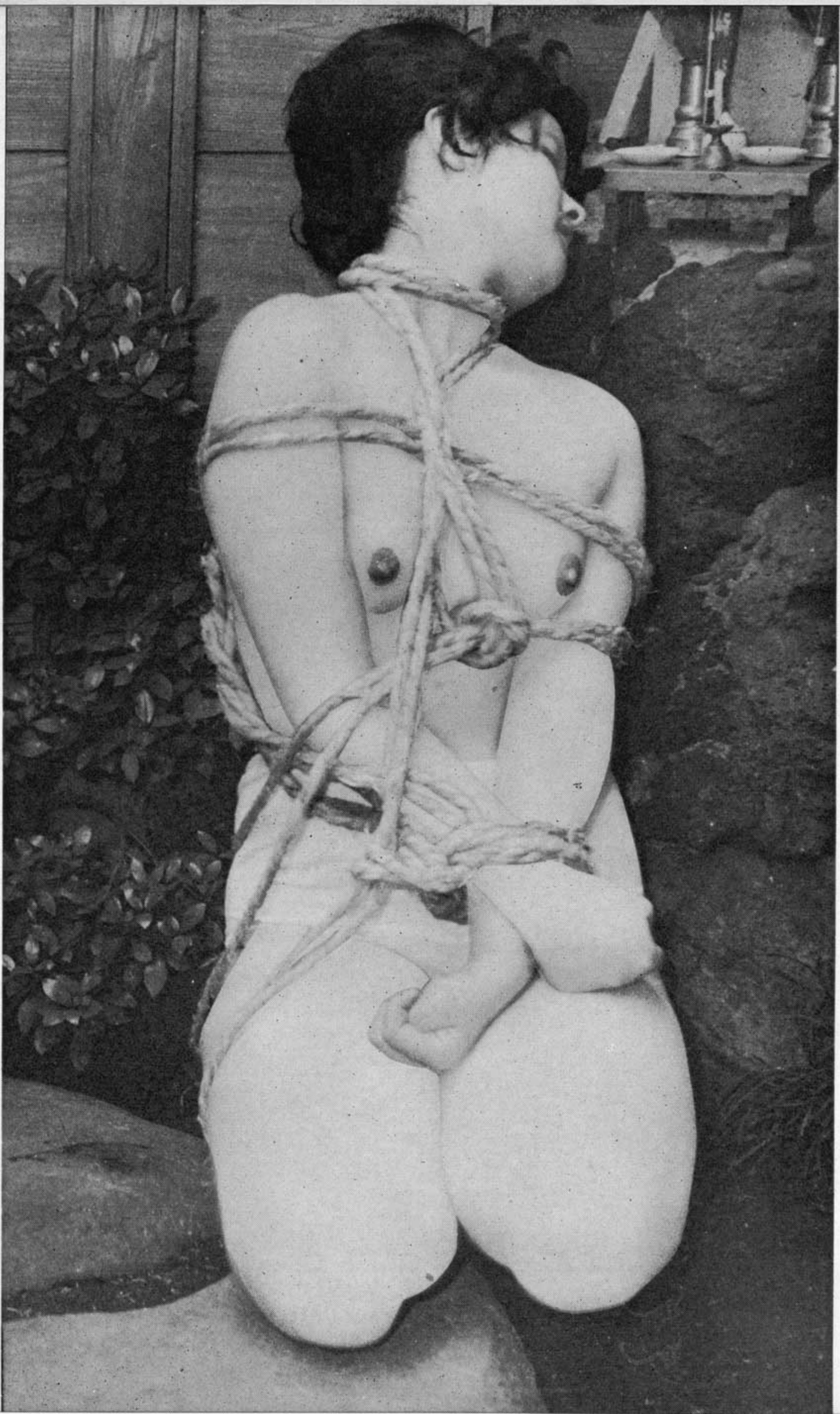
ブランディ

手のひらで暖めると 舌ざわりが丸く トロリと溶ける心地がする 激しさの中に 甘さを含んでいる女



ベルモット

甘い酔い心地 南欧の風に吹かれて まとい
つく繩のお仕置き からだの奥がほてってき
て せきあげてくる法悦に 身もだえする女



コニヤツク

透明な空気の中の白い肌 透明でトロリとした液体のなまめかしさ コニヤツクの舌ざわりに似て 男ごころをとろかす 妖美の女



リキュール

色青き酒を酌むサカズキのなかに 悲しみが湧き よろこびが沈む ただ乳房だけが燃えて 悦虐を待つ女



キュラソオ

くだものを醸した酒の味わいに似て 芳醇ににおい輝く柔肌 その甘さのなかの酔い心地の 苦痛に喜ぶ女

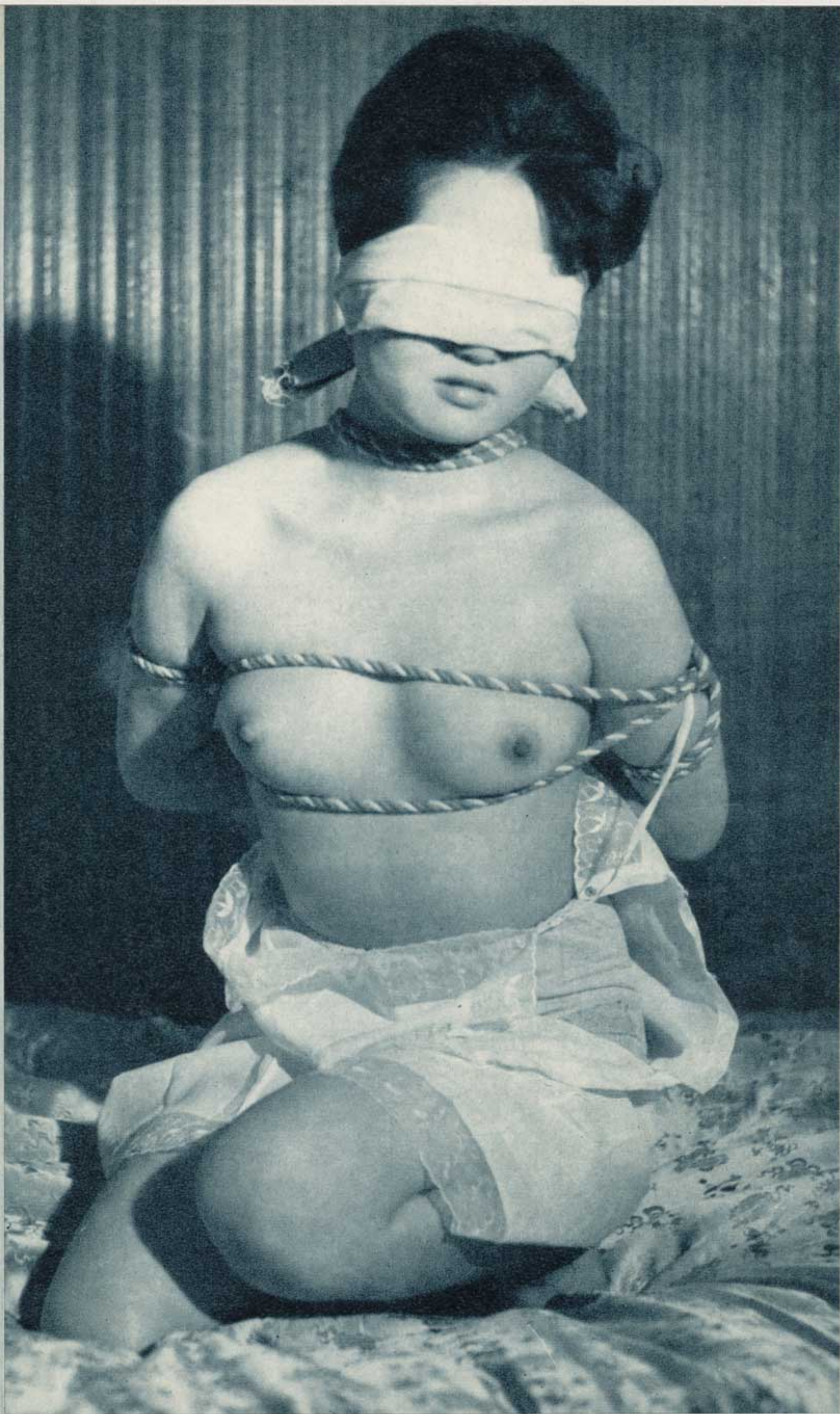


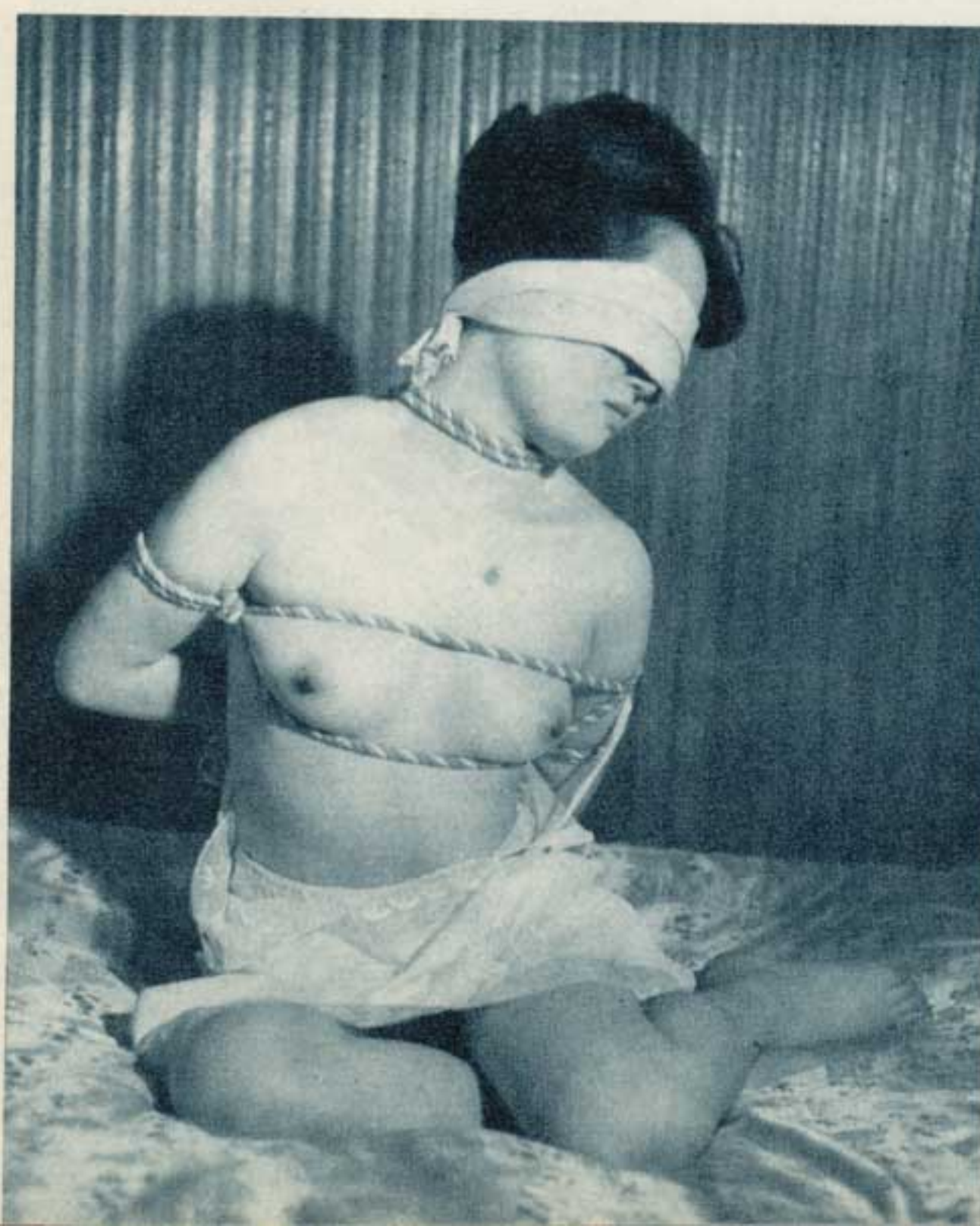
ペパミント

もの悲しさがひろがり なまめかしい官能が肌をはう
とらわれの思い深く 生理のアヤの不思議さに泣く女

暗闇の中のよろこび

手足の自由を奪われ 目かくしで視界をさえぎられても 暗闇
には その中にだけしか湧かない よろこびの泉があるものだ。







犬になれ

動物にかえったとき 女はいちばん
美しいという説がある だからとい
って 首縄までつけて 女に 犬に
なれというのは 無残な嗜虐だ そ
れでも女は ベッドの上に はいつ
くばり 身をくねらせて 男の歓心
を得ようとする 不思議にも 妖し
い 男と女の性の世界よ いじめ
いじめられる 二つのことが交差し
て織りなす なまぐさい男女の営み





木に縛られて

両手をひろげて 二本の立ち木にしばられた
形は 虫ピンでとめられた揚羽チョウのよう
なものだ 羽ばたこうにも身動きのできない
運命に 女は 悲しむだろうか それとも喜
ぶだろうか そこに 女体の複雑微妙な構造
のナゾが秘められている 法悦とか陶醉とか
いう忘我の境地が生まれるのも 甘美な官能
のトリコとなるのも みんな この女体のカ
ラクリが生み出す 造化の神のはからいな
だろう ああ 美しくも妖しい女の白い肉体

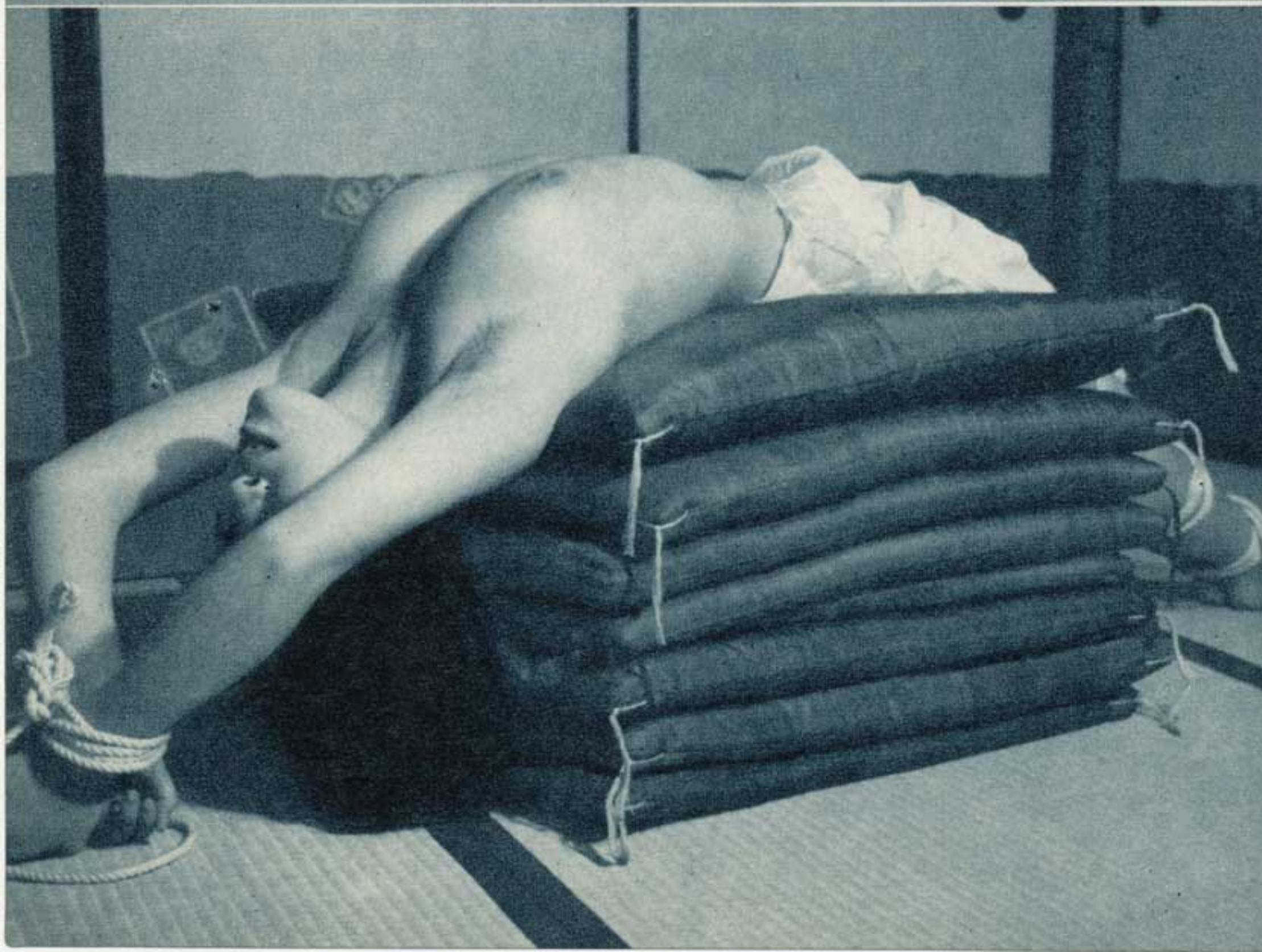




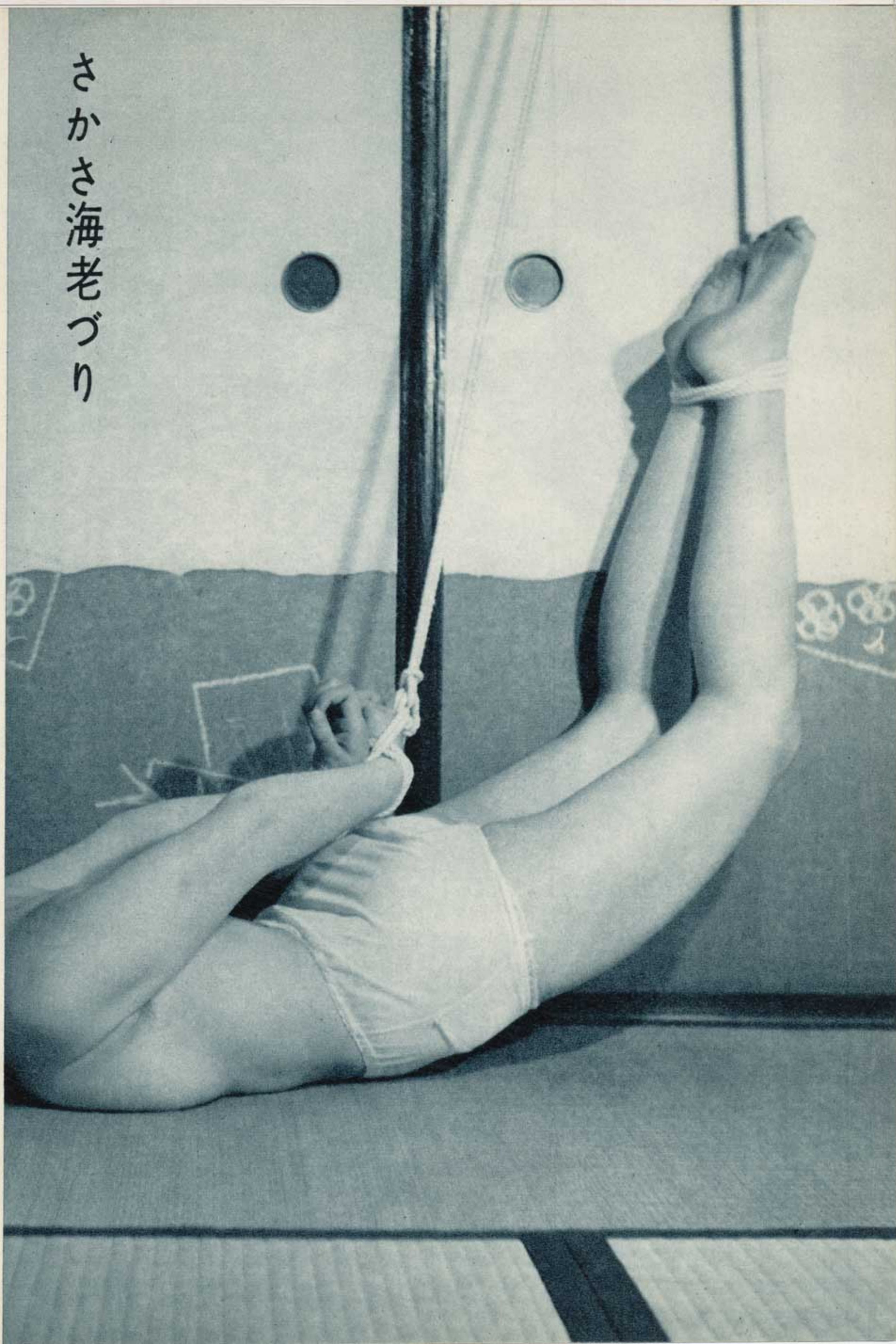
座ぶとんも 責め道具

座ぶとんを何枚も重ねて 女体を横たえ
ると 頭と足がぶら下がる そり返った
白い肌が 波うって曲線を描き その曲
線の波にそって 微妙な女のよろこびが
音譜を奏でる うす明かりの ある日の
闇で演じられた 絢爛たる情痴の一コマ

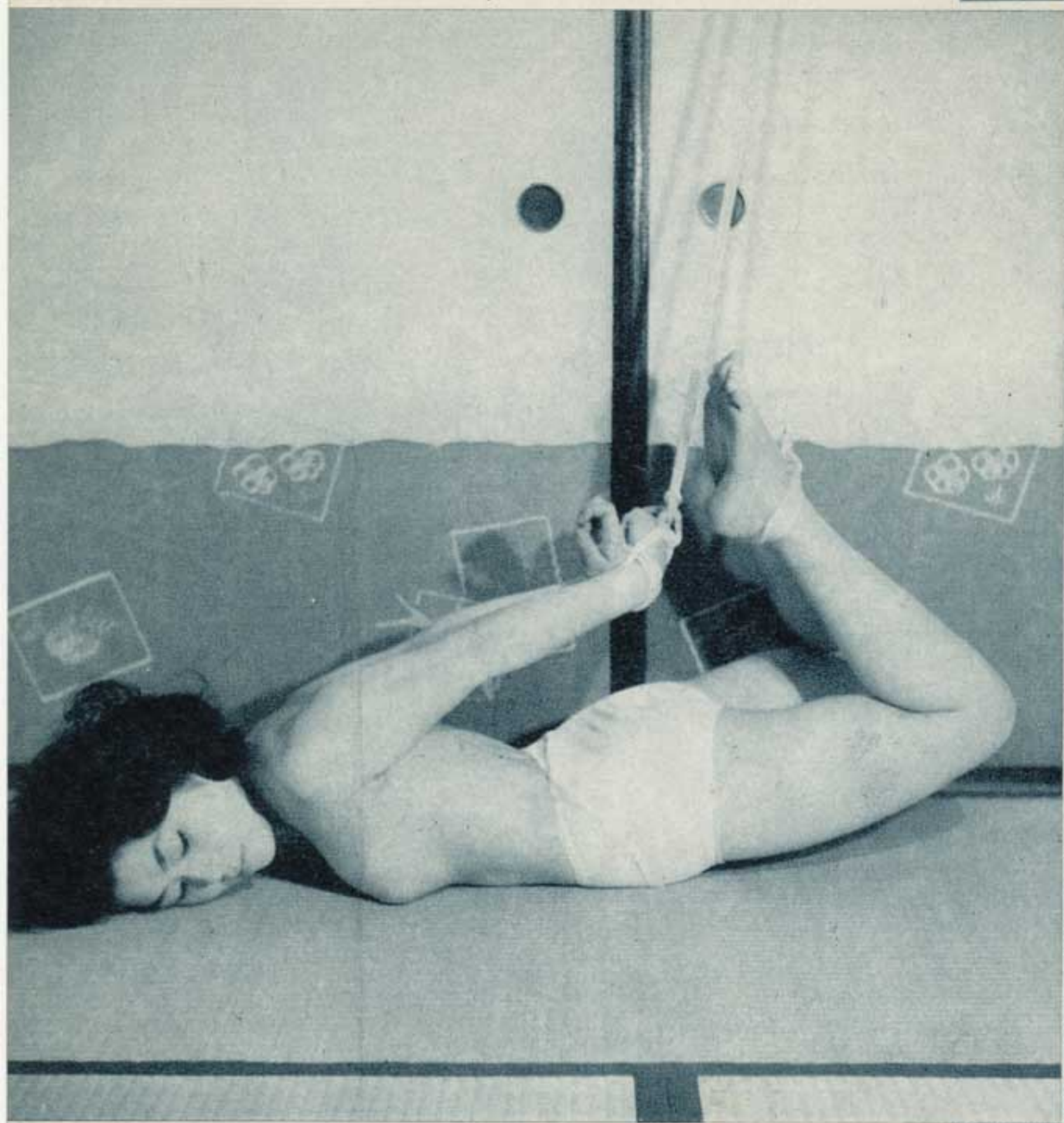


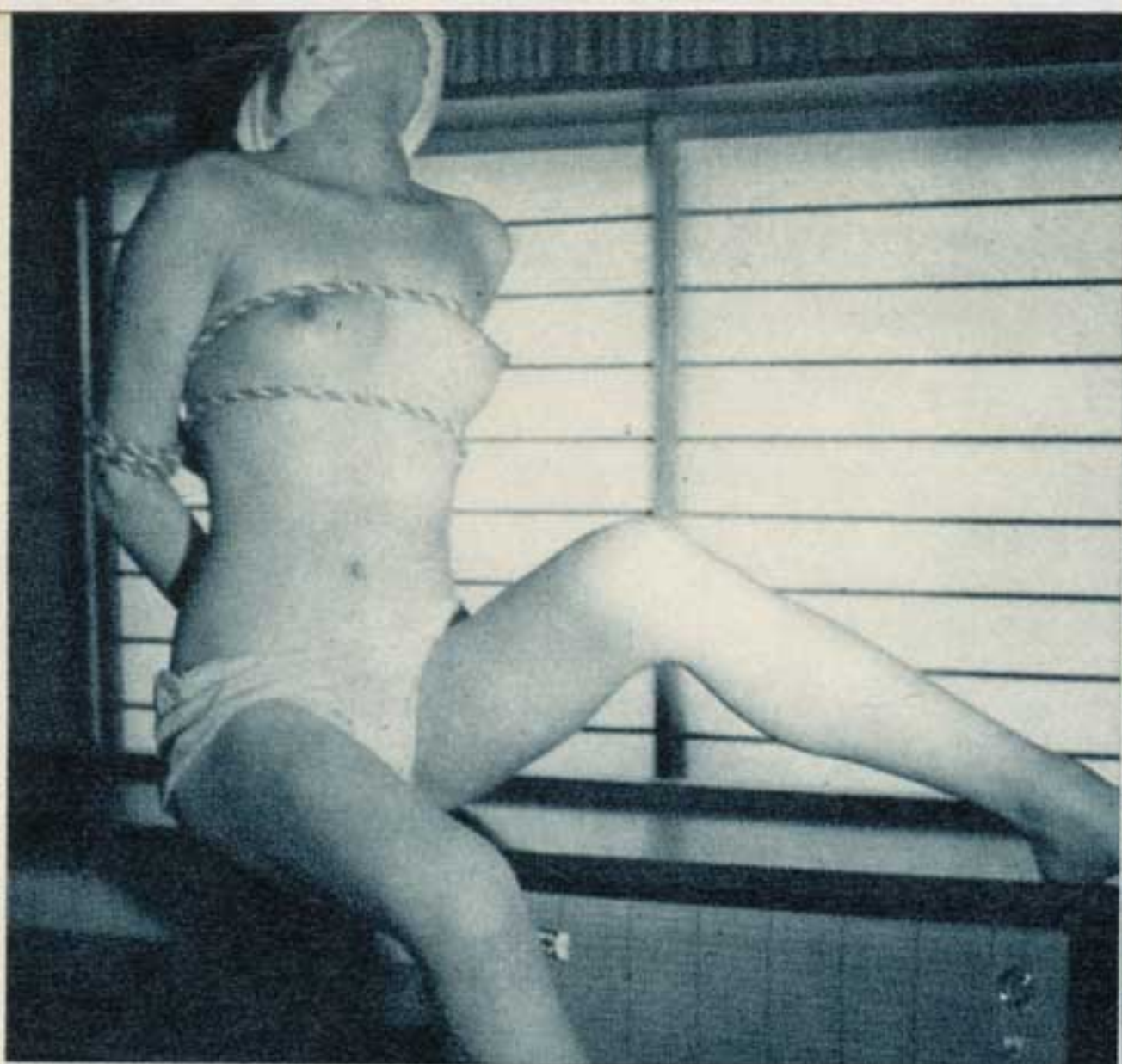


さかさ海老づり



エビがピンとはねてそり返ったような姿
勢で 手と足をぐっとつり上げられると
き 密室の無残絵が できあがる 痛ま
しくも残酷な責めの時間が これから開
幕する 白い肌の桜色におう女エビ!





嗜虐を待つポーズ

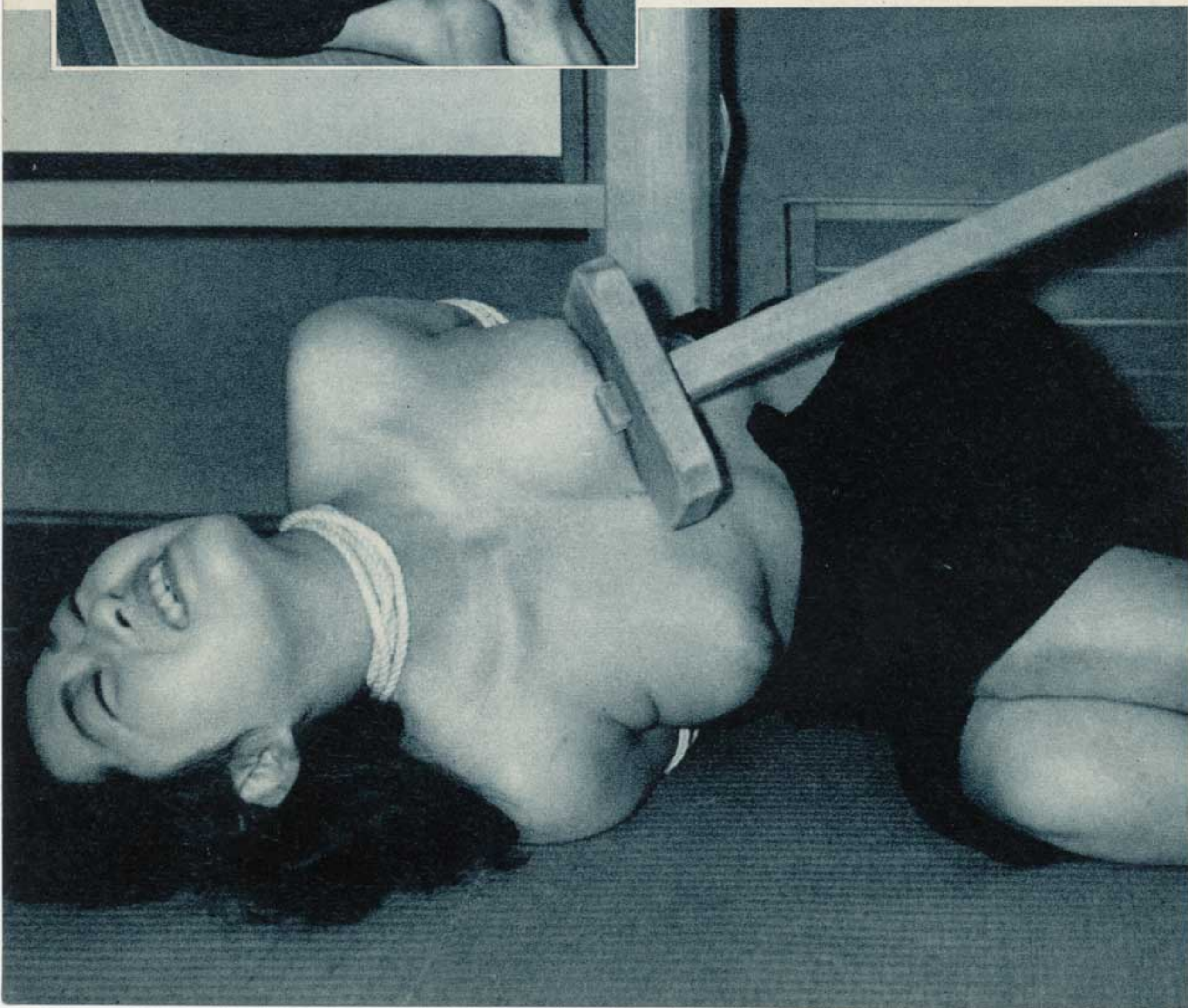
飾り棚には 高級なオールウェーブのラジオがおかれているのに
女は 縛られたまま 棚の上にそっと置かれている 部屋をなまめ
かしく色どるための飾りものか それとも 何かを待つ姿態なのか

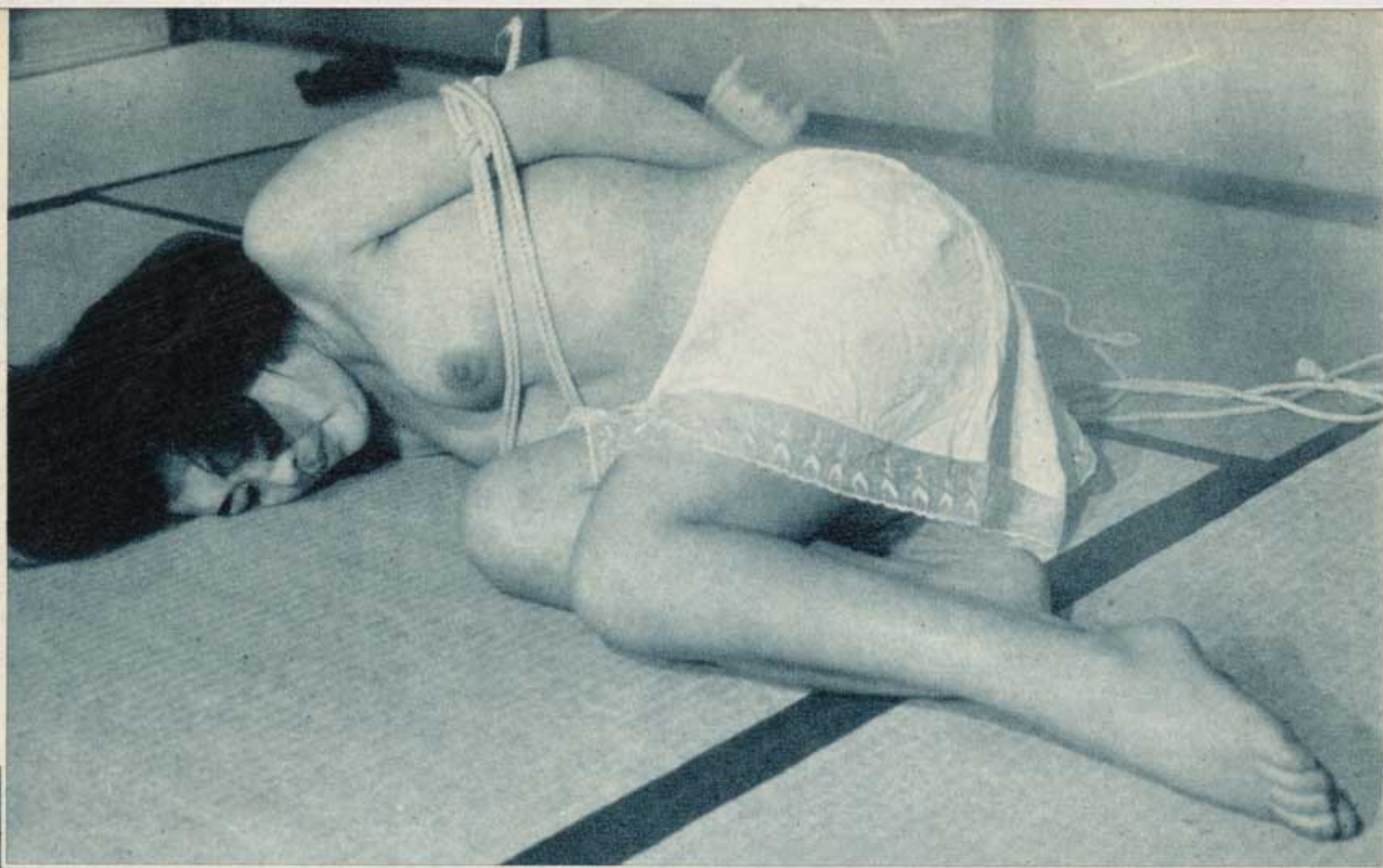


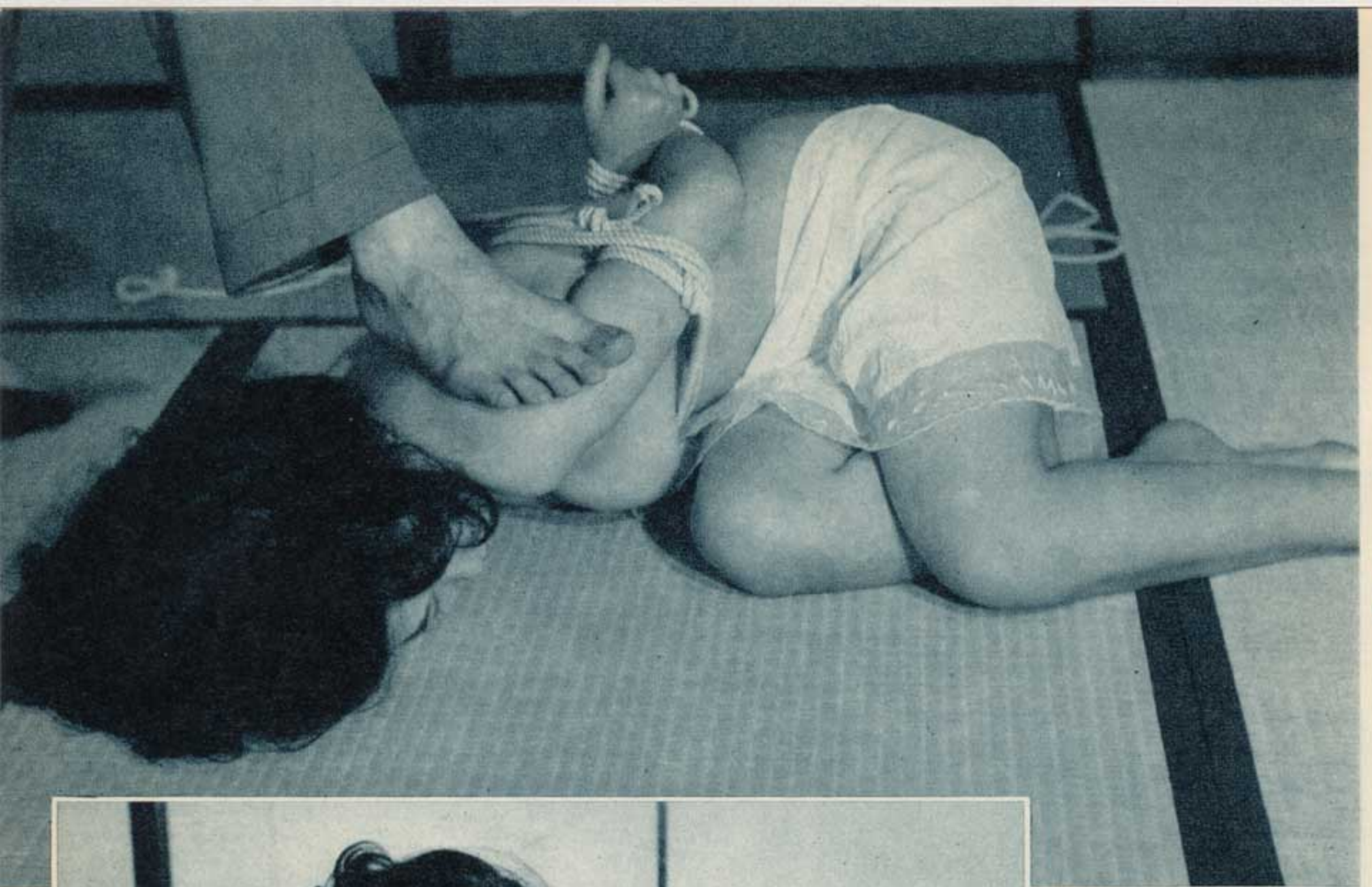


女体の微妙なナゾ

縛られるだけでなく 踏みつけられ 棒で
乳房を痛めつけられたりするとき 女は
地獄の責め苦を味わうわけだが その苦痛
の表情の中に 一種の美しいものが浮かぶ
のはなぜだろう？ 女だけが知っている生
理のアーヤ 心理の不思議さなのだが そ
こに生きるよろこびを求める人たちもいる







なまめかしき余情

縛られ責められたあと 縄をとかれても 女は しばらく 悦虐の余情をかみしめて 陶然となる 音楽に余韻があるように 痛めつけられた女体にも じょうじょうとあとをひく 甘美で妖麗な時間があるものだ

手ぬぐいを首に巻かれた仮死の裸女が
半ば湯にひたったまま 上半身をタ
イルの上に投げだされている 風呂場
の悦楽の果ての これは むきだしの
情炎 タイルの冷たさでも 消すこと
のできない 女の執念の到着した極致

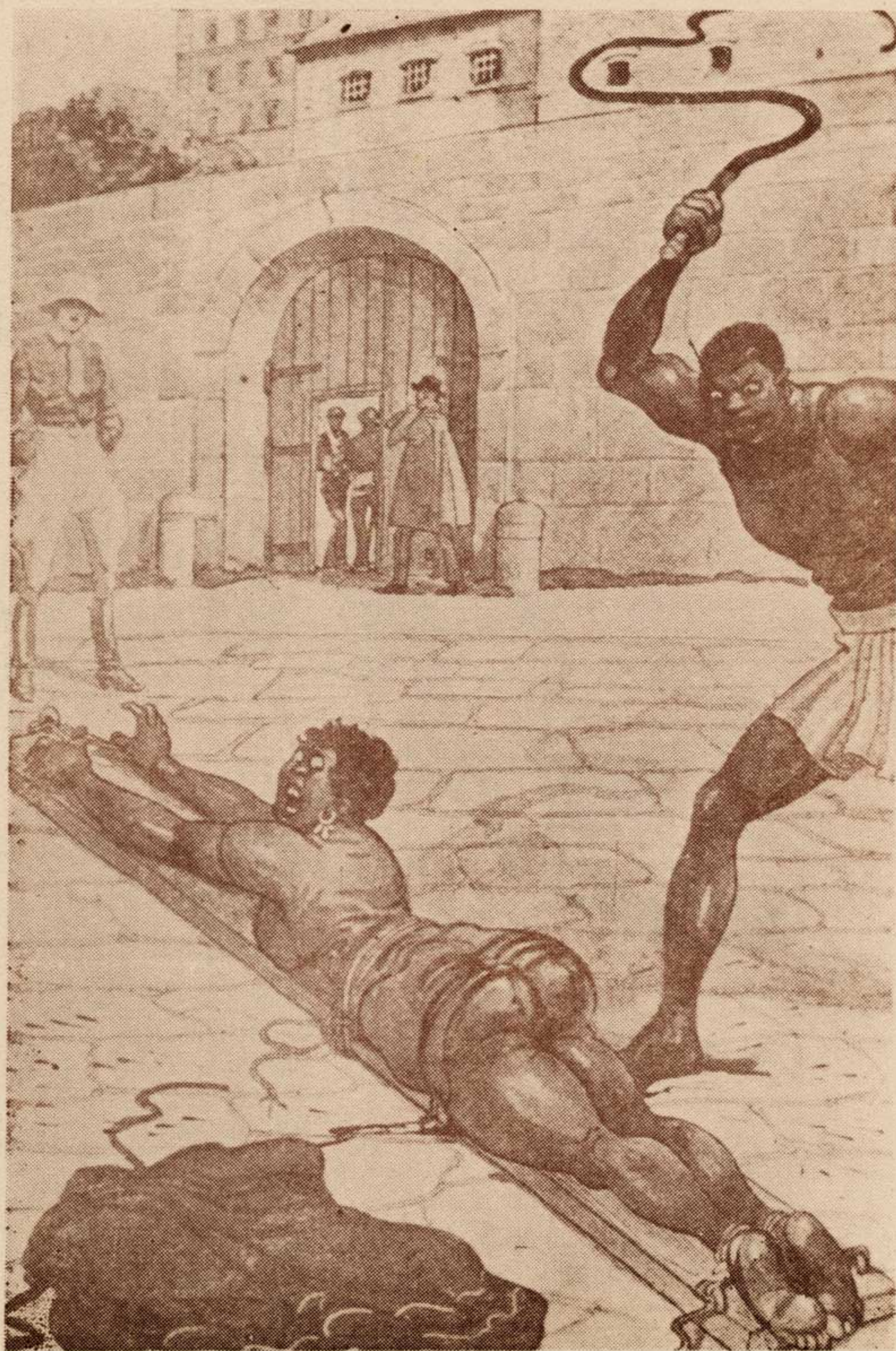


冷たいタイル



アブノーマル秘画展

鞭打する人々

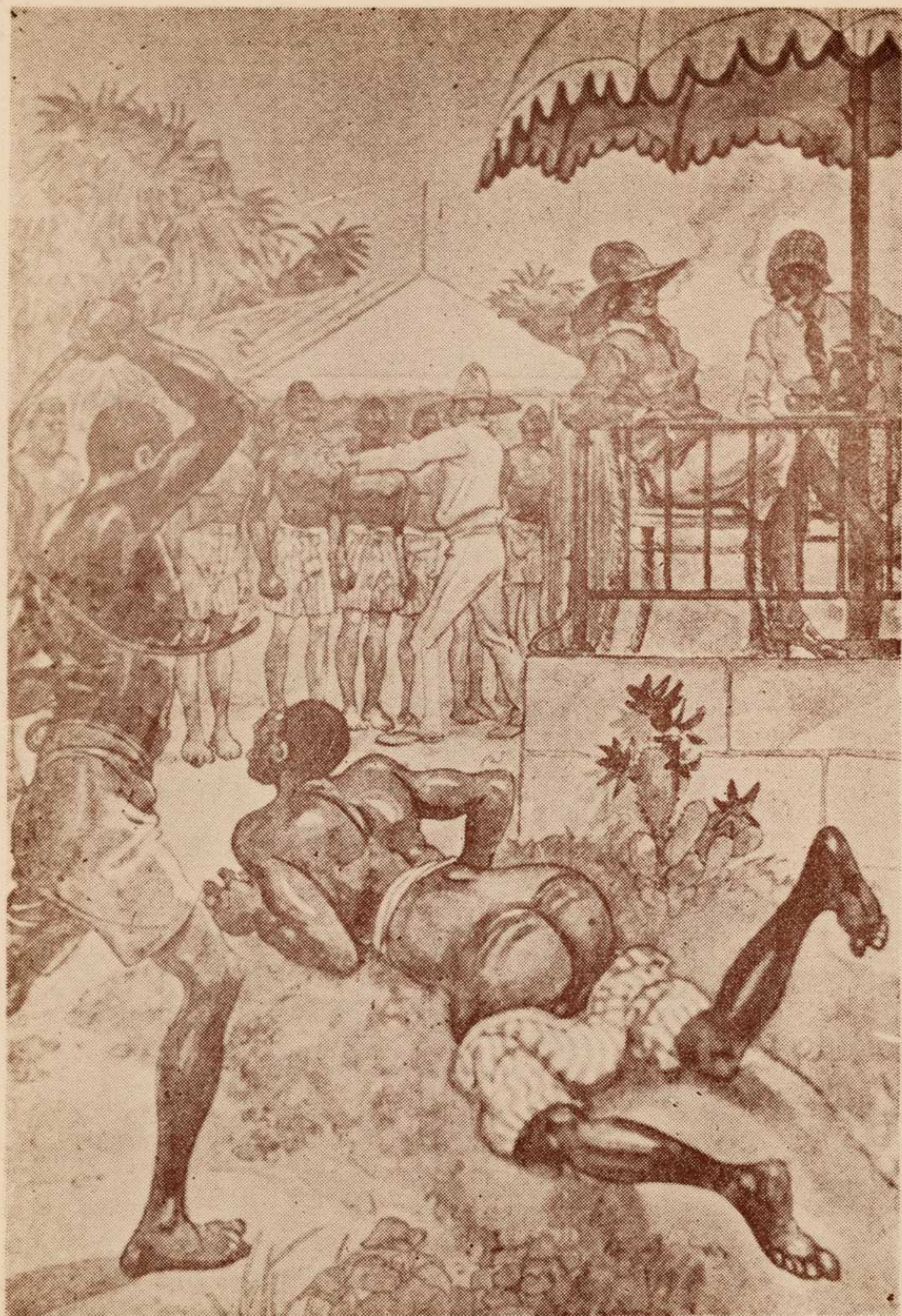


アメリカの鞭打小説のさしえ

鞭打小説のさしえ

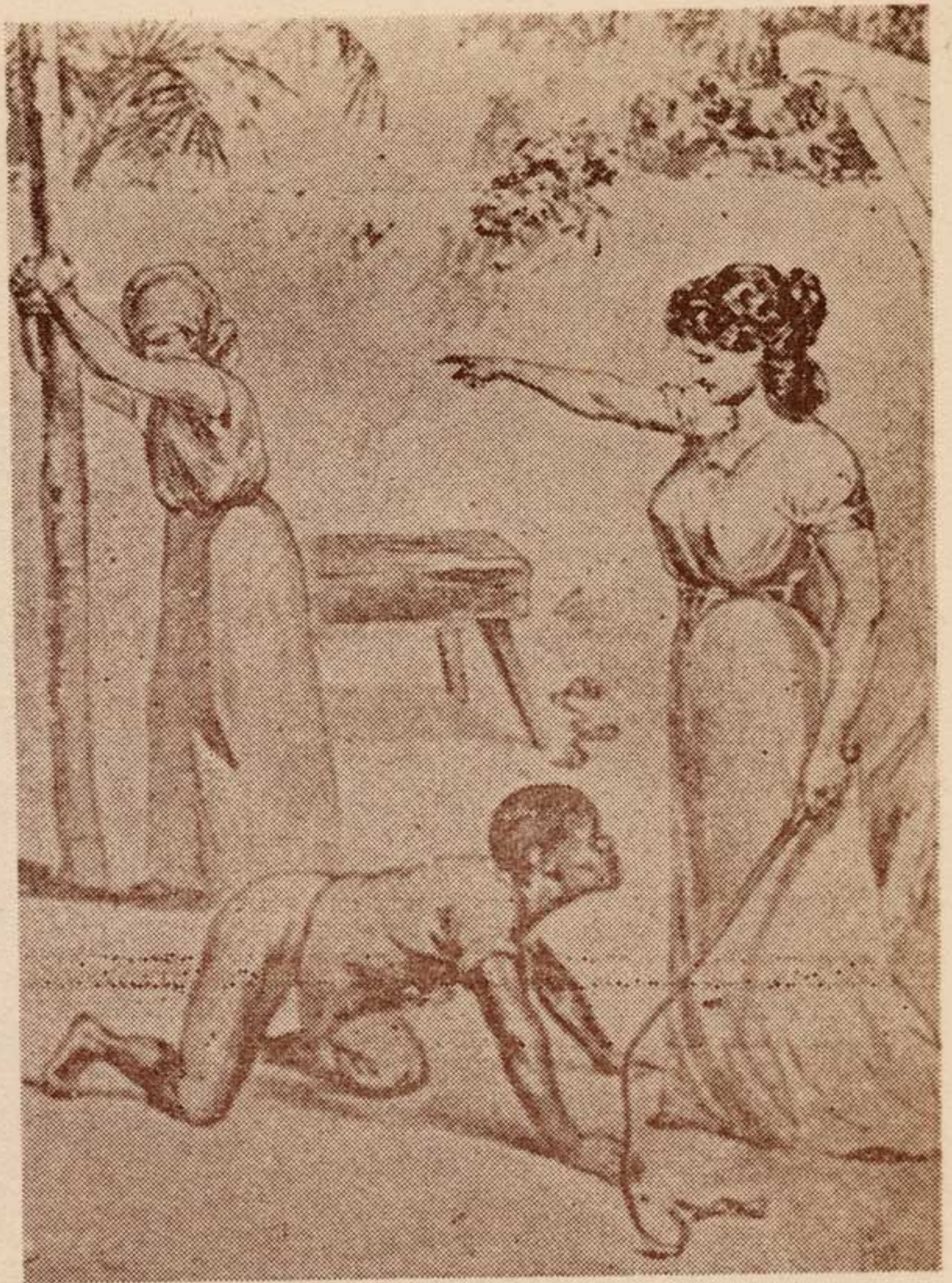


女のサディズム



アメリカの鞭打小説のさしえ

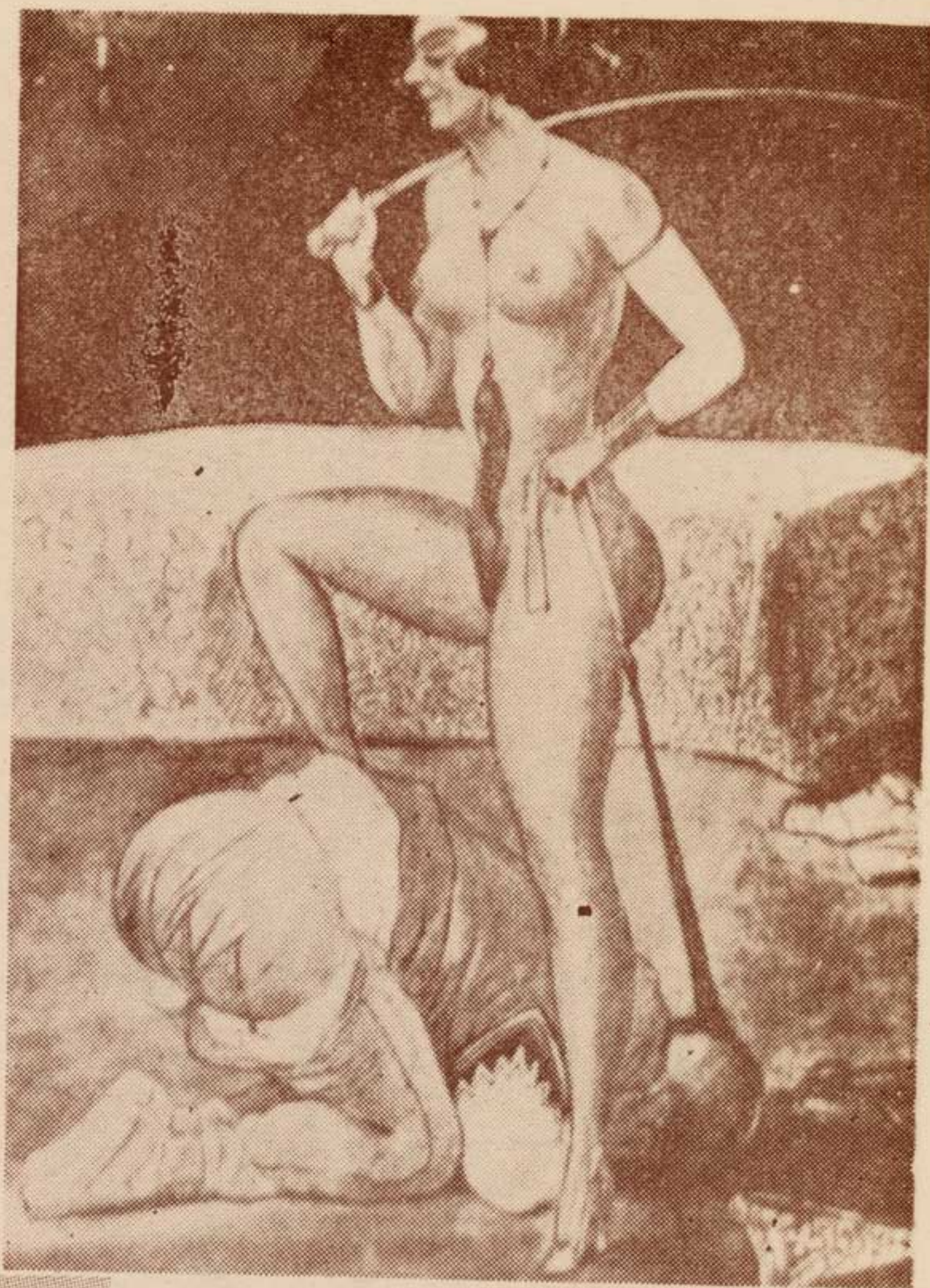
(右) イギリス版の鞭打小説のさしえ——立ち木にしばられた母親と性行為をするよう、ムチで強制される子供。(下右) ムチとオリで責められる。(下左) 性的犯罪者に対する鞭打。

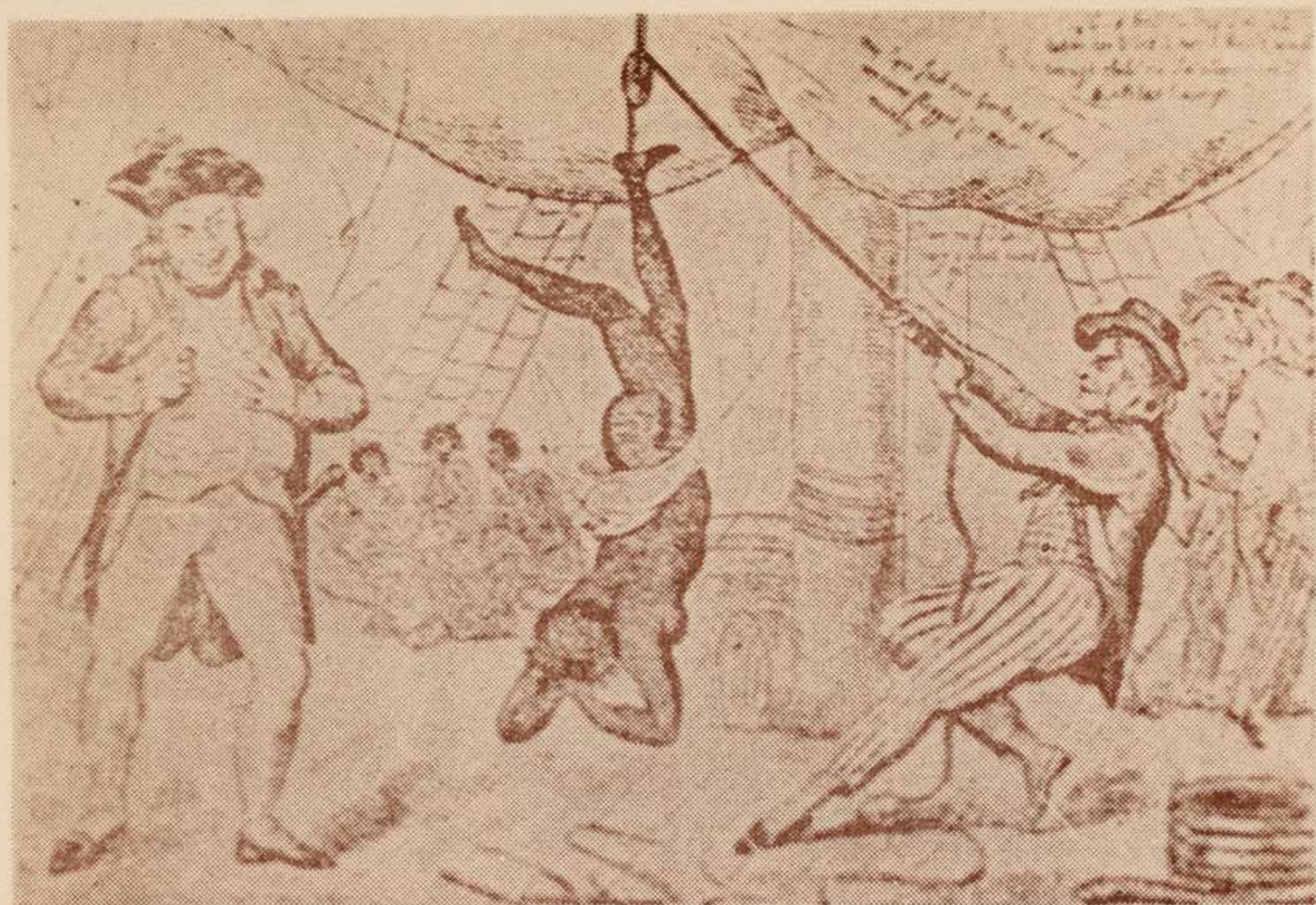


(左)ヘーゲマン筆の小説のさしえ、ピアノの練習、(下右)同じくヘーゲマン筆の鞭打もの、(下左)小作人をムチ打って責める地主の図。



(右) 女サディストに鞭打されるマゾヒスト的な男。(下右) 法廷でドレイを鞭打つローマのモザイク画。(下左) ジーベ
ン筆の「刑罰にあらわれたサディズム」

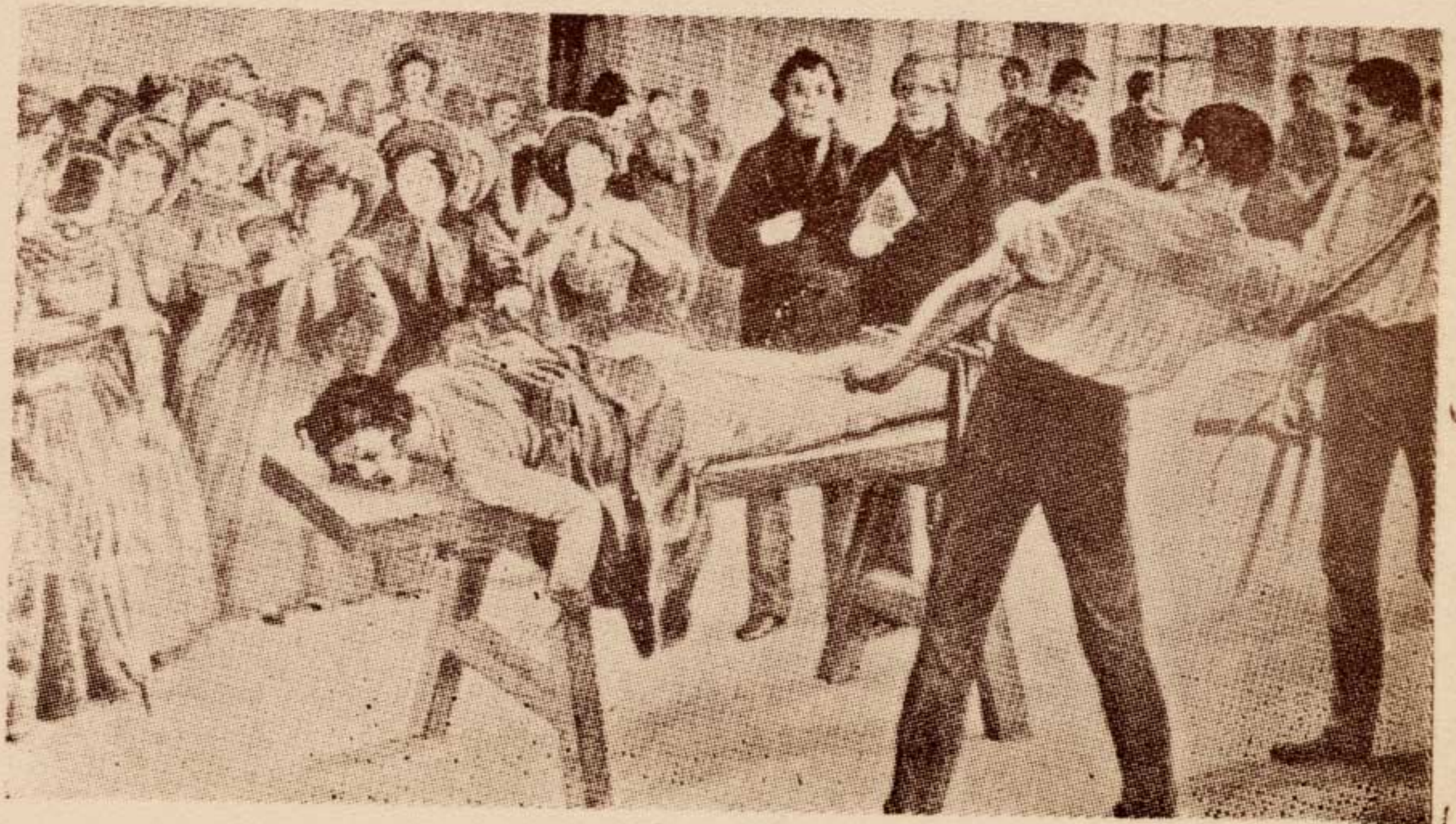


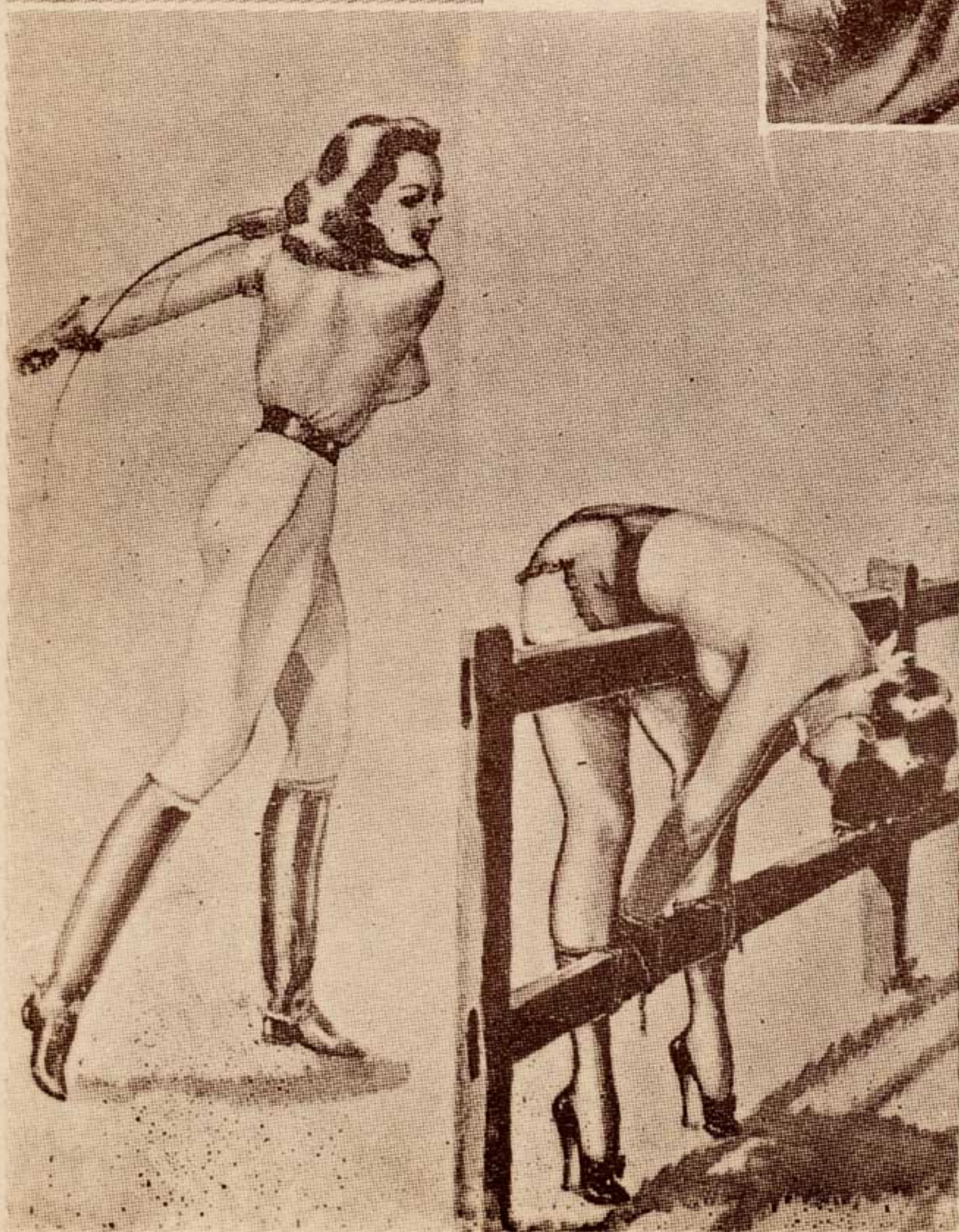


(上) 鞭打小説「奴隸船にて」のさ
しえの一つ。(下) ウィレット筆の
イギリス版の鞭打小説のさしえ。



女生徒をムチ打つ教師たち——(上)哀願する
 生徒の声もきき入れず下着をぬがせ、その丸
 いお臀にひとみを焼きつける教師たち。(下)
 薄いパンタロンを通してムチ打たれる女生徒





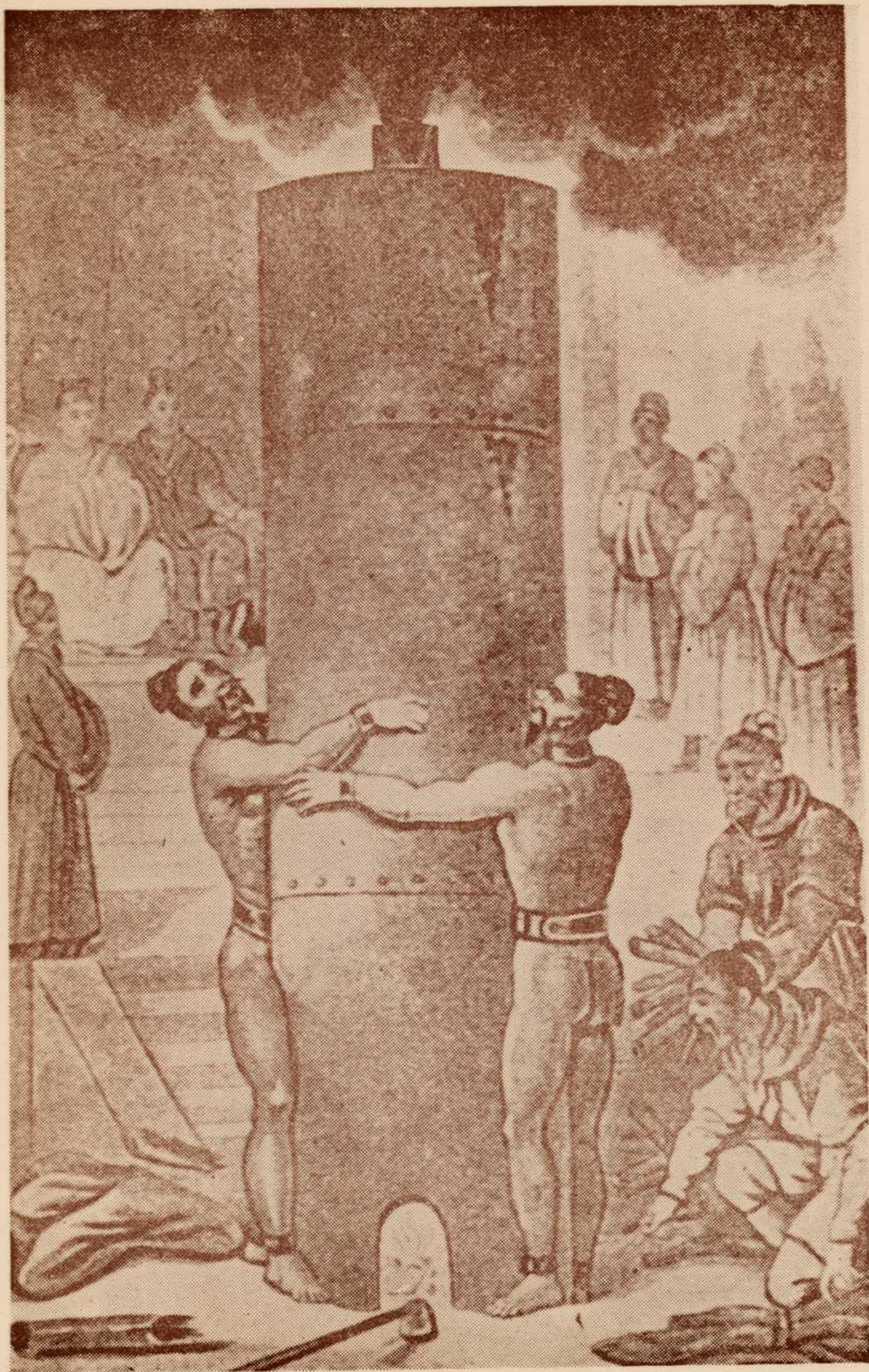
(上右) 小間使いをハダカにむいてムチ打つ女主人。
彼女の心は嫉妬とサディズムと同性愛が入りまじっ
ている。(上左) 女生徒をムチ打つオールドミスの教
師。(下) 黒人の女ドレイを鞭打する白人の女主人。

残酷なる刑罰

刑罰は、いつの時代でも、冷酷無残なものである。人間の心の奥にひそんでいるサディズムがひき出されるからだという。いくつかの絵画で、それを紹介してみよう。

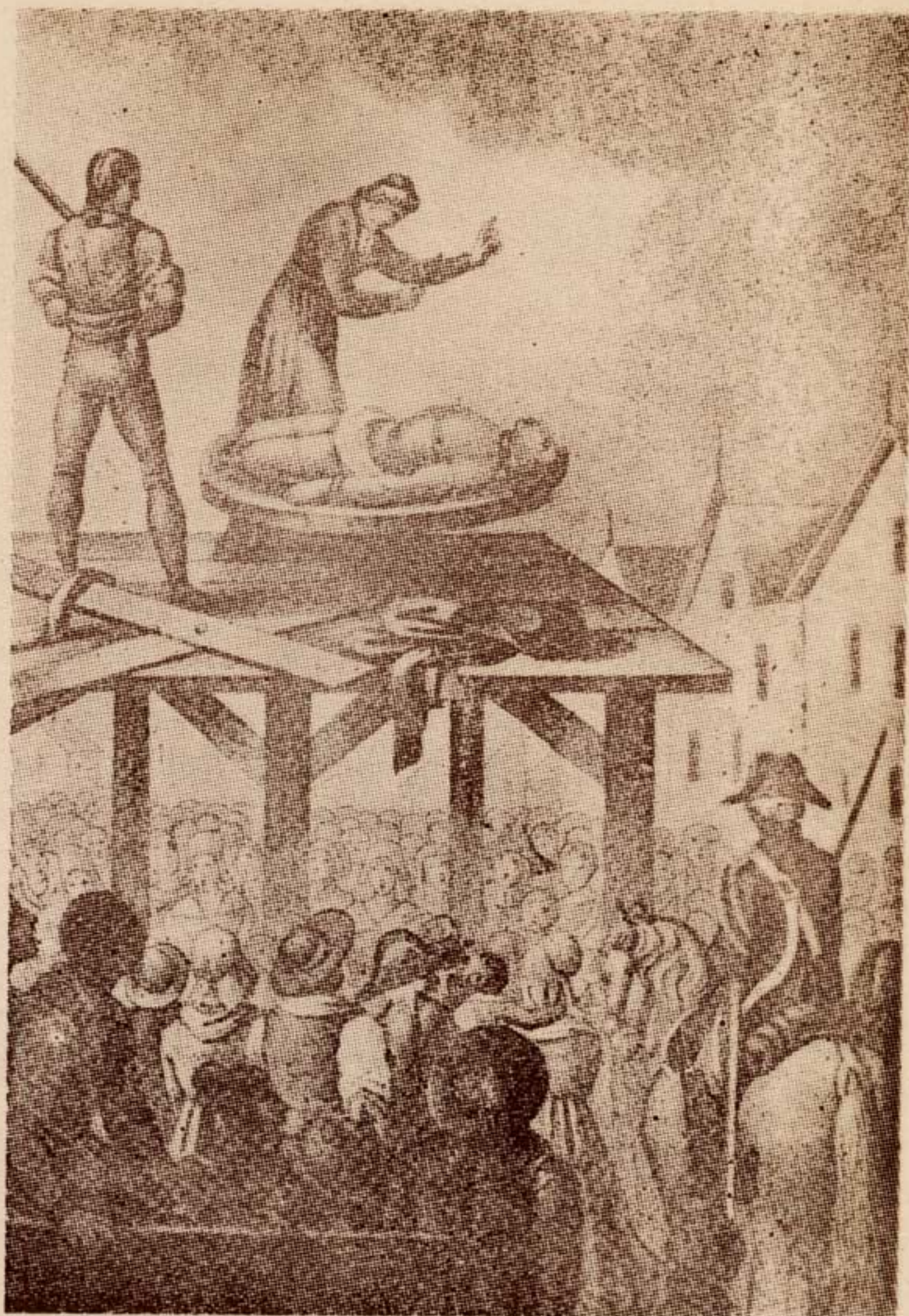
(左)性的犯罪に対する刑罰。目をえぐられ、胸を裂かれ、首をはねられるものもあれば、絞首され、火に焼かれ、手を切り落とされることもある。(下)支那の「指づり」の刑罰。





支那の炮刑——まん中のカマで火を焚き、罪人にそれを抱かせる刑

(右)一七五七年、ルードウィッヒ王の暴政を怒って、ナイフで暗殺しようとして失敗した錠前職人のロバート・ダーミエンが、パリの広場で、車輪にしばられて、断首された。(アルフレッド・クービンのペン画)



(左)懲役の判決を受けた娼婦や周旋人たちに課せられた剃髪刑を描いた、一七八二年のウィーンの銅版画。(ウィーン市博物館所蔵)



ドイツで出版された『支那の刑罰』の絵

奇妙な連中

世の中には、まったく奇妙な連中がいる。男や動物をもてあそぶ女獣がいたり、女をおもちゃにして性欲を充足させる人々だ。それを絵に描いてみると、ご覧の通り。

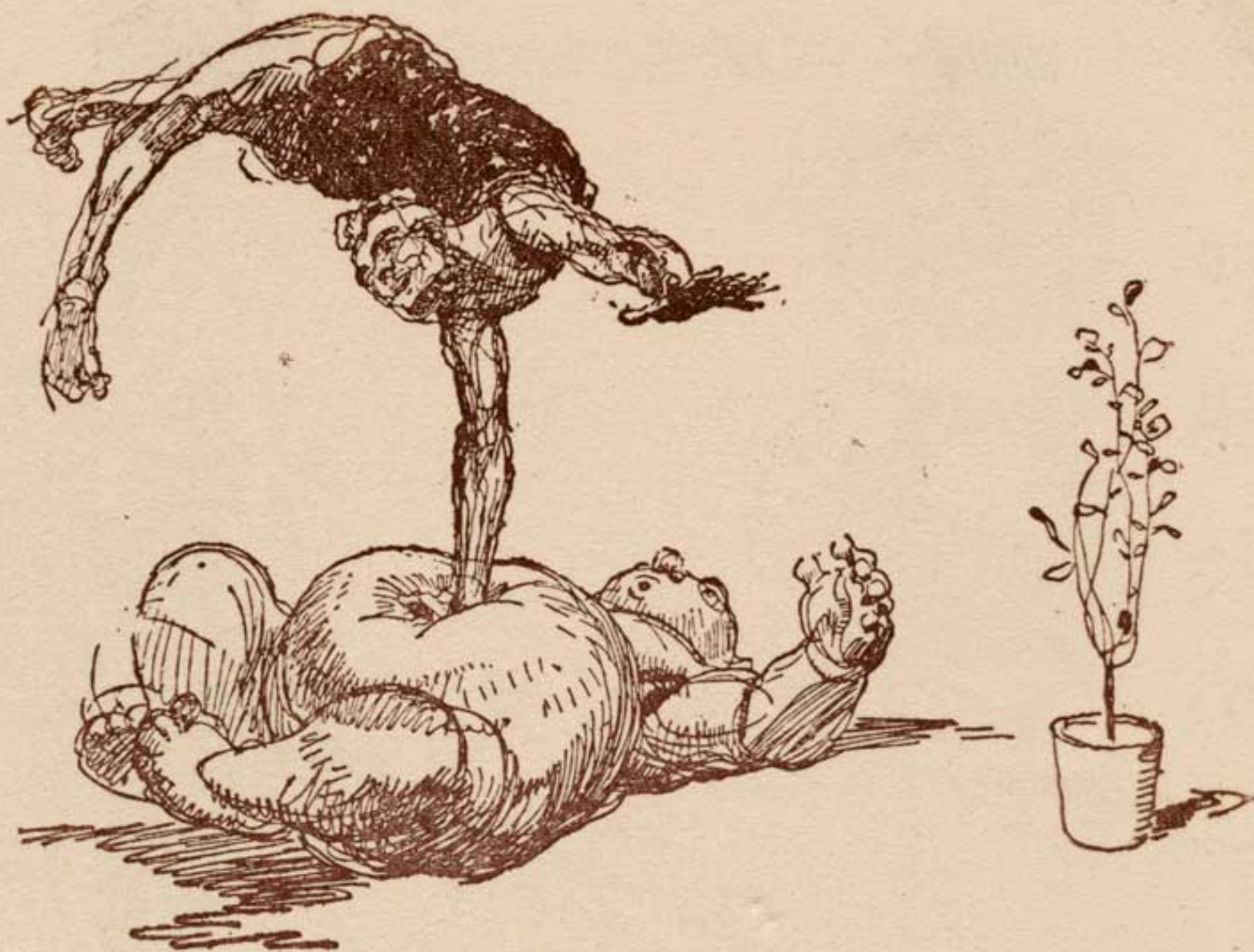


(上)ウィレット筆の、タベランのプログラムの表紙の絵。(下)巨大な人間馬に建物をつぶされて、あわてふためく人々の群れ。



(上右) 抜き身の剣に女を乗せて。(上左) 溺れる人。(左) トラとたわむれるハダカの女

お腹の上のサカダチ



人間の輪かさり



乗馬姿の女たち

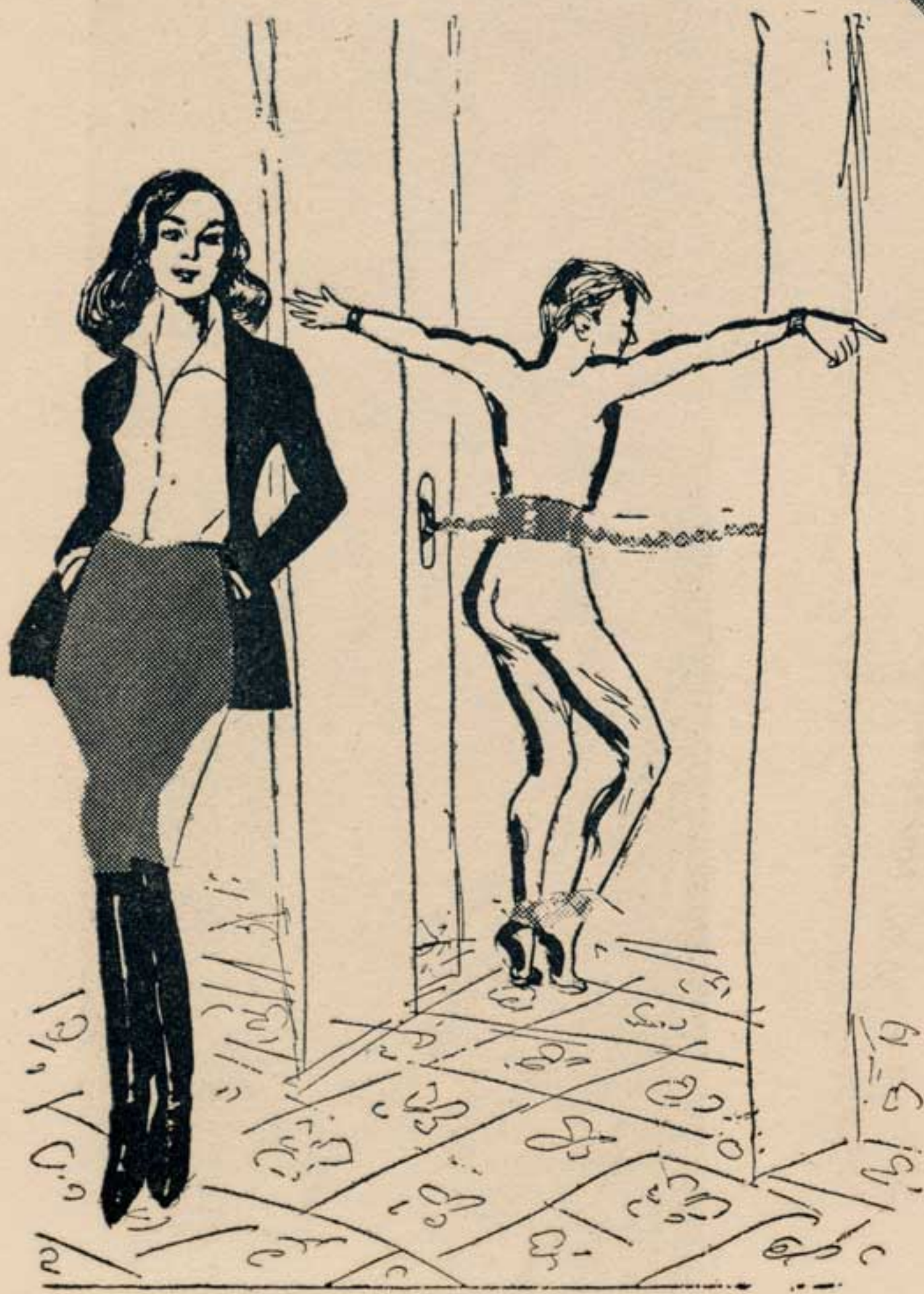
ファーラ・モロ筆の「女調教師」(「残酷なる女性たち」より)







(右ページの)上) マトーシュック
 筆の「残酷たる女性たち」のさしえ
 (同じく下右) ローラ・モンテス筆
 の「伝記」の中から
 (同じく下左) ルドルフ・シュリヒ
 テルの習作「女天下」
 (左ページの上) ヘーゲマン筆のさ
 しえ
 (同じく下) アメリカのポケット・
 ブックの表紙



マゾヒストの描いた女



乗馬服の女は、マゾヒストにとっては垂涎おくあたわぬものである。それを自分で描くことは、性向を満足させ、官能をこよなくかきたてるものなのだ。左は川奈平八郎、右端は市村俊作、中の二枚は山川貞吉氏の作品。

同性嗜虐



自虐画



自分をいじめるとき動物にたとえるのは、手近に求められる犬や馬が多く選ばれる。人面馬とか人面犬とかいうのは昔からよくあるテーマだが、これもまたそれを扱って、それなりにこなしている点おもしろい。三枚とも大峰久三氏の筆。



ALFRED HOLT MONT
DIE HOSENROLLE

ズボンをはいた女たち

原著・アルフレッド・ホルトモント
紹介・谷 貫 太

用された模様の中に「ズボンをはいた女」の
いることを示してくれます。

その時代は、先史時代ともいうべき時代で
す。その女たちは、アラビアの女性のような
薄物のズボンをはいて踊っています。

ついで私たちは、日常生活の中で、どのよ
うに女たちがズボンをはく機会が多かったか
を知るのです。そこには、東洋、北海地方、
エスキモー、支那、インドネシア、十六世紀
のスペインのケルト地方、ドイツ、スキチア
などの諸地方の名があげられて、その材質、
形状、出典が詳しく述べられます。

第一章では、環境や実用的理由、職業的理
由でズボンをはく女性の例として、十八世紀
までイザール地方（ドゥナ河上流の都市）の
教会巡礼の女性たちの例や、十九世紀のベル
ギー炭坑地帯の婦人、北海地方のキャビア製

造にたずさわる女たち、カウ・ガール、男性
と伍してゆくために男装したジョルジュ・サ
ンドや、女兵ウールヘルト侯夫人、クリスチ
ナ女王（スエーデン）などの軍務についた女
性たち、などをあげて、「一時的にズボンを
はく女性」を説明しています。

第二章では、スポーツとダンスのときの女
性のズボンを説明します。ダンスといっても
舞台舞踊ですが、スポーツとしては、馬術と
水泳をあげておられます。水泳は、いま考える
とおかしいのですが、昔のマック・セネット
時代の水泳着を考えてみると、なるほどと思
われます。女性の馬術は、サド・マソヒズム
にとても関係が深いのです。

第三章では「アマゾン」と題して、「戦士」
としての女性とその服装について、とくに詳
しく述べています。ケルン、ニュールンベル

この書物は、一九二五年、ミュンヘン市の
マイエル・エンセン書店で刊行されました。
服装または服飾の歴史や評論は、数多く出版
されていますが、この本は「婦人服の中でも
独占的な一部分を今日まで支配しつづけてい
るズボンについての研究」であります。

私たちは、男性の服装の特徴としてズボン
を考えるように習慣づけられて来ました。そ
の観念を打ち破るように、この本の序章の冒
頭には、ミケーネの印章（カット写真）に使

グ、ドレスデンなどで上演されたアマゾンの現われる演劇などを紹介したうえで、「アマゾン」が、現代では転意して「乗馬女性」を意味するようになったこと、とくに、婦人用片鞍で乗るのでなく、「またぎ乗り」をする婦人ということを言及して、昔からカテリナ

・ディ・メディチ、アルフヒルデ（東ゴート王ジークルトの娘）などが、またぎ乗りをしたことを述べています。

マゾヒストと自認する人々の多くが、女性のためにその馬となったり、犬となったりすることを夢に描くことは、今ではかくれもな

△第一図▽

い事実です。人に最も近く奉仕するこれらの動物の生活の中に、マゾヒズムを強く刺激するものがあることは、ひいては、乗馬するときに女性の着用する特殊な服装に惹かれるまでに至ります。

第四章は、カーニバルや祭礼の時の服装とか仮装について、第五章では、「ふたなり」を主題として、ズボンをはく女性の理想をいろいろな作品からぬき出しています。この部分では、トランスヴェステイズム（すなわち異性への変装に性的興味をもつこと）にふれて、女性の男装が性感覚と直結することにふれております。

第六章では、女性がズボンをはくことに対する反論や妨害について書いています。

以上が第一部で、第二部は、劇場での女性の男役について、第一章では、男役の発生の基礎、沿革について、第二章では、女性が出場しなかった中世、バロック時代の演劇について、第三章では、近代の女優の出現について述べています。ここで、私たちは、サラ・ベルナールの名前





△右・第二図
下・第三図▽

を発見します。

第四章では、ロ
ココ時代の喜劇の
題材となったズボ
ンをはいた女たち



について、第五章では、舞台で少年や少女の役をする女優について、第六章では、中世の中性的な人物について、第七章では、歌芝居、道化、舞踊劇の中に出てくる男役女優について、第八章では、十九世紀の男役女優について、第九章では、歌劇でのボーイ・ソプラノや男性ソプラノなどの音声表現と歌手の性別について述べています。

第十章は、終章として、近代女性の容姿と体格の変化について述べています。そこでは、ズボンが一般化してゆくこと、それが、女性の男性に対する心理的侵略を示しているものだということを例証しております。

全部二四二ページ、挿絵数九十三のこの書物は、一九二五年に書かれながら、今日に至るまで、その価値はきわめて高いものです。難読なまでに飾られた文章の一句一句は、著者の精巧な論旨と、おびただしい資料と研究とに裏づけられた自信が感じられます。

それでは、一枚ずつ、さしえについての説明をいたしましょう。私は、九十三枚の中から、十二枚をぬき出してみました。これ以外のものも、十分に資料としての価値もあり、珍貴なものばかりですが、同種重複して掲載されているものと、定められたページ数の関

係で、今回は掲載出来ないものです。

第一図は、士官と酒保娘。酒保娘とは、従軍して、飲み物などを兵士に売る売り子のことを指します。看護婦とは違って、兵士たちに精神的な慰めともなり、場合によっては、それ以上の慰めをも与えたようです。この女性らしい上半身の服装と、軍人のような下半身を見てください。優しそうなこの娘に、一旦事が起こったときの勇敢さが忍ばれます。女性的な魅力に、さらに異様な勇ましさが付け加えられているこの種の女性には、古来、性的崇拜者が多いのです。



△上・第四図、右・第五図▽

第二図は、オペレッタ「ファンタジオ」でのフロリンド・ガイスチンガーの扮装を示しています。この女優の名前はきわめて有名で

す。私たちは、ウィリイ・フリッシュの出演した「ウインナ物語」というドイツ映画で、彼女の存在を知りました。オペレッタの都ウ

△第六図▽



ーンでのメルバ的存在だったガイスチンガーは、その嬌^{きやうし}恣な態度によって、かえって、人々を惹きつけました。フォン・ズッペやヨゼフ・ランナー、ヨハン・シュトラウスなどの名匠の輩出した当時のウィーンでは、数多くのオペレッタ(「こうもり」「ジプシー男爵」「インディゴ」「ポッカチオ」など)が、ガイスチンガーによって有名になりました。

「ファンタジオ」というオペレッタについては、詳しいことはわかりませんが、この扮装は、現在でも、マゾヒストたちにとっては、魅惑的なものの一つです。この写真にも、明らかに放逸なプリマドンナの様子がうかがえます。

第三図は「鷲」に出演したサラ・ベルナール。この大女優の写真の中で、この写真は、かなり流布されています。多くの演劇書や評論が、この写真を掲載しただけでなく、女の男装とか、女性の男性的な扮装とか、倒錯的な性愛の対象とかいう意味で、性風俗史などにもしばしば引用されたものです。

ロスタン作ところの「鷲」は、戯曲としての価値もさることながら(ロスタンは、のちにアカデミー会員に選出されました)サラ・ベルナールの出演によって有名になったと思



＜第七図＞

われる作品でもあります。この写真は、ヨーロッパに多い靴愛好者の満足と同時に、マゾヒストの満足をも約束しています。純白と黄金の飾りのついた軍服と、それと対照的な黒い柔らかくなめした皮の長靴と拍車とは、意志的な表情とポーズとによって、その魅力を

倍加しております。もし、サラ・ベルナールたらずとも、この衣装をつけた美女が、同様の支配的な態度を示したときには、多くの礼賛者が雲集するだろうと思います。

第四図には「動物調教師(女性)」と名づけた、トゥルーズ・ロートレックの名画が示さ

れています。ロートレックは、曲馬の女を好んで描いた。ちょうど、ヴィリエ・ド・リラダンが徹底的に高踏的な作品を書きつづけながら、常に曲馬の女に惹かれ、イギリスに渡って、ついに曲馬の呼び込みにまでおちぶれてしまったことや、「アンリエットのパリ祭」という映画でジュリアン・デュヴィヴィエが、「異様な魅力を持った女！それはサーカスの女調馬師だ」と台詞でいわせていることは、どう考えてみても、曲馬の女、それも動物を仕込む側の女性が、マゾヒストとまでゆかずとも、マゾヒスチックな傾向のある男たちに、扇動的な魅惑を感じさせることは事実です。ロートレックは、せむしでした、倭人^{びと}でした。だから彼は、一方で、頑固なまでの孤高と高い芸術性を持ちながら、いや、持っていたればこそ、曲馬に働く、無知で単純な、ある意味ではだらしのない、それでいて美しい女たちに仕込まれる動物に、激しい共感を持ったのだともいえます。

第五図の象の曲芸も、そうです。作品としての価値が高ければ高いほど、私たちには、彼が、これらの作品を描きながら感じていただろうところの、激しい衝動を感じとることが出来ます。



△第八図▽

第六図は、ドイツの画家ルドルフ・シュリヒターの描いた、珍しい水彩画「フィルムデイヴァ」(映画のトップ・スター女優の意味)で、うしろをむいたり、横をむいた無表情は男たち、暗くぬりつぶされた画面に、うき上がるように描かれた女優の乗馬姿。

の長靴フェティシストだったことを知っています。彼に常に、モデルであった彼の妻に、鋏^{はさみ}どめ式の長靴をはかせていました。あるときは、有名な童話「長靴をはいた猫」と同じ題をつけた写真集を刊行しました。病弱であったシュリヒターは、その研ぎすまされた神経で、ウラグロニアを感じはじめました。そ

して「水に溺れるもの」という、頹廢の極致のような彩色画を描きました。まもなく、彼は、二十何歳の若さで死にました。一九二六年のことだったといえます。

その彼のかいたこの絵には、アブミがかいてありません。彼の分身である画中の馬が、フィルムデイヴァの脚と靴による圧迫を十分に感じるようにという心理からだろうと思われます。

その次に示す第七図「曲馬団の子ら」も、頹廢的な不健康な状景を、グロッスに似た画風にとらえています。子供らが、彼の好みの靴をはいていることに注意してください。このような、靴の習作と見られるものは、彼の遺品の中に無数に発見されました。その多くが、今となっては見ることが出来ないのは残念です。

第八図は、マリア・オルスカ扮するところの、ヴェデキント作「地霊」の女主人公ルルです。

「春の目覚め」によって有名なヴェデキントも、サド・マソヒズムと性愛との深い関係をよく把握した人です。私たちは、その断片を「春の目覚め」の台詞や場面に容易に拾うことが出来ます。

同時代のドイツ作家がすべてそうであったように、ヴェディントもまた、「つかれはてた後の世界」の人でした。ルルは、たびたび悪女の典型のように引用される女性です。オルスカの放奔なポーズは、この役柄を確かに写しとっています。

第九図は、オットー・ディックスの描いた「女調教師」です。誇張と省略のはげしい絵ですが、この、かなり有名な画家の作品は、女調教師の持つ痴呆的な一面と、荒んだ性生

△左・第九図、下・第十図▽



活と、適度の残忍さと、具合のよい華や

かさとを、うまく表現しています。なんとなく見ているうちに、湧いて来るような魅力に



惹かれるままに、あえて重複を恐れず掲載しました。

第十図は、アグネス・シュトラウプの扮するジョルジュ・サンド。「ヴェニス之夜」と

品り引きされた時代に、男に劣らぬ名作を生んだジョルジュ・サンドは、男と同列だという意志表示をするために、名前もジョルジュと代えました。姿形も男装して、葉巻をふか

いう劇の中の扮装です。本文にもたびたび出て来るように、「女性」だというだけで作の価値を割

して濶歩したのでした。この写真は、そのジョルジュ・サンドに扮したアグネス・シュトラウプが、ベルリンのカルメルシュピール（室内劇）に出演したときのものです。

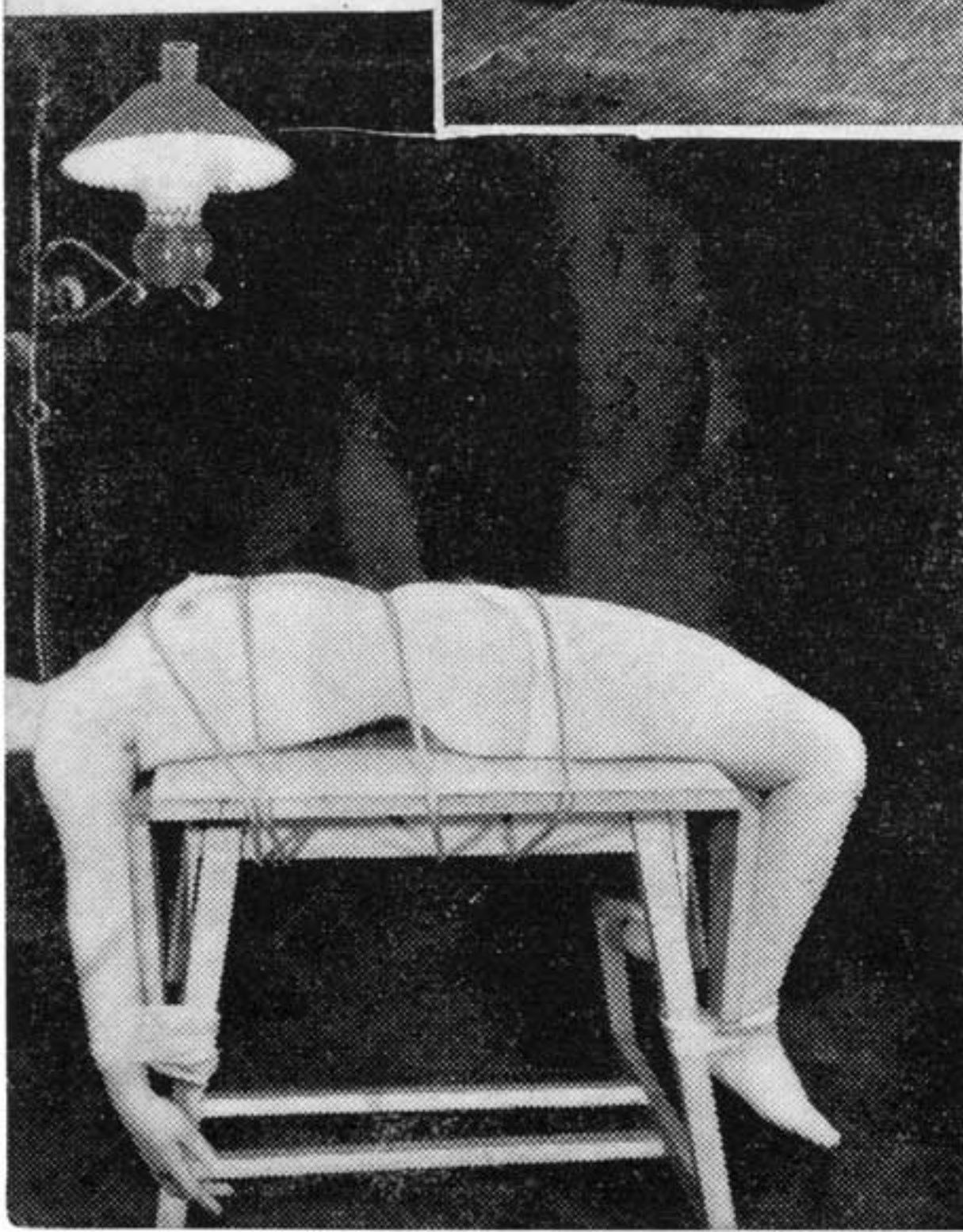
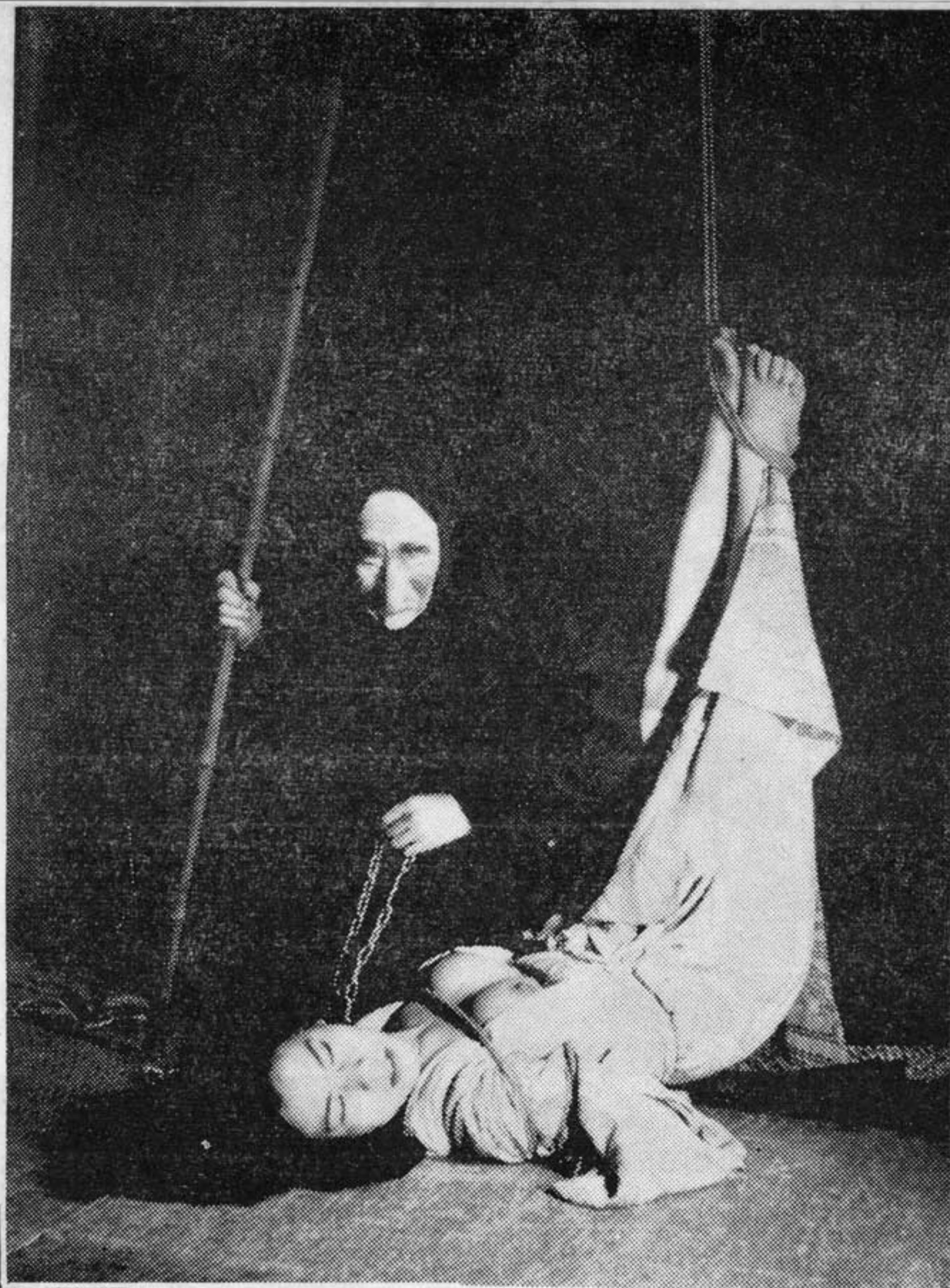
第十一図は、「市場の女と女鼓手」。エル・シュナイダーの「衣装画廊」の陳列品のなかの一枚です。左の市場の女の、なんともいえない特異な両性的な服装と、左の鼓手の上半身のいかめしさが、まことにおもしろい例図を示しています。

第十二図は、A・グレヴァンの「仮装舞踏会用衣装のデザイン」です、狩着と軍服とを上手に折衷して面白い感じを出しています。

△上・第十一図、下十二図▽



マゾの
女たち
偏奇莊奇譚



私が、独り身の気軽さと、多少の貯えもあって、自宅をアトリエに改造してから、もう二年になる。自分で新進さし絵画家とうたって、いろいろと出版社のさし絵の仕事を運動してみたが、そんなハタタリにひっかかって舞い込んだ仕事というのは、三、四流出版社のエログロ小説のさし絵だった。

ところが、半年ほど前、U誌から責め絵を書いてくれとの依頼を受けたとき、実際にある人が写したという門外不出の責め写真を見せられ、こんなぐあいに描いてくれ、といわれた。



私が、責め絵を描く場合は、別に資料も必要としないで、ただ、こんな風だろうというだけで描いていたが、どっこい命がけのモデ



変態性というのか、とにかくU誌の責め絵を描いて以来、にわかカメラマンに商売替えす

ルの姿をみていると、私の絵には、ウソが多かった。私は、こり性というのか、それともモデルのいうよう

なるほど病みつきになってしまった。アトリエの名も偏奇荘と名づけ、せっせとモデルさがしに、あちこちのスタジオへ日参した。

そのうちクラブの紹介で、S子というバアの女を知った。一日、S子を偏奇荘に呼んでモデルにし、存分に写すことができたが、S子は、縛られることに前もってストーリーを与えておくと、私がポーズをつける前に、神技に近い演技をみせた。そして、私のストーリーに注文をつけてきた。

どのモデルも、縛られたり、裸にムイテ柱

にくくりつけたりとすると、非常に興奮するものだが、S子は、どの責め場にも、自分を犯すことをねがった。

もちろん、私がその役目を果たす光榮に浴するのではない、彼女が、自分で勝手に、私を

暴漢として

想像するだ

けなのだが

……。

つまり、彼女

のほうから要求してくるのである。それもなかなか積極的に求めるのである。

たとえば、

「先生、いけない人になって、あたしを犯して」という。

そこで、私が強盗になったり、ギャングになったり、女学生を犯すチンピラになって、S子を犯すことになる。

私が暗示を与えると、遠くに離れていても

S子は、ひきつけたように五体を硬直させて



歓喜に悶えるのが常だった。

「あたし、このままじゃあ、

とても、結婚できそうもない

わね」

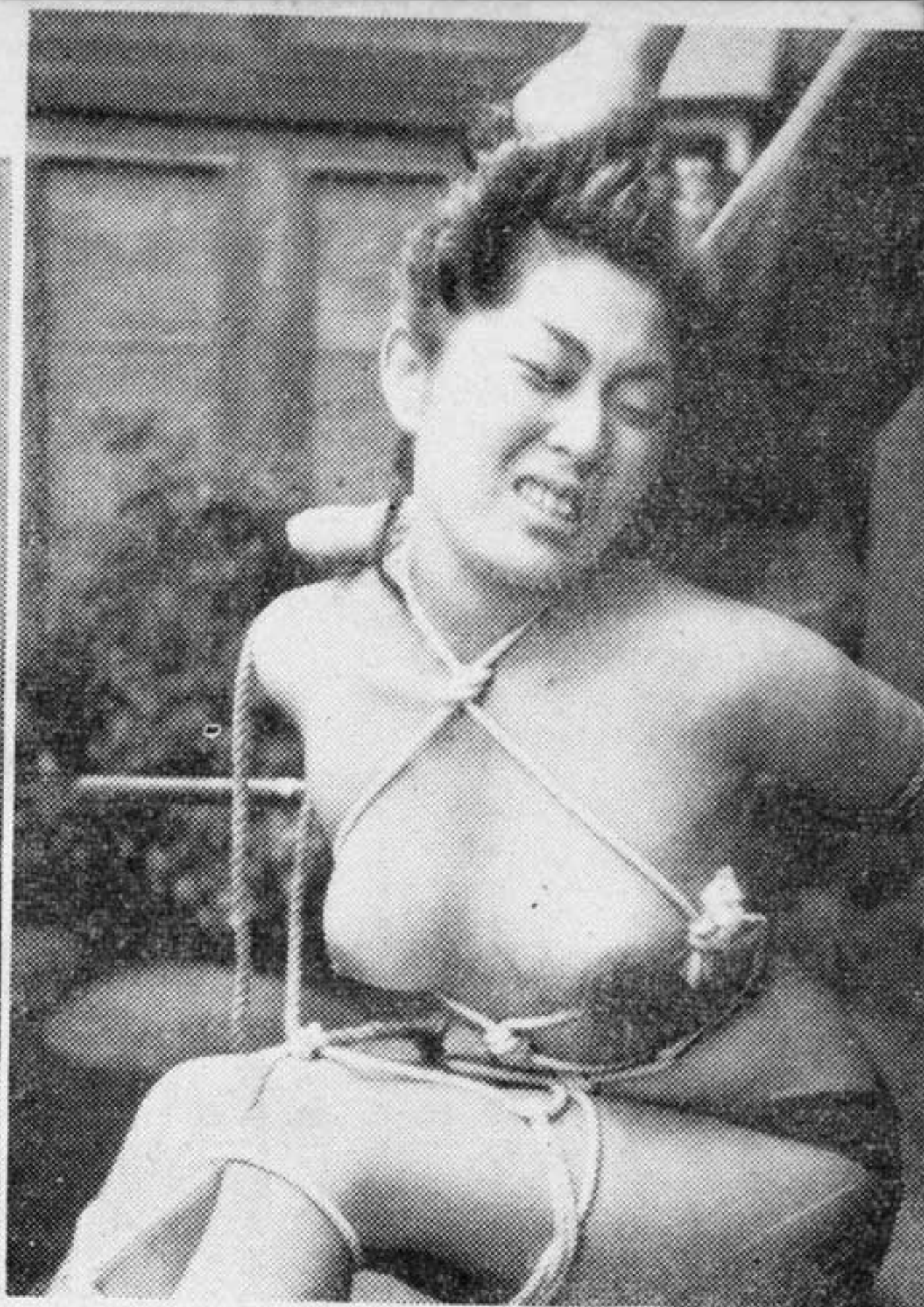
終わって、S子のさびしそうな姿を見ると、どこかで狂った女の性が、哀れに思えてくる。

三人目のモデルF子は、ア

ルバイトにヌードモデルをしている高校生であった。

十五歳というが、完全に成熟しきった肉体は、まさに水爆的で、バスト1メートル15センチという乳房は、逸品に価した。私は、絵を





描くときも、写真を撮す場合も、モデルが、男の交渉をもっているのだいたい見当がついたが、F子は、十五歳でもあり、少なくとも処女だと信じていた。

私の偏奇荘にF子が来はじめから四回目のとき、F子は、下着を脱ぎたくないらしく、浮かぬ表情だった。その日は、ちょうど写真原稿の締切りでもあったので、私は、無理に下着をとらした。乳房はもちろん、肉づきのよい下腹から腰にかけて、くっきりとロープのあとが青黒く、アザになっており、F子は身もだえして泣き伏した。

前夜、ひごろからつき合っていた町のズベ公たちのワナにかかって旅館に連れ込まれ、リンチ同様にしてチンピラどもに犯されてしまったのだ。



不思議なもので、F子は、それ以来、高校を中退したのか、ブラブラ繁華街をヨタって

いた。

金に困ると、偏奇荘にやって来た。前ほど若々しい色艶はなくなったが、誇るべき乳房は、かえって妖しさを増し、男のたのしみのためのものに見えた。

「あたいが、どんなリンチを受けたか、教えて上げようか」

F子は、針金を用意させて、乳房を幾巻きもその針金で丸くくくった。

しだいにきつくしぼられるのが、よくわかる。ムキ卵のようなスベスベした乳房が、はち切れんばかりにくびれ、F子は顔をゆがめ



て苦しがる。

「こうして、あいつらは、あたしの脇毛を一本一本むしりとったんだ」

といった。

紫色に変色したF子の脇の下は、無残な赤むくれにな

っていた。

モデルは、S子やF子のように、しだいに病的にマゾになってゆくものもいるが、だいたい、天姓の露出症と、好んで偏奇荘へくるマゾヒズムの性格が、どうやら私のマーケットをうるおしてくれている。

△殿村 七郎▽



恋の一念、蛇となる

絵と文
小 田 利 美



昔、紀伊の国日高川のほとりに、裕福な庄屋が住んでいた。代々続いた旧家で、村人たちの尊敬も厚く、城主からは苗字帯刀を許されるほどの格式をもった家柄であった。

なに不自由ない生活だが、どうしたことか、子宝に恵まれないのが、ただ一つの寂しさだった。女房が道成寺へ日参し出してご利益があったものか、その翌年に、めでたく懐妊して、元気な女の子を出産した。

城主が、その子を清姫と名づけてくれ、もう四十路になる庄屋のよろこびは大変なもので、明けても暮れても、清姫を手元から離さない溺愛ぶりは、異常なほどだった。

清姫が少女期にはいったころは、その美しい容姿が、すでに人目をひくようになり、庄屋はそれが自慢で、近くの大引白崎の浜や、季節になると家の蜜柑船に乗せて、遠く浪速の里までも清姫をつれてまわった。

清姫が十七歳になった。静かな庭に梅の実が鈍い音をたてて落ちる宵、恋しい人の面影を追って、彼女は乙女の血を燃やしていた。

年に一度、熊野路を下って来て、宿をとる美しい旅僧安珍に、清姫はいつしか心を奪われていたのだ。今年もその季節がきた。南国育ちの乙女の恋は、慕情に熱く濡れていた。



・ 庄屋は商用で泉州の岸和田へ船発ちして、もう五日あまりになる。清姫の母は、新宮の実家へ法事に出て不在だった。奉公人たちのほかは、清姫ひとりである。そんなある日、恋しい安珍が、紀三井寺を参拝ののち、宿を求めて屋敷をおとずれてきた。

「安珍さま、お待ちしておりました」

久しぶりに会う安珍は、白い歯を見せて微笑しながら、

「おお清姫殿、お美しくなられたのう」

と言って、旅装を解き、法衣をあらためて、清姫がいてくれた抹茶を、目を細めてすすった。清姫のなまめかしい体臭が、彼の旅に疲れた神経を心よく刺激した。

むっとする、強い青葉の香りが漂う庭園の岩石に腰を降ろし合った時、

「安珍さま……清姫は……」

彼女の声は、言葉にならないかすかなものだったが、その瞳は乙女の情感をこめて、安珍の愛撫をひたすら求めていた。安珍は、仏門に仕えるわが身も忘れて、思わず清姫を抱き寄せると、形の整った女の唇に、自分の熱い唇を重ねた。その夜の二人は、激情のままに肉欲のトリコとなり、清姫は初めて知った女の愉悦に泣き濡れて、身もだえ続けた。



朝、安珍が目を覚めると、清姫はすでに起きて、新妻のようにうきうきと、満ち足りた気持で、朝餉の支度にとりかかっていた。

煩惱に負けた安珍は、仏門に仕える身の、女犯の罪の深さを考えると、修行僧として、師の坊に対して、とりかえしのつかない過ちをしたと思ひ、清姫への愛情よりも後悔が先にたった。今年の旅を最後に、近江に帰ると、師の御坊にかわって一山を任される約束の安珍にとって、清姫との情交は、一夜の思ひ出として、心の奥に秘めておきたかった。

安珍が修行する法華宗では、女犯は破戒の一つであるだけに、妻帯を厳しく禁じているので、清姫を妻にすることは不可能だった。意を決した彼は、清姫に気づかれないうちに、そっと旅装を整えると、裏庭から抜け出して、足早に熊野路を上って行った。

日高川は雨季で増水していた。渡し守りに過分の金包みを出すと、

「船頭さん、もし、あとから娘が追って来たら、この川を渡さないでくれ」

と頼んで、無事に対岸へ着くと、いっそ足を早めた。しかしその時、着物の裾を乱し、必死の表情で、清姫は、恋しい、夫と決めた彼を追って、川岸までたどりついた。



「もし船頭さん。お願い、早く舟を出してください。さっきの御坊に用事があるのです」
 「雨のあとで、川はこのとおりの増水だ。今日は渡されねえだよ。それに、お坊さんとか言いなさが、そんな人は来ねえよ」
 「私の大事な夫です。お願い、どうか舟を出してください」

しかし船頭は、清姫の願いを断わった。清姫の悲しい瞳から、幾筋も涙があふれ、顔色が次第に青ざめて、小刻みに五体を震わしたかと思う瞬間、口が大きく耳元まで裂け、らんらんと輝き、日高川の水面をにらむと、妖艶な姿が徐々に蛇体に化身していった。蛇体の周囲に幾条もの炎が燃えあがった。これを見た船頭は腰を抜かして気絶した。

清姫が蛇体となり、追って来るのに驚いた安珍は、日高川の近くにある道成寺の石段をかけあがり、住職に頼んで、急いて釣鐘を降ろしてもらい、その中へ隠れた。しかし法衣の裾が出ていたため、これを見た蛇体は、釣鐘に巻きついて、執念の炎で、ついに安珍を焼き殺した。恋に生き抜く女心と人は言う。けれど、清姫の恋の執念は、今もなお、紀州女の情愛の激しさを、そのままに象徴しているといわれる。

人間ステーキ

第二次大戦中、北アフリカ戦線のロメル將軍麾下のドイツ軍を銃撃したアメリカ空軍のヒュー大尉は、帰途、カナリア諸島の小島に不時着してしまった。

原住民は、長い間スペイン領であったため親ドイツ的で、英米軍のパイロットたちが、今までもいくどとなくカナリア諸島に不時着するが、いつも消息を絶った。

そんなわけで、ヒュー大尉は、炎上するP38から脱出、三日分の携帯食糧とピストルを持って、ジャングルに潜入した。

一日目、彼は北に向かって八キロほど歩

いた。ひる間は、毒蛇や、赤サソリに悩まされたが、何よりも恐ろしいことは、原住民の襲撃だった。その日の夕暮れ、彼は突然、行手にポツカリと平地のある不幸な場所に飛び出してしまった。ジャングルはそこで止まり、青々とした丘陵がつづいていた。

彼は、夜をまって、くぼみのある湿地に身をかくしていたとき、ふと目前一ヤードのところに、認識票を手首に付けた真新しいパイロットの死体を発見した。しかも驚いたことに、死体は、こんがりと焼かれ、胸・腰・腿の部分は、あきらかにえぐりといったと思われる

るほど口をあけていた。豚の丸焼きのように、長い時間火にあぶって殺害したものだ。その時彼は原住民に捕えられた。

原住民の部落は、すぐ近くにあった。入り口の木柵に、もう一人パイロットの死体とともに、首を切られた原住民の女の死体が吊るされてあった。

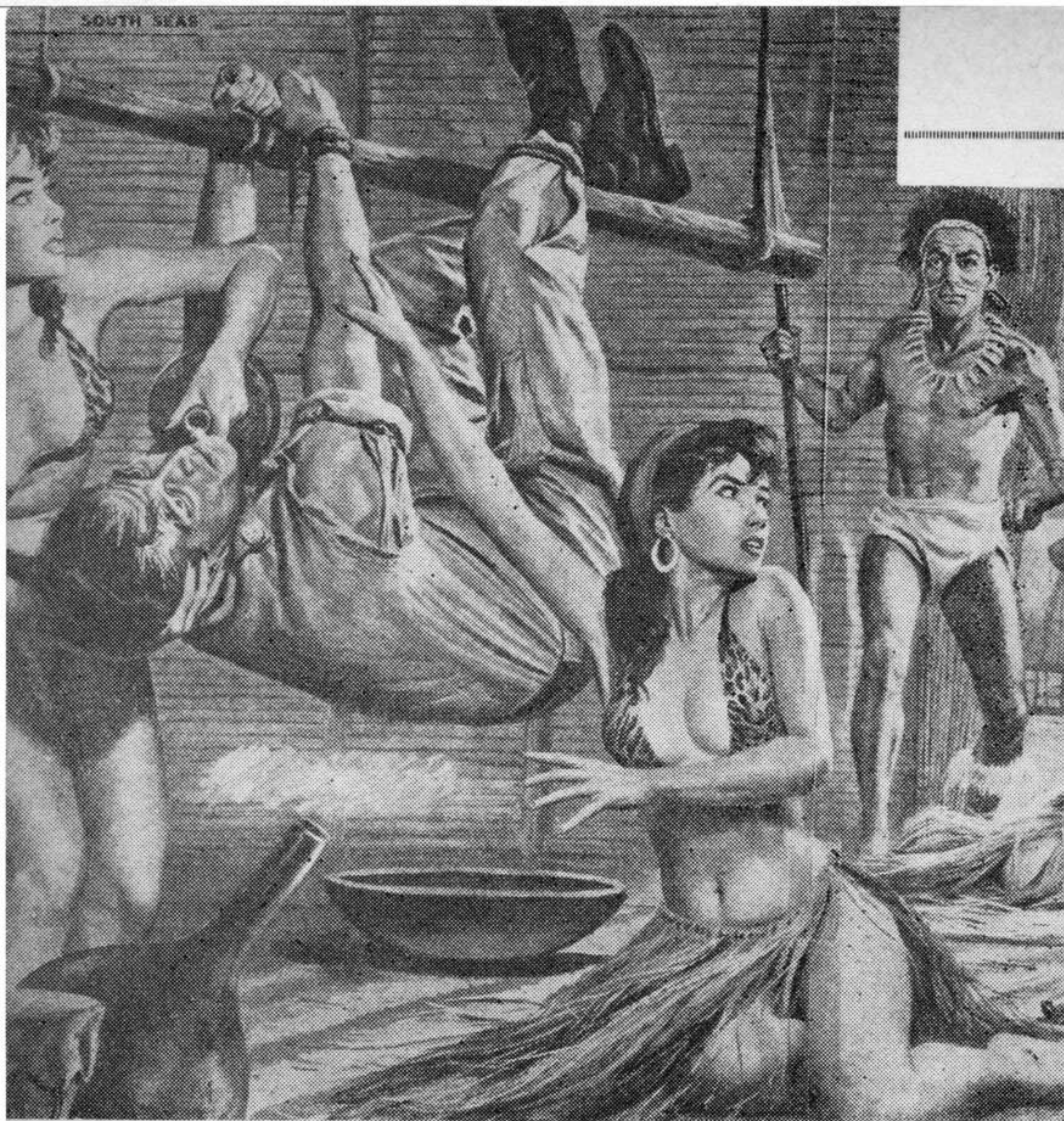
獲物への喚声が部落中をわきたたせた。戦時中の輸送困難に加えて、この小島は、すでに飢えていたのだ。人肉ステーキが行なわれるあいだ、彼は、小屋の中に、両手両足を豚のようにくくられて吊るされた。

それからまもなく、強烈な体臭をおわせた若い原住民の女の訪問を受けた。これは、この島に伝わる、ステーキ前のオードブルに似た奇妙な愛撫だった。全裸になった女が三人、くくられた彼のからだをまさぐり、そして律動した。

彼は、こうして男の精気のすべてを吸いとる魔女の秘術を知っていたので、悲鳴をあげた。やがて、精魂つき果てた彼の耳もとで、女がささやいた。

「最後のチャンスです。逃がしてあげる」
彼は、苦痛の中でうなずいた。女たち





は、捕えられたパイロットをこうして助けようとしたのかも知れない。ドラムが調子を変えた。時刻が迫っているのだ。

やっと解きはなされたとき、二人の男が手に槍をふり上げて入って来た。

「危ないッ！」

ピュッと、槍が彼の肩をかすめた。女の一人が立ち上がって、ふり上げた槍をみずからの胸に受け止めて、のけぞった。

「今のうちに西へ、川づたいに逃げて」

彼のピストルが火を噴いた。

一瞬、部落は蜂の巣をつついたようなさわぎになり、暗やみの中にたいまつが彼を求めて流れ出した。

二人の女は、彼を両側から抱くようにして走った。そして、彼がはっきりと水の音を耳にしたとき、はじめて女たちの顔によろこびの笑顔が浮かんだ。

「あなたは幸運を拾ったのよ。この川をもう少し下ると海に出る。そこにあなたの方のお友だちが残っていた無電機があるわ」
女は川の中に彼を突きとばした。

「さよなら。アメリカさん」

死の砂漠行

一八九九年、南アフリカに起こったボーア戦争で、イギリス軍は、原住民に対して大規模な殺戮を行なった。

イギリス軍がかつてインドのアッサム地方で行なった大虐殺よりも、徹底的にボーア人に殺戮を試みた。

ことに、カラハリ砂漠に設けられたボーア人の収容所は、ナチのアウシュウィッツ収容所にもひとしい非人道的な死の檻であった。

まして、土民軍であるスーダン人を、カラハリの収容所警備につかせてからは、誇り高きボーア人は、全くその色を失った。男たちは、罌丸をくりぬかれて、手足を熱砂の大地に仰向けにくぐられ、太陽に灼き殺された。

首都ヨハネスブルグからうしろ手にくぐられて半裸のまま連れてこられる若い女たちは、もっとひどかった。

あえぎながら、砂上を行く瀕死の女たちへ、馬上にまたがる警備兵のロープから七、

八人ずつ一列に並んで歩いた。途中で、もし倒れることがあっても、

決して、その女の回復をまつようなことはしなかった。ずるずるとひきずられてゆくうちに、皮膚が熱砂に灼

けただれて破れ、鮮血が、何キロも滴りつづいた。

こうした地獄行きが終わって収容所に入ると、彼女たちの強健な肉体に、こんどはスーダン人の集団暴行が行なわれた。彼女たちは、この畜行を、英軍に抗議したが、聞き入れられないばかりか、その首謀者とみなされる三人の女と一人の男は、反逆者として有棘

鉄線をか
らだに巻
きつけら
れて絞め
殺され、
裸にむか
れた死体
が人目に
吊るされ





た。

残された女たちは、ついに発狂的な脱出を計画しなければならなかった。

夜明け前、各收容所のトビラがいっせいに叩きこわれ、喚声^{かんせい}をあげた女たちが收容所を取り巻く有棘鉄線^{ゆうしきてつせん}めがけて走った。

抹殺するにはまたとないチャンスとばかりに、望楼に立てこもった警備兵たちは、一斉射撃を行なった。

有棘鉄線にたどり着く前に、女たちはバタバタと倒れた。

しかし、何人かの女は、幸運にも奪い取った金具で鉄線を切り開き、所外に脱出す

ることができた。警備兵は、脱出した女を、すぐには追わなかった。

北方には、死のカラハリ砂漠がひろがっている。

たとえ脱出しても、夜が明け、太陽が上れば、寸時も、灼けた砂中に立ってられないことを知っていたからだ。

女たちは、ほっとしたようだった。北へ北へと歩くうちに夜が明けた。

陽が上り、しだいに息苦しく、全身がかわききったとき、ラクダに乗った凶悪なスーダンの騎兵隊が、彼女たちの目前に姿をあらわした。

女たち

は、騎兵隊の淫らなかん声に絶望的に両手を上げ、へたへと砂中にくずれた。

やがて槍を手にしたスーダン人が女の周囲をまわりはじめた。

ふき出した血がたちまち乾燥して、女体をいろどった。

△北原雄三▽



愛欲に狂う氷原

この三、四年、アラスカ地方のラッコの密猟は盛んに行なわれていた。ことに、コークソーク河口では、密猟者、つまり無法者たちによって、土着のエスキモーもさんざんひどい目にあっていった。

なかでも、十年も前にヨーロッパから出稼ぎに来た、ペリー・ルイス親子は、お人好しのエスキモーを手下にして、莫大な利益をあげていた。

酋長の娘ヤーナは、ペリーの息子、ジョーを慕っていた。というのは、酒飲みの残忍な親父に少しも似ていない、密猟者には珍しく端正な若者だったからである。

ところが親父は、いそいそと彼の豪華な雪小屋にやってくるヤーナの見事な肢体に劣情を燃やしていた。

ことに、幾人もの若いエスキモーの娘たちを手ごめ同様に犯して来た親父にとって、その肉感のスバラシさを、ヤーナの肉

体に見いだしたのだから、たとえ息子であろうと、ムラムラと嫉妬の炎を燃やさないわけにはいかなかった。

ジョーは、親父にかくれて、雪原のほこらでヤーナと逢いびきを重ねた。

親父は、それを、穴倉に入ったアザラシかと思ひ、ライフル銃をぶっぱなした。しかし、幸い、的はずれて、命からがら這い出した全裸の若い二人の姿を見ると、親父は、怒りをこめて酋長のもとに行った。酋長はおびえた。一発、頭にライフルをぶちこまれて、凍りついたコークソークの河にほうり込まれた善良なエスキモーたちを何人も知っているから。

「いいか、お前の娘が、オレの息子をたぶらかしたのだぞ。今夜、お前たちの掟にしたがって、お前の娘の皮をはぐのだ」

酋長は、親父の言葉に逆らえず、おろろとしてうなずいた。

ラッコの皮をはぐように、不義を犯した者への罰は、生きながらにして洋槍で首から股間まで立ち割り、生皮をはぐという残酷な掟がエスキモーには古来からある。

北極の白々とした夜、ヤーナは、酋長に宣告された。氷原に打ち込まれた棒杭にうしろ手にくぐられたヤーナは、深い悲しみにうち伏し、処刑を待った。



一方、ルイス親子は、ヤーナの処刑をめぐって醜い争いに、ここを先途と戦っていた。

さすがに親父は、長年鍛えた腕に勝^{まさ}っていた。

必殺のパンチにのびたジョーを残して、親父は処刑場に向かった。しかしジョーはかすかな意識のなかに、エスキモたちの「葬いの歌」を聞いて立ち上がった。「ヤーナ！」彼は、小舟をあやつり、その歌声に向かって漕ぎはじめた。

ヤーナの胸に擬せられた洋槍が、ギラギラと光った。酒をあおった親父が、大声で笑った。

「ヤーナ、お前の生皮は、オレが最高の値をつけてやるからな」

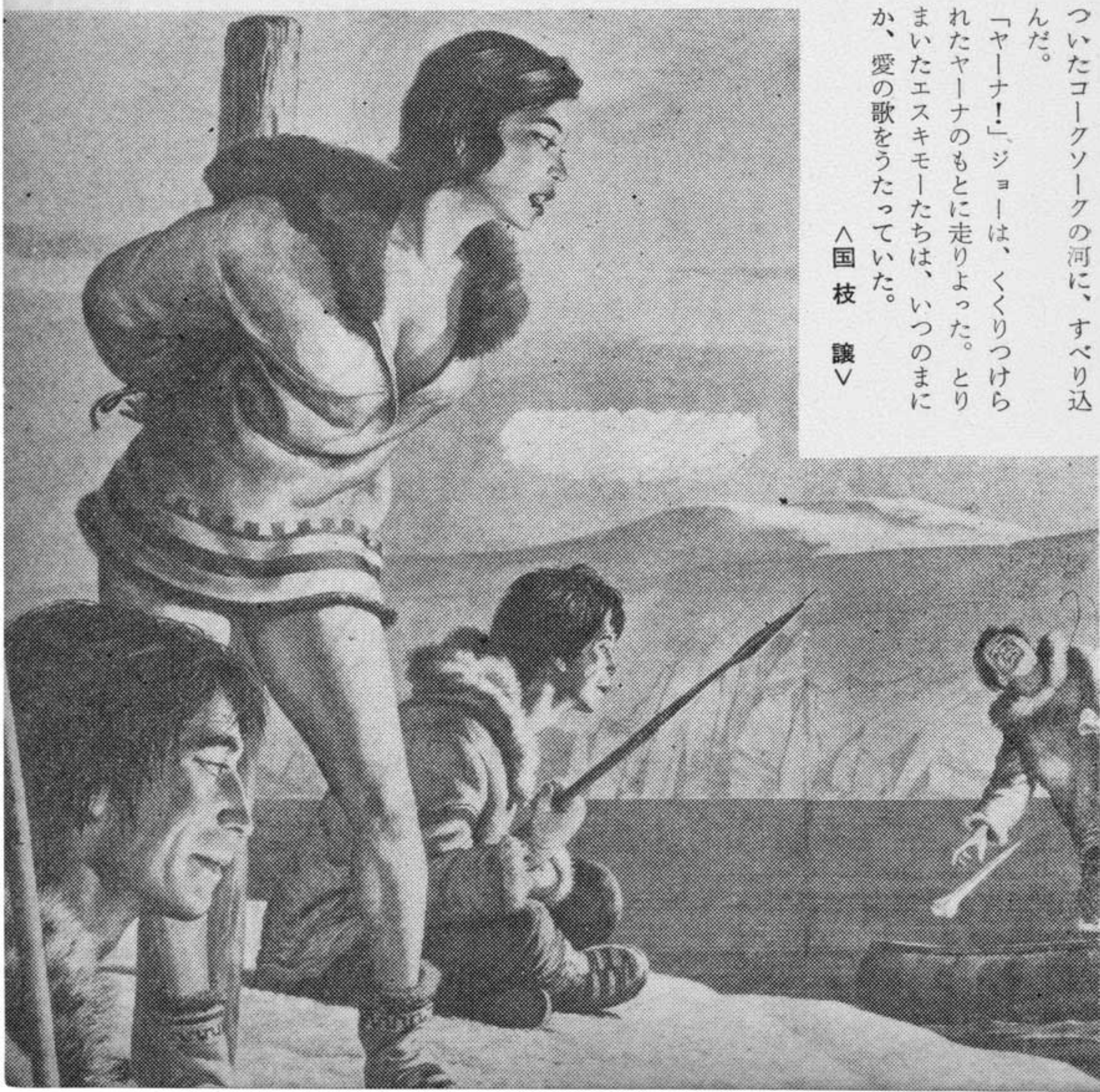
そのとき、ジョーの小舟が処刑時間の緊張した空気を破った。親父は、ラッコの骨で作ったオノをふりあげ、今度こそ息の根を止めてくれようとばかり、ジョーの小舟に立ち向かった。

死闘は数分間つづいた。酔った親父の足がよろめいた瞬間、グラッとたたむいた小舟がひっくり返った。「わあっっ」凍り

ついたコークソークの河に、すべり込んだ。

「ヤーナ！」ジョーは、くくりつけられたヤーナのもとに走りよった。とりまいたエスキモたちは、いつのまにか、愛の歌をうたっていた。

△国枝 譲△





東都映画は、最近の製作不振から、大胆に

1

エログロー辺倒に方針を変えたかいあって、しだいに業績をあげていったが、なんとといっても、グラマー・スター三笠はるみのボリュームが、ファンを悩殺するのに十分であった。

熱っぽい空気がスタジオ内にみなぎり、クランク中の「脱獄者の復讐」の中でも、三笠はるみが、その豊かな肉体を惜し気もなくさらしてのリンチ場面とあって、所員は、この日ばかりは、何かと用事を見つけては第二スタジオに入ってくる。バス・タオルに身を包



ギ

ロ

チ

ン

台

の 美 女

重山規夫・江馬美久え

み、艶然とタバコをくゆらしながら出をまつ三笠はるみの姿に、異様な興奮がうずまく。シーンは、殺し屋に捕われてリンチを受ける連続三カット。両手をチェーンにくくられて立たされた三笠はるみの情婦役が、同時録音のムチと悲鳴に、静かなスタジオは熱っぽく息苦しいくらいだった。

つづいて水責め、金のありかをしゃべらぬ情婦に、殺し屋は、もちまえの残忍さをむき出しにしてナイフをふりあげた。

血のりの飛び出す仕かけナイフだ。そのナイフが豊かな乳房に突き刺さる。

「ギャーッ」

一瞬、三笠はるみは叫んだ。深く突き刺さったナイフが、死のけいれんにうごめく。

「どうした？」

あまりに真に迫った演技に、監督をはじめスタッフがかけよった。

「大変だッ、死んでいる」

三笠はるみは虚空をつかんで絶命していた。仕かけナイフがどうして本モノのナイフとすりかえられたのか。殺し屋の





男優は、その役柄に似ず、はるみの死体にながって泣きわめいた。

2

三笠はるみの不慮の死によって、一躍、スターになったのは、はるみのライバル桂木伸子だった。

「桂木さん、あたしです。安西です」
豪華なグリーンマンションの一室に、夜

なか、酒を飲んで訪れたのは、照明係の安西だった。

伸子は、シャワーを浴びたばかりのネグリジェ・スタイルで、安西をひき入れた。

「あれほど言っておいたのに、あなたは、無神経よ。犯人がスタジオ内にいるというので、当局は、あなたにも目をつけているのよ」

伸子のあけすけな言葉に、安西は肩をすくめて頭を下げた。光線のぐあいと顔に浮かんだケロイド症状が、悪魔のようだった。

「桂木さん。お約束どおり、あたしはちゃんとナイフをチェンジしただけなんです。この二、三日、いくら電話しても留守だ。それも居留守とくりゃあ、ちっとは、あたしも考えたくりますよ」

伸子は、とんでもない男に、三笠はるみの抹殺を頼んだものと後悔した。金だけでは永久に黙っているような男ではなさそうだ。

「いくらなの？　あまりないわ」

ベッドに腰を下ろした伸子は、ネグリジェのホックをはずして、なまめかしいポーズをつくりながら、安西の返事をまった。

「一本。あんたにとったら一カ月のギャラの半分だろうけど」

「一本って、いくらなの、十万？」

「ふん、とぼけるのが上手だよ。百万さ」

突然、伸子が笑った。妙にひきつった表情に、はるみを殺させた残忍さが、ありありと見えた。

「おかしいのか？」

「いいわ。手を打つわよ。でも、キャッシュは二十万かな。残り八十万円は、あたしのからだで払ってあげる」

「たいそう自信のあるいい方だぜ。すると、一回いくらにつくわけだい」

「フフ、いやあねえ」

伸子は、安西をひきよせた。柄にもなくふるえている。こんな男に一生つきまとわれてはたまらない。こんどは、私自身がこの男を殺せばいい。

「これから、うまくいくわね」

安西はとまどいながら、伸子の肉体をまさぐりはじめた。



3

桂木伸子は、三笠はるみ以上に所内を泳ぎ回った。監督はいうに及ばず、将来性のある助監督にも、コネをつけるために、肉体を張った。

この伸子の淫行に、安西が黙っているはずがなかった。マンションにもおらず、たとえ所内であっても、逆に見下げるような態度をとって彼を避けていたが、一度狂った嫉妬の炎は、ついに、伸子がマンションに帰ったところを、安西はつかま



えた。

「まだ、これ以上に、あなたは、何を要求するの」

平然とそりかえる伸子に、安西は飛びかかった。ひき裂いた下着から、むっちりとした白肌がヌメヌメと光った。

「売女！　こうしてやる」

「ヒューッ」

髪の毛をたばねて床をひきずり回す。

「映画のつもりでな、たっぷり痛めてやるぜ」

「わあーっ、止めてーッ」

ヒ腹をけられて、伸子はうずくまった。ぐいぐいっと爪先で、乳房や腹をひねられて絶叫する。

安西が、グラスの破片をふりあげ、伸子の顔に突きつけたとき、彼のからだは、強烈なパンチを食ってすっとんだ。

「誰だッ」

安西が起き直って、相手の男にふりむいた。

「チエッ、監督さんでしたか」

「帰るんだ。明日からこなく

ともいいよ」

伸子は呻きながら監督にすがりついた。

「あたし、安西に殺されるッ」

「大丈夫。しかし、今度の映画では、最後に君は殺されるがね」

（殺してやる）

安西は、マンションの帰途、桂木伸子の殺害を考えた。

4

翌日は、「脱獄囚の復讐」のラストシーンだった。白状しない情婦を、ギロチン台に乗せて、最後のチャンスを与える大詰めだ。

殺し屋に扮する男優は、三笠はるみの事件以来、すっかりおびえて、いささかノイローゼ気味で、とても、殺し屋の凄味はでなくなっていた。

それにひきかえ伸子は、昨夜のことは少しも意に介さないごとく、いつものように愛想よく、奔放な演技に終始した。

「どうしたの、ちっとも元気がないのね」

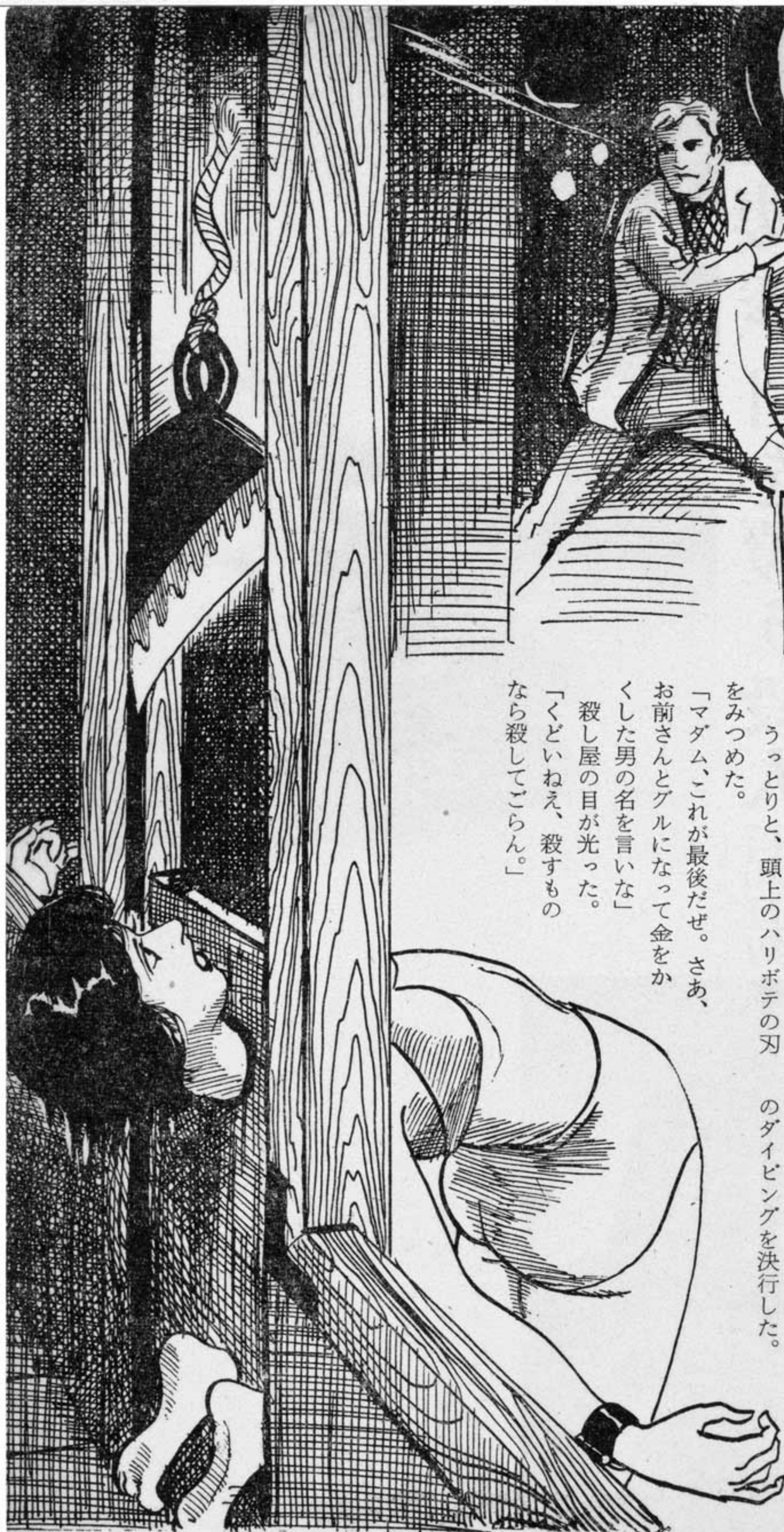
みずからギロチン台にからだを入れ、殺し屋をうながす伸子に、

「三笠さんの断末魔の顔が、あれから、チラついて、とてもダメです」



「フフ、しっかりなさいな、もし、よければ、今夜、あなたを食事にさそってよ」
さて、いよいよ本番である。ギロチン台に首を差し入れた伸子はうっとり、頭上のハリボテの刃をみつめた。
「マダム、これが最後だぜ。さあ、お前さんとグルになって金をかくした男の名を言いな」
殺し屋の目が光った。
「くどいねえ、殺すものなら殺してごらん。」

取っ手が引かれ、鋭い金属音を残して、サッとギロチンが伸子の首に落ちた。
「ギャーッ」
一瞬、血が吹きとび、ころりと伸子の首が転がった。安西の狂気の姿がそれを追って死のダイビングを決行した。



凄惨、目を覆う殺人現場



刑事生活二十年のベテランでさえ、殺しの現場に立ち会ったと、その凄惨な光景に、目を覆うことがある。ことに、凶器が刃物や鈍器の場合は、あたり一面に鮮血が飛び散り、虚空をつかんだ手と、恐怖と絶望に無念そのものの形相に目をむいた姿は、まさに鬼畜の犯行を思わせるのに十分だ。

ところが、これが強姦殺人となると、殺人現場も妙にいろいろなくなってくる。両肢を大の字に開き、絞殺であればそう残酷さもなく、それにだいたひ下半身を露出しているの、グッと息づまるような妖気がただよう。

以下、写真を追ってみよう。

左上の写真は、昭和三十年の夏、名古屋で起こった女事務員殺しであるが、典型的な強姦殺人である。ひき裂かれた下着、たっぷり時間をかけて犯した揚句に扼殺しているが、これを見





ても、いかに変質者によるこの種の殺人が多いかがおわかりになると思う。

まして、これから開放的な夏にむかい、どうしても女性は薄着になりがちになる。それが、必要以上に胸、腰を露出するので、いきおい刺激するようになり、暗い夜道の一人歩きは危険きわまりないことになる。次ページの左上の被害者は、やはり会社の帰りに映画を見、自宅への夜道を歩いているとき、尾けて来た十八歳の少年に背後から抱きつかれ、空地にひっぱり込まれて扼殺されたうえに凌辱されたものであるが、犯人は、被害者を映画館からずっとつけて来





ているのだ。犯行後、少年は、被害者の腰つきにムラムラとしてつけて行ったのだといっている。

この点、アメリカの三葉の殺人現場は、いずれも、いま流行のパードボイルド型の殺人で、ギャングの情婦たちである。

凶器がピストルのせいかさほど残虐さは見られないが、一発必中の殺し屋に狙われた女こそ災難だ。

右上のカーボーイの姿の女は、ビート族の姐御で、仲間割れから、二人の少年に射殺されたものである。ピストルを豊かな乳房の谷間にさし込んでおいたあたりは、なかなかリッパな姐御である。

前ページの左下は、かつてミス・アメリカであったジェニス・ドレイクという女で、ブロンドの美人であ





ったが、ギャングの情婦になつて凄味も増し、売春屋のボスになっていた。それが突然、車中で頭部と胸に一発ずつ射ち込まれて殺された。犯人はわからない。噂では、彼女によってモヒ中毒になった売春婦の仕業だろうといわれている。



狂恋吉弥責め

団 令 太 郎
小 田 利 美・え

松平直方公の江戸下屋敷に、こんど国表から江戸詰めになった小姓の桑川吉弥は、十六歳眉目秀麗、国表の女たちが競って奪い合いにうき身をやつしたところから、公は吉弥の身を心配して江戸詰めにしたのである。が、女心は、国表も江戸も変わりなく、吉さまでなくては日も夜もあけぬていたらくに、当の吉弥もほとほと困っていた。



公の愛妾お百合の方は、今まで
も何人かの小姓を籠絡しては情事
のバレルのを恐れて側近の家来に



の話を聞こう」
吉弥は上気して、
うつむいたままふる
えていた。
「さあ、その
ようにもじも
じせずとも、
それが男のネ
ヤのはじらい
と申すのな

も踊りを止めて、
こちらに参り、吉弥

な夜な、殿のお相手をしたそうじゃの、聞かしや。みな

きよせる。

「ホホホ、吉弥、国表の噂によれば、そなたは夜

お百合の方は、そっと、吉弥の手をあわせてひ

きよせる。

「吉弥、そなたは、あの踊りをみても、なんとも

ないのかえ。男なら、これ以上はがまんができ

ぬはずなのに……」

お百合の方は、そっと、吉弥の手をあわせてひ

きよせる。

「吉弥、そなたは、あの踊りをみても、なんとも

ないのかえ。男なら、これ以上はがまんができ

ぬはずなのに……」

お百合の方は、そっと、吉弥の手をあわせてひ

きよせる。





利

あつという間もあらばこそ、ひごろお百合の方の腰元として日のあたらぬ思いに悩んでいたみよが、尻はしよりをして、入って来た。
「ここはたしか男の湯殿？」

「シーッ、お静かになさいませ。お百合の方さまには内緒のこと。もし吉弥さまと一緒にいたとわかれれば、あたくしは八つ裂きにされてしまいます。吉弥さま、流させてくださいませ。みよは、もう死ぬ思いで……」

なぜ、女は命をかけても自分を慕うのだろうか、恋などというものではない。よってたかって女たちは、自分の童貞を賭けているのだ。みよも、哀れなそのうちの一人だった。

翌日、吉弥は、お百合の方に呼ばれた。いつもとちがって淫らな空気が少しもなく、お百合の方をとりまく腰元たちの姿も、妙に殺氣立っていた。

ら、さあ殿はどうなさるのじゃ」

残忍なお百合の方の面差しが、妖しく吉弥を責めつづけた。

その夜、吉弥は、女たちに解放された気安さから湯殿に入った。ゆっくりと湯にひたっている間が、吉弥にとっては幸せだった。

「吉弥さま、あたくしに流させてくださいませ」

「吉弥、昨夜、みよは、そなと湯殿にいたというのはまことか」

お百合の方の

険しい目が、吉弥の胸に刃を突きたてるごとく光った。

みよの姿はなかった。吉弥は、

問いつめられてとまどった。すべてがお百合の方の仕組んだワナのように思えた。

「はい。申しわけございませぬ」

「そなた、家中の不義が、どのようなお仕置きをうけるか知ってのことか」

吉弥は、いつの間にか、みよとの不義に仕立てられているのだ。



利

「お言葉を返すようですが、不義などは……いっこう、なんと申されましても」

「うぬ！ 顔に似ず強情なものよ。楓、みよを連れて来やッ」

肌をあらわにしっかりとくぐられたみよが、二人の腰元にひきずられてあらわれた。



「どうじゃ、吉弥、いと

しい女ではないか、一言、昨夜のつづきに声をかけてやらぬか」

青ざめたみよは吉弥をみすえて、
「吉弥さま、お方さまの申したこと

はみなウソでございます。どうぞ、お許しを……」

二人の腰元は、そこまでしゃべったみよの口にサルグツワをかましてひき立てた。

「吉弥、汚れた女の最期をみるのじゃ。楓、みよを」
楓は庭に突き落と

したみよのからだに
馬乗りになると、懐剣
を引き抜くや、グサツと乳
房に突きたてた。

みよは、叫び声とともに
に何か言ったよ
うだったが、空
しく声にならな
かった。

「吉弥、そなたは殺さ
ぬ。しかし、ワラワのい
うことを、そなたのから
だで答えてもらうから、
覚悟をしや」

あっという間に、四、
五人の腰元に手足を押え
られ、かんじがらめにく
くられた吉弥。

「みななもの、今日は、

ひごろ

の吉弥への恨み
のかずかずを、ワラ
ワにかまわず、思う存分
に逐げるのじゃ」

いい終わると、お百合の
方は奥にひき退った。

「わあーっ」

けものように群れあいながら腰
元たちは、吉弥に重なりあい、着て
いるものを剥ぎとってしまった。

ほんのりとかからだ全体に朱をそそ
いでのたうつ吉弥に、目をギラギラ
と光らせて腰元が、一人一人熱く息
づいていった。



残酷にいじめることに、異常な興味を抱き、残忍なまでに荒れ狂うことがある。この夜の腰元たちは、ふだん押えに押えられてい

ローソクで吉弥の肌を焼くものもあれば、縛られて転がっている吉弥の脇の下を羽根でくすぐるものもいる。最後には、つるし上げられた吉弥の裸の上半身にムチ打つものも出て来た。女というものは、美しい若者を、自分ひとりのものとして愛撫できないときは、かえって

る情欲のハケ口を、吉弥を責めることにぶちまけて、夜を徹して、果てることがなかった。



風俗奇譚「旧号の残部が僅少になりました、お早く！」

創刊・臨時特集号 (売切れ)

艶妖特集号 (二〇〇円)

多色刷写真口絵多数

特集・サディズムの種々相

死体に処女を捧げた娘の話

現代女性の変態心理

柔肌を切り裂く男の愛情

回教残酷譚

女の黒髪に埋もれて死にたい

犬によって快楽を求める女他

悦虐特集四月号 (二〇〇円)

多色口絵グラビア口絵豊富

特集・鞭打の心理と実相

焼け火箸の快楽死

人間と蛇との交情

女の死体に憑かれた男

地獄尼僧院

ピストルを持ったサディスト

変態名画館——ほか

春の臨時増刊号 (二五〇円)

(妖異猟奇艶笑特選25編)

特写グラビア頁精巧写真口絵

変態性欲考

猫の怨霊

若い女の生胆をとる老婆

会員三百人の男色クラブ

魔の十三号室

吸血鬼譚——ほか

耽美法悦特集五月号 (二〇〇円)

多色口絵グラビア多数

特集・同性愛の種類と実際

マゾッホの被虐待契約書

女の切腹とその心理

女の人肉を食べた男

性的イレズミ考

マゾヒストの美酒

ベルトの魅惑——ほか

嗜虐陶醉特集六月号 (二〇〇円)

多色口絵グラビア16頁ほか

特集・フェチズム(淫物症)

マゾヒストの手紙から

浣腸に魅入られた女

マゾ妻々二代目矢作ヨネ

八十七個の洗濯バサミ

レスボスの日

変態見世物——ほか

画報・風俗奇譚① (一八〇円)

妖美凄絶の迫真緊縛写真百数

十葉に加えて変態名画大絵巻

土居啓子無残画帳

小田利美責め絵アルバム

世界怪奇無残譚

変態猟奇名画集

残酷なる女たち

東西快楽的入浴風景——ほか

夏の臨時増刊・薫風特別号 (一八〇円)

多色刷特写口絵・無残石燈

グラビア—荒縄と岩、首つり

とくすぐりをはじめ百数十

葉におよぶ凄絶緊縛写真は

愛好家待望のコレクション

特集・世界怪奇残酷秘話

十代の悪の女王

白肌責め絵図

肉体壁画を彫る男

男性チョン切り事件史

尼僧強姦魔・大米竜雲

マツチの火で毛を焼いて

サド男マゾ女の無理心中

写真物語責め写真家とモデル

絵物語・無法狼、娘しばり

そのほか変態性欲犯罪実録集

怨羞無残特集七月号 (一四〇円)

多色口絵・落花図絵

女のプリズムほか

グラビア—変態受縛

組上の白魚・吊ら

れる女ほか数十葉

特集・食人症

サディズムの極「食

人症」

食人国物語

人肉料理を食べた人

びと

ソドム族の告白記

死を賭けた遊戯

白肌をほう毛虫

私がマゾヒストにな

ったのは

ムチの下で陶醉する女

変態残酷物語——ほか

秘蔵版・風俗奇譚

本誌発刊以来秘かに想を練り、いよいよ完成し、ここにお知らせすることができるとになりました。

さて本誌の内容、開巻第一ページを飾る折り込み多色口絵、見事なブライトイを盛るグラビヤページ、悦虐写真はこれまた絶対の圧巻

八月十日発売V予約受付中
八価二〇〇円V

画報・風俗奇譚 第2集

定価 一八〇円

昭和三十五年七月五日印刷

昭和三十五年七月十五日発行

編集発行人 高倉一

印刷所 刊行会印刷部

東京都千代田区神田神保町一の六七

発行所 文献資料刊行会

電話東京(291)二九一八番